

命を守られない子ども時代 -Unshielded Childhood- B'Tselem（ベツェレム）による調査報告

訳者から

イスラエルの人権団体「B'Tselem（ベツェレム）」が 2026 年 6 月 29 日に公表した **Unshielded Childhood: Palestinian children and teenagers killed by Israel in the West Bank in 2025**（命を守られない子ども時代：2025 年イスラエルによって殺害されたヨルダン川西岸地区のパレスチナの児童と青少年たち）の全訳です。

2023 年 10 月 7 日以来、イスラエルはヨルダン川西岸地区におけるパレスチナ人の生活のあらゆる側面に広範な攻撃を仕掛け、最も基本的な権利である「生命の権利」までも含む、あらゆる人権を侵害し続けています。2026 年 6 月 7 日までに、イスラエル軍は同地域で 235 人のパレスチナの児童や青少年を殺害し、さらに入植者によっても 5 人が殺害されました。本報告書は、2025 年の一年間に、ヨルダン川西岸地区でイスラエル軍に殺害された 54 人のパレスチナの児童と青少年（2 歳から 17 歳まで）に着目して、彼らが不条理に死に至るまでのプロセスを近親者あるいは目撃者等の証言により記録したものです。愛する子どもを殺されたばかりか、そのご遺体をイスラエル側が拘束したまま返還しておらず、きちんとしたお別れのできていないご家族も少なくないことも証言の中にあります。

イスラエル軍によるパレスチナの子供や青少年に対する前例のない規模の殺害は、現在ヨルダン川西岸地区で実施されている、過去よりもさらに許容度が高められた無謀な発砲方針の結果と言えます。責任者たちはこの方針を隠そうとはせず、むしろ体系的な全面的支持を与えています。これは、中央軍司令官アヴィ・ブルースが「我々は 1967 年以来、これほどの殺戮を行っていない」と公然と自慢した発言にも表れています。ブルースの「殺害された者の 96% がテロに關与していた」という主張は、[パレスチナ人死者のリストをまとめた B'Tselem による死亡状況の記録](#)¹⁾によって、あからさまな嘘であることが示されています。この記録によれば、イスラエル軍に殺害されたパレスチナ人の殆どが、武装組織の構成員などではなく、殺害された時点で何の危険も及ぼしていなかった民間人であり、イスラエルの体制が日常的に「テロリスト」や「テロ活動家」と認定している実態が見えてきます。この認定により、事実上、殺害に対する制度的な不処罰が生み出されているのです。

イスラエルの体制は、こうした殺害を事後に正当化するだけに止まらず、加害者の責任を問うことも、ほぼ完全に避けているのが実態です。イスラエルの人権団体「Yesh Din（イエシュ・ディン）」のデータによると、[2023 年 10 月の戦争開始以来、ヨルダン川西岸地区での殺害事件に関して起訴が行われた事例は確認されていません](#)²⁾。しかし、事前に保証された免責と、こうした犯罪が犯された後の実質的な責任追及の欠如は、法的な領域に止まるものではありません。それらは、パレスチナの子どもたちの殺害に対するイスラエル国民の無関心から生じる「公的な不処罰」にも反映されています。こうした背景の中で、ヨルダン川西岸地区におけるイスラエル軍による児童殺害の急増は、2023 年 10 月以降、イスラエルがガザ地区に対するジェノサイド的な攻撃の一環として殺害した 2 万 1,000 人以上のパレスチナ人児童の問題と切り離して考えることはできません。この想像を絶する数字でさえ、殺害政策の変更を求

める世論の要求につながらなっていないという事実は、イスラエルによるパレスチナ人の非人間化がいかに進んでいるかを如実に示すものです。このような不処罰や世界の人々の無関心さこそが、子どもを殺害することが日常茶飯事となっている現実を可能にしているのだと言わざるおえません。

本翻訳は、B'Tselem（ベツェレム）から許諾を得て行っていますが、本翻訳内容に対する B'Tselem の関与や校閲は一切受けていません。また、翻訳された本報告書の内容に関する責任は、翻訳者が単独で負うものです。

1) <https://statistics.btselem.org/en/all-fatalities/by-date-of-incident?section=overall&tab=overview>

2) <https://www.theguardian.com/world/2026/aug/06/israel-charges-west-bank-settler-killing-palestinian-activist-awdah-hathaleen>

イスラエル検察は 2026 年 8 月 6 日、2025 年 7 月にパレスチナ人の活動家アウダ・ハザリーン氏を銃撃して死亡させたとして、イスラエル人入植者のイノン・レビ被告（33）を「過失致死罪」で起訴。パレスチナ自治区ヨルダン川西岸では入植者によるパレスチナ人への暴力事件が相次ぐが、パレスチナ人殺害の罪でイスラエル人に責任を問うのは、この 10 年間で初めての試みである。B'Tselem によると、イスラエルは 2023 年 10 月以来、ヨルダン川西岸でパレスチナ人少なくとも 1100 人を殺害。うち 37 人はイスラエル人入植者による殺害だった。アウダ・ハザリーン氏はオスカー賞を受賞したドキュメンタリー映画『No Other Land』の撮影の支援者の 1 人。

-
- ・ B'Tselem（ベツェレム）の web ページは以下：<https://www.btselem.org/>
 - ・ 原文（Unshielded Childhood: Palestinian children and teenagers killed by Israel in the West Bank in 2025）の PDF は以下：
https://www.btselem.org/sites/default/files/publications/202606_unshielded_childhood_eng.pdf
 - ・ 日本語文中の [] は翻訳者が補足説明として付け加えました。
 - ・ 日本語文中の黒いアンダーラインに対応する英語箇所をクリックすると、詳しい解説が読めます。

命を守られない子ども時代 -Unshielded Childhood-

B'Tselem (ベツェレム) による調査報告



(2025年にヨルダン川西岸地区でイスラエルに殺害されたパレスチナの54人の児童と青少年たち。写真はご遺族の提供)
イスラエルによって殺害されたパレスチナの児童と青少年たち
ヨルダン川西岸地区 | 2025年

https://www.btselem.org/sites/default/files/publications/202606_unshielded_childhood_eng.pdf

背景

2023 年 10 月以来、イスラエルはヨルダン川西岸地区におけるパレスチナ人生存のあらゆる局面に、大規模な攻撃を繰り返している。これには、広範かつ組織的な人権侵害が含まれており、とりわけ最も基本的な「生命の権利」が侵害されている。軍や入植者民兵を含むイスラエル政権の武装勢力による、致命的で抑制のきかない暴力は、イスラエル軍によるパレスチナ人の殺害、特に児童・青少年の前例のない殺害の増加を招いた。2023 年 10 月 7 日から 2026 年 6 月 7 日の 2 年 8 か月の間に、イスラエル軍はヨルダン川西岸地区で 235 人のパレスチナ人の児童・青少年 [18 歳未満の者を指す] を殺害した。さらに入植者によっても、5 人が殺害された。この調査を行った 2025 年に限った場合、イスラエル軍はヨルダン川西岸地区で 54 人のパレスチナの児童・青少年を殺害している。

イスラエル軍によるパレスチナ人の児童・青少年へのこの前例のない規模の殺害は、現在ヨルダン川西岸地区で実施されている、過去よりもさらに大きく許容された、見境のない発砲規則の結果である。責任者たちはこの方針を隠そうとはせず、むしろ、それを組織全体で全面的に支持している。これは、中央司令官アヴィ・ブルースの発言にも表れており、彼は「我々は 1967 年以来、これほどまでに殺戮を行ったことはない」と公の場で自慢した。また、「殺害された人々の 96% がテロに関与していた」とのブルースの主張（これは、B'Tselem（ベツェレム）がまとめたパレスチナ人死者リストに記録された死亡状況の資料から、あからさまな嘘であることが暴かれている。）も、イスラエル軍が殺害したパレスチナ人たちを、武装組織の構成員ではなく、殺害時点で何の危険性も示されなかった民間人も含め、イスラエル当局が日常的に「テロリスト」または「テロ活動家」として認定している実態を反映している。このような認定は、事実上、殺害に対する制度的な不処罰を生み出している。

イスラエルの体制は、こうした殺害を事後に正当化するだけに留まらない。加害者に責任を問うこともほぼ完全に避けている。人権団体 Yesh Din（イエシュ・ディン）のデータによると、2023 年 10 月の戦争開始以来、ヨルダン川西岸地区での殺害事件に関して起訴が行われた事例は確認されていない。しかし、事前に保証された免責と、犯罪発生後の実質的な責任追及の欠如は、法的な領域に限定されたものではない。これらはまた、パレスチナの子どもの殺害に対するイスラエル国民の無関心から生じる「公的な不処罰」にも反映されている。こうした背景において、ヨルダン川西岸地区のイスラエル軍による子どもたちの殺害急増は、2023 年 10 月以降、イスラエルがガザ地区に対するジェノサイド的な攻撃の一環として殺害したパレスチナの子どもの 2 万 1,000 人以上との関連を切り離して考えることはできない。この想像を絶する数字でさえ、殺害政策の変更を求める世論の要求に繋がらなかったという事実は、イスラエルの目から見て、パレスチナ人の非人間化がいかに進んでいるかを示している。こうした一連の過程こそが、子どもの殺害が日常的行動となっている現実を可能にしている。

児童や青少年が殺害された血塗られた歴史

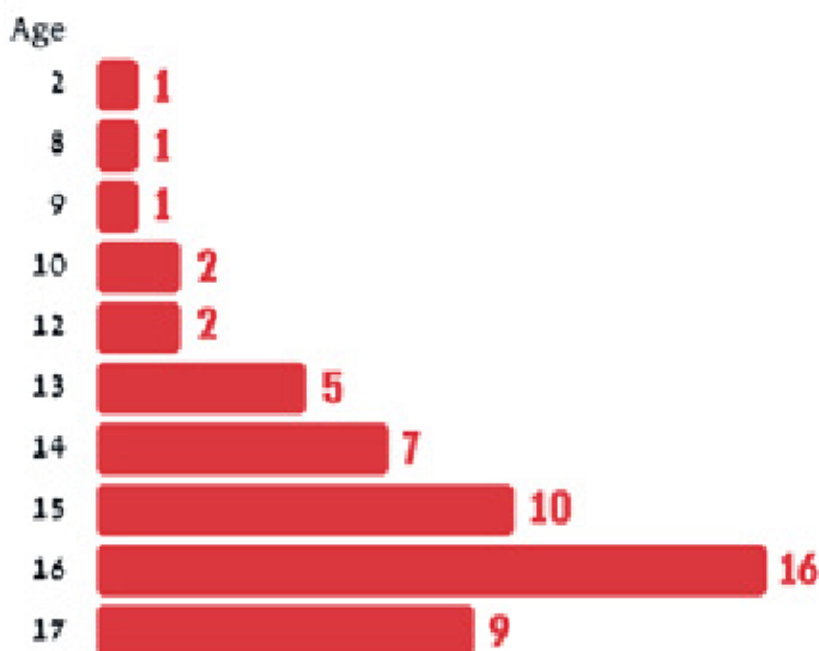
2023 年 10 月の戦争開始以来の殺害の規模は、第二次インティファダの際に記録された殺害の規模を想起させるだけでなく、期間の長さを考慮すれば、その規模を上回っている。2000 年 10 月から 2005 年

2月8日（インティファダの公式な終結と広く見なされているシャルム・エル・シェイク合意が調印された日）の4年半足らずの間に、イスラエル軍はヨルダン川西岸地区で251人のパレスチナの児童・青少年を殺害した。この約4年半の間には、入植者によって5人の子どもがさらに殺害されている。

本調査は2025年に焦点を当てた。この年、イスラエルはヨルダン川西岸地区でパレスチナ人の児童・青少年54人を殺害した。比較として、第二次インティファダの終結日である2005年2月9日から2021年末の約17年間に、イスラエル軍はヨルダン川西岸地区でパレスチナ人の児童・青少年194人を殺害した。この期間中、イスラエルの民間人によって、さらに10人が殺害された。また、B'Tselemが兵士か民間人かを特定できなかったイスラエル人により、それ以外にも2人も殺害されている。2023年から2024年にかけて、児童・青少年の死者数が過去最多を記録した。2023年にはパレスチナの児童・青少年120人が殺害され、そのうち80人は10月7日以降、3か月足らずの間に殺害された。2024年には、児童・青少年89人が殺害されている。

2025年にイスラエルによって殺害されたパレスチナ人の児童・青少年の数は、過去2年と比較して減少したものの、過去20年間で記録された中で最も死者が多かった年の一つであることに変わりはない。パレスチナ人の児童・青少年が年平均13人殺害されていた2005年から2021年の期間と比較すると、2025年の数字は4倍以上に増加している。この年、2歳から9歳の児童3人、10歳から13歳の児童9人、14歳から15歳の青少年17人、16歳の青少年16人、17歳の青少年9人が殺害された。

2025年にヨルダン川西岸地区でイスラエルに殺害されたパレスチナ人の未成年者数（年齢別）

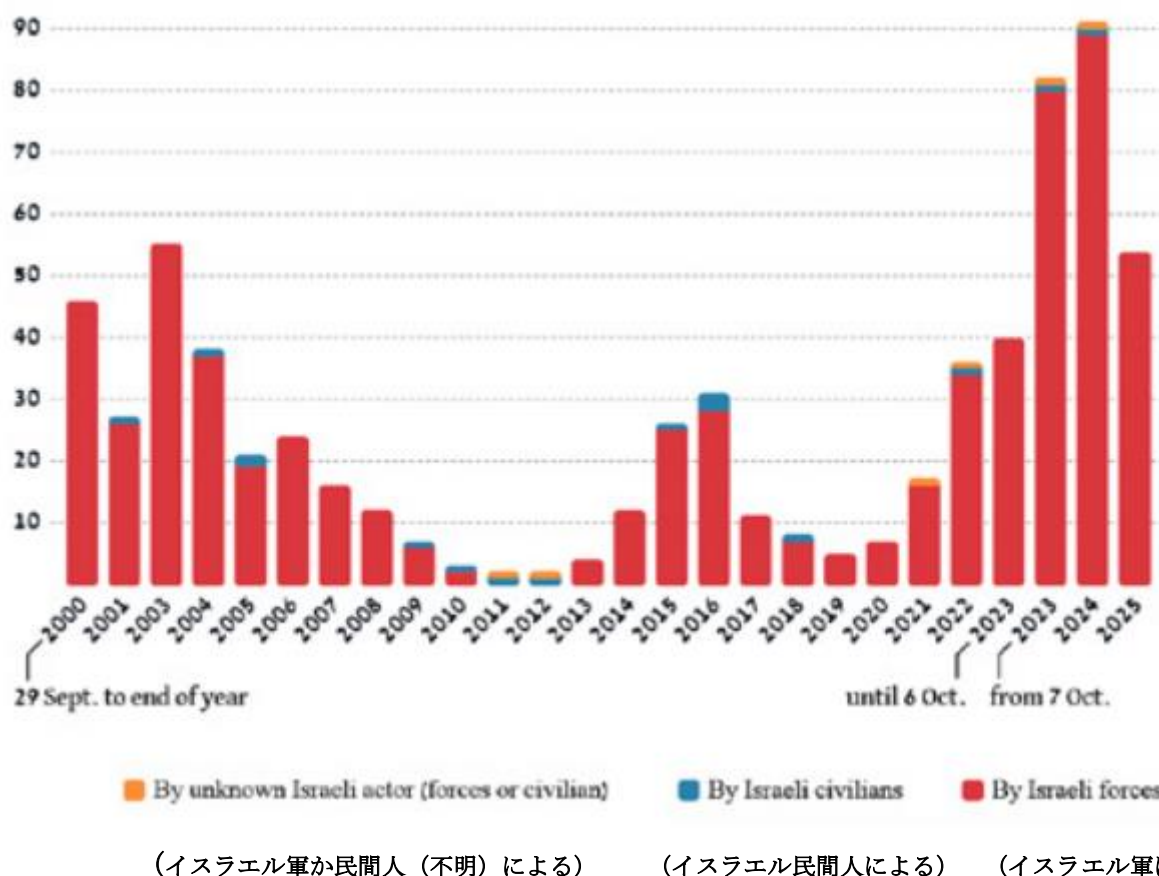


ヨルダン川西岸地区におけるパレスチナ人の児童・青少年の殺害件数の急増は、2022年に始まった。その年、死者数は2021年の16人から2022年の34人へと、2倍以上に増加した。この増加は、2021年

末に軍が発表した発砲規則の緩和の時期に同期している。報道によると、この規則の緩和により、これまでの方針を変えて、兵士は投石者への致命的な発砲が許可された。この新しい規則では、石を投げたと疑われた後、もはや危険を及ぼさない状態の逃走中の個人にも致命的な発砲が許可されたが、これは国際法に違反するものであった。2023 年 10 月 7 日以降、交戦規則はさらに拡大され、死者数が再び急増した。この事態の激化は、報復への渴望と、イスラエルの公の議論におけるパレスチナ人に対する非人間化の進行によって助長された(2025 年 7 月発行の『Our Genocide』所収の「Incitement to Genocide and Dehumanization Since October 2023 (2023 年 10 月以降のジェノサイド扇動と非人間化)」の章を参照)。

2026 年初頭から 2026 年 6 月 7 日にかけて、イスラエル軍はヨルダン川西岸地区で児童・青少年 12 人を殺害した。その中には、タムン村の 5 歳と 6 歳の兄弟 2 人と、ヘブロン市の生後 7 か月の乳児が含まれ、彼らは両親と一緒に乗っていた車にイスラエル軍が発砲して命を落とした。さらに、入植者の 1 人が 14 歳の少年を銃撃して殺害している。

ヨルダン川西岸地区でイスラエルに殺害されたパレスチナ人の未成年者数（年別）



2025 年にイスラエル軍がパレスチナ人の児童・青少年を殺害した事件の詳細

B'Tselem の調査によると、2025 年にヨルダン川西岸地区で殺害されたパレスチナ人児童・青少年 54 人のうち、イスラエル軍から銃撃を受けた時点で銃器を所持していたのは僅か 2 人であった。また、4 人は軍に向けて手製の即席爆発装置（IED）を投げ、1 人はナイフで警察官を襲撃していた。13 人は道路やイスラエル軍の装甲部隊に投石している最中に射殺されたが、投石によるイスラエル側の負傷者は報告されていない。一方、少なくとも 21 人は、近くで投石や爆発物の投擲、実弾の発砲を含む衝突が発生した場合でも、いかなる衝突にも関与していなかった。未成年者 12 人について、イスラエル軍は、彼らが火炎瓶、IED や石を投げて部隊に危害を加えようとしたと主張したが、B'Tselem の調査ではこれを裏付けることも反証することもできなかった。他の 10 代の少年は標的殺害の犠牲となった。殺害された児童・青少年のうち 47 人は銃撃、残りの 7 人は空爆によるものである。

11 人の児童・青少年は、軍の待ち伏せ攻撃において銃撃により殺害された。これらの事件で、2 人は道路での投石の最中に撃たれた。他の 2 人について、軍側は「投石をしていた」と主張したが、B'Tselem の調査ではこれを裏付けることも反証することもできなかった。1 人は、兵士の待ち伏せ場所近くを通過中に撃たれたが、その時点ではいかなる活動も行っていなかった。また、6 人は、軍が「火炎瓶を投げた」と主張した後に殺害されたが、B'Tselem の調査ではそれを裏付けることも反証することもできなかった。

他の未成年者 9 人（少女 2 人を含む）は軍のパレスチナ人居住区急襲中に殺害された。これらの襲撃で、拘束者は出ず、衝突も発生しなかった。うち 1 人は自宅内で、2 人は自宅近くで、4 人は通りすがりに、そして 10 代の少年 1 人は職場で殺害された。この少年について、B'Tselem の調査では、彼が即席爆発装置（IED）を投げようとしたという軍の主張を、裏付けることも否定することもできなかった。

4 人の未成年者は、拘束作戦中に殺害された。1 人は拘束対象者であり、1 人は作戦中の銃撃戦に巻き込まれ、1 人は軍のジープに投石し、もう 1 人は偶然に通りがかっただけだった。

7 人の未成年者は空爆で死亡した。1 人は IED を仕掛けており、2 人は IED を仕掛けた者と誤って特定され、4 人は自宅の庭や路上にいた際に殺害された。

さらに 2 人の未成年者は、イスラエル軍を攻撃した、あるいは攻撃したとされた後に死亡した。1 人はナイフで警察官を襲撃した。軍は、他の 1 人は兵士を車で轢き殺そうとしたと主張したが、B'Tselem の調査では、これは事実と一致しないことが判明した。その他 18 人の児童・青少年が衝突の最中に殺害された。このうち 12 人は、単なる投石のみの衝突で殺害されていた。8 人は軍や警察部隊に石を投げたが、そのうち 4 人は軍の装甲車両に石を投げた。2 人は兵士による家宅捜索が行われていた住宅に投石し、さらに 2 人は兵士や警察官に投石したが、そのうちの 1 人は、部隊が装甲ジープの中にいた時から投げ始め、彼らが降りた後も投げ続けていた。10 代の若者 3 人はこの衝突に全く参加しておらず、他の 1 人については参加したかどうか不明である。別の未成年者 6 人は、即席爆発装置（IED）の投擲や実弾射撃も伴った衝突の中で殺害された。そのうち 1 人は銃撃戦に参加し、3 人は IED を投擲し、1 人は衝突に

参加しておらず、もう 1 人は兵士に向けてレーザーポインターを照射していた。

残りの未成年者 3 人は、上記とは異なる状況下で死亡した。1 人は検問所で投石中に射殺された。もう 1 人は、軍によると IED 投擲後に射殺されたが、これについて B'Tselem は確認も反証もできなかった。3 人目は、軍によると土でできたバリケード付近の物体に放火した疑いがあるとして射殺されたが、この主張についても同様に確認も反証もできなかった。

医療処置の拒否と遅延

13 人の児童・青少年が関与した 4 分の 1 の事例で、イスラエル軍は、医療チームや地元住民が負傷者のもとに駆けつけ、応急処置を施したり病院へ搬送することを妨害、または完全に阻止した。少なくとも 4 件の事例では、数分間に渡り立ち入りを阻止し、その中には、負傷者が搬送された診療所に兵士が突入して、病院への移送を妨害していた。4 件の事例では、20 分から 40 分という長時間に渡って立ち入りが拒否されていた。さらに 5 件の事例では、立ち入りが拒否された時間は不明であった。B'Tselem が記録した少なくとも 9 件の事例において、兵士たちは、住民や医療従事者を負傷者から遠ざけるために、空に、あるいは住民や医療従事者に向けて実弾を発射していた。

兵士が自ら負傷者を現場から搬出した事例では、パレスチナ人の住民や医療チームへの立ち入りが完全に拒否されているため、犠牲者が死亡を宣告される前に軍が何らかの医療処置を施したか、あるいは命を救うための他の試みを行ったかについては、不明のままである。

遺体の引き渡し拒否

2026 年 4 月中旬の時点で、イスラエルは依然として遺体 54 体のうち 18 体を保留しており、遺族が遺体を埋葬し、別れを告げることを妨げている。これは、国際法に反するイスラエルの長年の遺体引き渡し拒否政策の一環である。遺族が愛する人を埋葬し、追悼の儀式を行い、墓参りをする権利を否定されることは、計り知れない苦しみをもたらし、特に犠牲者が児童・青少年である場合には、その苦しみはさらに耐え難いものとなる。

殺害された児童と青少年たち

以下の章では、殺害された児童や青少年の物語を、目撃者や遺族の証言、および各事例に関する B'Tselem の調査結果とともに紹介する。

ムタズ・アフマド・アブド・アル＝ワハブ・マダニ（16 歳）

アスカール難民キャンプ、2025 年 1 月 5 日



2025 年 1 月 5 日、軍用ジープがアスカール難民キャンプに侵入した。16 歳のムタズ・マダニを含む若者たちがジープに投石し、そのうちの 1 人が即席爆発装置（IED）を投げつけた。兵士たちはその若者たちに向けて発砲し、マダニが狙撃された。彼はナブルスにあるラフィディア病院に搬送されたが、そこで死亡が確認された。

ムタズの母親ファティマ・マダニ（52 歳、4 人の子どもの母）は、2026 年 3 月 16 日に行った証言の中で次のように述べた。

2025 年 1 月 5 日（日）午前 7 時頃、私はムタズを学校に行くために起こしました。彼はすぐに起きてシャワーを浴びました。息子は整頓と清潔さを大切にしており、いつも前日の夜に服や持ち物を用意していました。シャワーを浴びた後、彼は私にキスをして家を出ました。

息子は出かける前に、友人たちとファタハ結成記念の祝賀会に参加するため、ナブルスの市街地に行く予定だと話し、「みんなで遊んでシャワルマを食べるから、帰宅が遅くなるかもしれない」と言ったので、授業や技術の試験があるから遅くまで出歩かないようにと諭しました。彼は「試験は簡単だから、良い点数が取れるよ」と答えました。

その日の午後 3 時半を少し過ぎた頃、息子に電話しました。息子は友達と一緒にキャンプにいたいと言い、私がちょっとした買い物を頼むと、すぐに届けてくれ、お小遣いをねだりました。私はその朝、すでに渡したばかりだと指摘しましたが、息子は「今日は甘やかしてくれるって約束したじゃないか」と答えました。そして、お金を渡すと、嬉しそうにニヤリと笑いました。

その日の夕方、午後 6 時半頃、私の姉妹と娘のナジャが遊びに来ました。彼女たちが帰った後、タル・アスカール付近に軍隊がいるという話を耳にしました。私はムタズに電話して、どこにいるのか尋ねた。息子は、大好きなホットドッグを買いにキャンプに来ていると言ったので、私は、キャンプには軍隊がいると伝え、息子は、いつものようにすぐに家に帰ると答えました。

しかし、彼は二度と帰って来ませんでした。何度も電話しましたが、息子は出ませんでした。私は夫と息子のムラドにそのことを伝え、2 人は彼を探しに出かけました。午後 7 時 40 分頃、メッセージアプリ

「テレグラム」でタル・アスカール地区で誰かが負傷したという報告を目にしたので、私は夫とムラド、ムタズの友人の母親に電話をしました。その母親は「彼は家にいない」と答えました。その後、誰かが殺されたと知り、私は恐怖で震えました。なぜ息子は帰っていないのか？なぜ電話に出なかったのか？

息子のムラドから電話があり、ムタズが見つからないと言われたとき、私は誰かが殺されたと伝えました。ムラドは、救急隊員が犠牲者は 22 歳の男性だと言っていたと、私を安心させようとしていました。その直後、夫の弟がやって来て、軍がムタズを連行し、ひどく殴打したため、彼は病院に入院していると教えてくれました。

私はすぐに服を着て、夫と一緒に車で病院へ向かいました。夫がそこで働いている友人に電話をしたところ、ムタズが亡くなったことを知りました。とてつもない衝撃に、私は気を失ってしまいました。

病院で目を覚ましたが、まだ信じられませんでした。息子に会わせて欲しいと頼みました。息子は薄いシーツをかけたベッドに横たわっていて、蘇生処置の後でシャツは着ていませんでした。首の下と胸に傷がありました。私は息子を抱きしめて、その匂いを嗅ごうとしましたが、引き離されてしまいました。

私は家に連れて帰ってもらいました。以来、私たちの生活は喪失の痛みと数々の思い出に支配されています。その痛みは日ごとに深まり、息子への想いはますます募るばかりです。今では、夫と 2 人きりで家にいます。ムタズは私たちがとても甘やかして育てた愛しい末っ子であり、まだ家に住んでいる唯一の家族でした。彼の兄のムラド（32 歳）と姉のナジャ（24 歳）は結婚しており、兄のムハンマド（30 歳）は 12 年も刑務所に収監されており、ムタズこそが、家で私のそばにいてくれた存在だったのです。

ムタズは私たちの全てでした。愛情深い子で、何でも手伝ってくれました。特に、夫が長年病気を患っているため、彼の助けは大きかった。息子は家の中の色々なことをやってくれ、買い物に行ったり、地元の役所やサービス機関とのやり取りもこなしてくれていました。優しく、愛情深い少年で、姪や甥たちに対してもそうでした。特にムラドの娘のロズを可愛がり、彼女にチョコレートを買ってあげるために小遣いを貯めていました。

私たちの生活は一変してしまいました。今年、息子は高校入学試験を受ける予定でした。今では学生たちの話が耳に入るたびに、息子の姿が浮かんできます。

スライマン・ムスタファ・スライマン・カティシャット（17 歳）

タムン、トゥバス地区、2025 年 1 月 7 日



2025 年 1 月 7 日、イスラエル軍によるタムンの町および近隣のアル・ファラー一難民キャンプへの襲撃の最中、スライマン・カティシャットと別の 1 名が爆発装置を仕掛けようとした。軍によると、2 人は武装もしていたという。イスラエル軍用機が彼らに向けてミサイルを発射し、2 人とも殺害された。

スライマンの父親ムスタファ・カティシャット（50歳、4人の子どもの父）は、2026年3月30日に行った証言の中で次のように語った。

2025年1月7日、スライマンは早朝、自宅からそれほど遠くない祖父の家へ向かいました。それから暫くして、住民の間やソーシャルメディア上で、イスラエル軍や特殊部隊が町に侵入した、状況が深刻だ、軍がタムン全域に展開しており、アル・ファラー難民キャンプも襲撃している、といった噂が広まり始めました。

その後、私はスライマンが祖父の家を出たという話を聞きましたが、彼がどこにいるのか見当もつきませんでした。襲撃の最中に多くの人が路上で足止めされ、家に帰れなくなってしまったと聞きました。私も家に閉じ込められ、外に出ることができませんでした。

そして、軍用機が若者たちを攻撃したという噂が広まり、私の息子スライマンも攻撃された若者の1人だったとのことでした。彼は負傷したが、なんとか歩いて少し離れた場所まで逃げ、その後病院へ搬送されたとのことでした。また、別の1人が撃たれて死亡し、軍がその遺体を持ち去ったとも聞きました。

軍がキャンプから去ってすぐ、私はトゥバスの病院へ車で向かいましたが、到着時には、息子は重傷を負って、既に死亡が宣告されていました。私たちは彼を町に連れ帰り、埋葬しました。彼の御霊が安らかでありますように。

スライマンが軍に指名手配されていたことなど、私は知りませんでした。彼は誰からも愛され、親切で道徳心のある子でした。彼は10年生〔日本の高校1年生に相当、15～16歳〕の終わりに学校を中退し、それ以来、農業の仕事に就いたり、私の手伝いをしたりしていました。彼の母親と私はいつも、彼に「自分の身は自分で守れ」と言っていました。

あの日のことは頭から離れません。彼の母親や兄弟姉妹も同様です。私たちは彼を恋しく思っています。どんな行事や祝日も彼の不在を痛感します。彼は善良で、神を畏れる少年でした。彼を失ったことは私たちの心を打ち砕きました。彼が亡くなったという事実を受け入れるのは辛いですが、これが私たちに定められた運命なのです。

彼の葬儀で、私は彼の友人たち - 同年代の若者や子どもたち - が彼のために泣いているのを見ました。彼らは皆、私たちのそばに立ち、私たちを慰めようとしてくれていました。スライマンは純粋な少年でした。私はリビングに息子の写真を飾りましたが、それを見るたびに、まるで彼が今も私たちと一緒にいて、家族に話しかけているかのように感じられます。写真の中の息子の顔は光に満ちています。彼はまだ十代の少年でした。占領軍は私の息子を自分の町、自宅の近所で殺害してしまったのです。

占領軍はその後も私たちを放っておいてはくれませんでした。6か月後、彼らはやって来て、何の理由もなく彼の兄のイズ・ア・ディンを逮捕しました。彼は今も行政拘禁〔軍や治安当局の判断により、正式な起訴や公開の裁判を行わないままパレスチナ人を拘束し、事実上無期限に収容する制度。国際人権団

体や国連は強く批判している。」下に置かれています。占領軍は、子どもを殺害したり家宅捜索を行ったりといった自らの行為を正当化するために、ありとあらゆる口実を用いています。彼の母親、兄弟姉妹、そして私は、いつまでも彼を忘れません。私たちは、彼が生まれた日から亡くなるまで、一緒に過ごした全ての美しい瞬間を心に刻み続けています。彼の母親はいつも彼を抱きしめていました。息子は私たちの心の中に、私たちの血の中にいました。神に、彼を天国へ迎え入れ、来世で私たちと再会させてくださるよう祈ります。

リダ・アリ・アフマド・ブシャラット（8歳）

およびそのいとこ、ハムザ・アメル・アフマド・ブシャラット（10歳）

タムン、トゥバス地区、2025年1月8日



2025年1月8日（水）午前6時頃、イスラエル軍はヨルダン渓谷北部のトゥバス市、タムーン町、さらにアル＝アカバ村を急襲した。アル＝アカバ村では、軍が自宅にいた2人の若者を逮捕した。トゥバスでは、軍が1軒の家を包囲し、捜索対象者の逮捕に失敗した後、その人物に自首を迫るため、彼の兄弟を逮捕した。ムンへの襲撃中、町の南部・東部地域で、イスラエル軍とパレスチナ武装活動家間で衝突が発生した。午前10時頃、イスラエル軍用機がミサイルを発射し、

自宅のそばにいた3人のいとこ（うち2人は子ども）を殺害した。犠牲者は、アダム・ブシャラット（23歳）、ハムザ・ブシャラット（10歳）、リダ・ブシャラット（8歳）である。空爆から約10分後、イスラエル軍が到着し、遺族を現場から追い払い、ある家屋の中に閉じ込めた。その後、軍は家から毛布を取り出し、3人の遺体を包んで持ち去った。遺体は同日遅く、パレスチナ側のDCO〔地区調整連絡事務所〕を通じて遺族に返還された。

約3週間後に軍が公表した調査報告書によると、軍用機は死亡した青年と2人の子どもを、IED（即席爆発装置）を仕掛けた人物として特定したという。軍はこの特定が情報資料に基づいていると主張したが、結局現場からはIEDは発見されなかった。この調査報告書には、「事件当時の身元確認の過程では、彼らが未成年者であることを判断することが困難であった」と記されていた。

リダ・ブシャラットの母親フィダー・ブシャラット（41歳、5人の子どもの母）は、2025年1月29日に行った証言の中で次のように述べた。

2025年1月8日、私は午前6時頃に起きて朝食を作り、子どもたちを学校に行く準備ができるよう起こしました。すると、義妹のイマンが「軍の襲撃のため学校が休校になった」と私に告げました。

午前8時半頃、私は8歳の息子リダを連れて、イマンを訪ねました。リダとイマンの10歳の息子ハムザは、しばらく一緒に遊んだ後、いつも遊んでいる家と家の間にある小さな庭に出て遊びに行きました。その間、義姉と私はおしゃべりをしていました。遠くからドローンのうなり声が聞こえていましたが、

特に軍による襲撃騒ぎの時にはその騒音にすっかり慣れっこになっていました。

午前9時30分頃、私はイマンの家を出て自宅へ向かいました。途中、リダとハムザが遊んでいるのを見かけました。アダムは2人の隣に座って、スマホを見ていました。私が家に入った瞬間、一帯全体を揺るがすような恐ろしい爆発音が聞こえました。すぐに外へ戻ってみると、義姉のイマンと、アダムの母親であるもう1人の義姉アブラーが、血まみれで地面に横たわっている子どもたちのそばに立っているのが見えました。私は駆け寄って息子を抱き上げましたが、頭と首から血を流し、呻き声を上げていました。救急車を呼ぶと叫んだところ、突然、兵士たちが現れ、そのうちの1人がアラビア語で、応急処置をしてやると言いました。兵士たちは、爆発の音で目を覚まして駆けつけたアブラーと彼女の子どもたち、ウバイとイスラーを後退させました。

私は息子の体を抱きしめ続けていましたが、彼が死んでいることは分かっていました。その直後、兵士たちはアブラーの家から毛布を持ってきて、3人の遺体を覆いました。彼らは、応急処置をしようともせず、状態の確認さえしませんでした。子どもたちが死んでいることは明らかでした。兵士たちは遺体を担架で運び去り、その時刻は午前10時30分頃でした。その後、軍はこの地域から撤退し、午後になって、3人の遺体がタイシール検問所のパレスチナ DCO [地区調整連絡事務所] を通じて引き渡されました。私たちは、夕方の礼拝の後で葬儀を行い、村の墓地に埋葬しました。

リダは私たちの唯一の息子で、4人の娘の後に生まれました。彼はクラスで人気者で、甘やかされた息子でした。彼はいつもエルサレムに行きたいとせがんでいましたが、情勢のせいで行けませんでした。息子はよく私にこう言っていました。「車を買って、エルサレムに連れて行って、欲しいものは何でも買ってあげるよ」。彼はとても甘えん坊で、いつも私の手や頭にキスをしてくれました。まだ幼かったけれど、息子の考え方は友人たちよりもずっと成熟しており、私はリダを友人のように感じていました。日々、息子が私からどんどん遠ざかっていくのを感じます。神様、彼がもう戻ってこないと思うと、本当に辛くて、耐え難くて、怖くてたまりません。イスラエル軍はリダを私から、姉妹たちから、そして家庭から奪い去りました。息子は何もしていないのに。彼が死んだのは、兵士の1人がミスをしたか、パレスチナ人を殺してやろうと思っていたに違いありません。その人物が指名手配中の重要人物であろうと、単なる武装活動家であろうと関係ないのです。私がそこで命を落としていたかもしれません。あの爆破のほんの数秒前に、私は子どもたちのそばを通り過ぎていましたから。

マフムード・アシュラフ・ムスタファ・ガルビヤ (15 歳)

ジェニン難民キャンプ、2025 年 1 月 14 日



イスラエル軍が1か月前に同キャンプへの電力供給を遮断後の2025年1月14日、イスラエル軍用機が、ジェニン難民キャンプ内の住宅の庭で焚き火を囲んで座っていた人々にミサイルを発射した。このミサイルにより、マフムード・アシュラフ・ムスタファ・ガルビヤ、武装団体のメンバー4名、他の1名が死亡、さらに4名が負傷した。この攻撃当時、キャンプ内には軍は存在せず、何の衝突も発生していなかった。

マフムードの母親サミラ・ガルビヤ（46 歳、6 人の子どもの母）は、2026 年 3 月 27 日に行った証言の中で次のように語った。

私たちはジェニン難民キャンプの西側にあるアル・アウダ広場の近くに住んでいます。息子のマフムードが殺害された時、パレスチナ自治政府とイスラエルは、イスラエルとパレスチナ自治政府から指名手配されていた抵抗運動の若い戦闘員を逮捕するため、ジェニン難民キャンプで軍事作戦を展開していました。パレスチナ治安部隊がキャンプを包囲し、電気を遮断しました。

2025 年 1 月 14 日、息子が殺害される直前のことです。普段は毎朝、私が家族全員分のインスタントコーヒーを淹れているのですが、マフムードは目を覚ますと、私や姉妹たち、そして自分のためにインスタントコーヒーを淹れました。その日、彼は夕方まで家にいました。停電で寒かったため、近所の人たちは夕方になると庭に集まり、暖を取るために焚き火をしており、子どもたちもやってきて、それぞれが家からお茶やコーヒー、クッキーを持ってきていました。

午後 10 時頃、夫とマフムードは焚き火のそばに座っていましたが、私は 2 人の娘たちと、遊びに来ていた近所の人たちと一緒に家の中にいました。突然、イスラエルのドローンから発射されたミサイルの音が聞こえ、私たちは愕然としました。ミサイルが爆発し、私たちのアパートの窓ガラスが粉々に砕け、リビングルームに座っていた私たちの上にガラスの破片が降ってきました。

皆がひどく怯え、私はすぐに立ち上がって外へ駆け出し、息子と夫が近所の人たちと一緒に座って暖を取っていた焚き火の周りに向かいました。外に出て目にした光景は恐ろしいものでした。しかし、最も私を恐怖に陥れたのは、息子のマフムードが地面に横たわっている姿でした。破片が彼の頭や体に突き刺さり、肉を引き裂いていました。

マフムードは物静かで内気な少年で、友人や近所の人たちが私を訪ねてくると、「一緒にいてね」と励ましても、彼はいつも気まずく感じるらしく、外に出て行ってしまっていました。彼と父親はとても仲が良く、父親が行く所にはどこへでもついていくのが常でした。息子は私たちを笑わせてくれ、姉妹や私に幸せと喜びをもたらしてくれていました。

マフムードは私のスコットランド産の猫をととても愛しており、いつも世話をしていました。特別な餌を持ってきてくれたり、獣医に連れて行ったり、定期的に世話をしていました。悲しいことに、私たちの愛する猫も、息子を殺したミサイルの破片によって命を落としてしまいました。

その夜、近所の他の 4 人の若者も命を落とし、そのうち 3 人は兄弟でした。

マフムードが亡くなってから 1 週間後、イスラエル軍が私たちのキャンプに突入し、全員を強制的に追い出しました。私たちは避難を余儀なくされ、アパートが借りれるようになるまで、国内避難民を受け入れるために開設された避難所で身を寄せるしかありませんでした。現在、夫と娘たち、そして私は、ジェニン市のアル・ハダフ地区で暮らしています。

アフマド・ラシッド・ルシュディ・ジャザール（14 歳）

サバスティヤ、ナブルス地区、2025 年 1 月 19 日



2025 年 1 月 19 日（日曜日）午後 8 時頃、4 人の兵士が軍用ジープに乗って、ナブルスの北西に位置する町、サバスティヤの西側地区に侵入した。兵士たちは 2 発発砲し、数人の住民は何が起きているのか確認しようと通りに出てきていた。

4 人の兵士はジープから降りて通りに立った。約 300 メートル離れた場所では、4 人の少年が幼稚園近くの壁の陰に隠れていた。少年たちは時折、角の陰から顔を出し、兵士たちに向けてレーザーポインターを照射していた。ある時点で、アフマド・ジャザール（14 歳）が角から顔を出して兵士たちにレーザーを当てようとした際、兵士たちは 2 発発砲し、そのうち 1 発が彼の胸に命中した。ジャザールは兵士たちから逃れるように通りを約 15 メートル走ったが、血を流しながら路上に倒れ込んだ。地元の住民が自家用車で彼をナブルスのア・ナジャ病院へ搬送したが、まもなく死亡が確認された。この発砲直後に軍用ジープはその現場を離れた。

サバスティヤの西側地区には遺跡があり、その周辺の店舗は近隣の町々の社会・経済的な中心地として機能し、町の一部の住民に収入をもたらしている。この地域での商業活動やシャヴェイ・ショムロン入植地が近接していることから、住民たちは軍の存在感の高まりや嫌がらせに苦しんでいる。

ハアレツ紙の取材に対し、イスラエル軍は次のように回答した。「事件を受け、軍警察刑事捜査課による調査を開始した。当然のことながら、進行中の調査について詳細を述べることはできない。」しかし、これまでの経験から判断すると、今回の調査も結局は何も結果を出すことなく、軍隊に全く脅威のなかったこの 10 代の少年を殺害した件について、誰も責任を問われることはないだろう。

発砲直後に軍が、それ以上の行動を一切とることなく町を去ったという事実は、そもそも彼らが町に入った唯一の理由は、地元住民を挑発し、それによって兵士たちの立場から見て武力行使を正当化するような行動を引き出そうとしたことを示唆している。これはよく知られた戦術であり、長年「刺激と反応」、「迫害意識の醸成」、「軍の存在アピール」など、様々な名称で呼ばれてきた。ガザ地区での戦争が始まって以来、西岸地区全域で、軍とパレスチナ住民との衝突を引き起こすことを目的とした、このような行動や類似の手法が大幅に増加している。これこそが、イスラエルが日々パレスチナの人々の生活を混乱させ、恐怖に陥れ、何の正当な理由もなく逮捕し、負傷させ、殺害している実態である。

マレク・マハルフェ（46 歳、5 人の子どもの父）は、次のように証言した。

午後 8 時頃、私はサバスティヤ西部のアル・アミダ通りにある自分の理髪店におり、すぐ近くで発射されたと思われる 2、3 発の銃声を聞きました。妻と電話で話していたところ、妻から理髪店から約 300 メートル先に兵士たちがいると言われました。弾丸が家の壁に当たるのを見ました。数人の住民が、町の中心部から西側にある自宅に向かって近づいてくのが見えたので、私は銃撃戦が起きていると伝え、

待った方がよいと説得しました。また、4人の少年たちが銃声のする方向に歩いているのを目撃したので、そのうちの1人の腕をつかみ、そこへ行かないよう説得しようとしたのですが、彼は頑なに拒みました。彼と一緒にいた少年の1人が、14歳のアフマド・ジャザールでした。

数分後、2発ほどの銃声が聞こえました。アフマド・ジャザールが理髪店の近くで倒れており、大量に出血していました。私は他の人の助けを借りて彼を引きずり出しましたが、彼は意識を失っており、死んでいるように見えました - 生命の兆候は全くありませんでした。私たちは彼を私の兄バシャールの車に乗せ、アフマドの父親と共にナブラスのア・ナジャ病院へ運びました。その後すぐに、彼が亡くなったことを知らされました。アフマドを撃った後、兵士たちはサバスティヤを去って行きました。

後でわかったのですが、少年たちは兵士たちにレーザー光線を当てており、それが兵士たちを怒らせたようです。しかし、それは子ども用のおもちゃのレーザーに過ぎず、どの食料雑貨店でも買えるポインターで、全く無害なものでした。

イブラヒム・アブ・ラード (28歳) は、証言の中で次のように述べた。

午後8時頃、私はアル・アミダ通りの自宅にいました。私はマレクの理髪店とサバスティヤ幼稚園の近くに住んでいます。2発の銃声を聞きましたが、とても大きな音でした。当たらないように、窓から身を引きました。ソーシャルメディアの投稿で、自宅から約300〜400メートル離れたアル・アミダ通りに兵士たちがいるという情報を目にしました。

兵士たちに車を傷つけられるのが怖かったので、家の近くに停めてあった車を移動させようと外に出ました。ドアを開けたその瞬間、家の向かいにある店の壁にもたれかかった4人の少年たちが見えました。彼らの1人が兵士たちの方を見ていました。すると、さらに銃声が聞こえ、弾が向かいの壁に命中しました。私はその場に凍りつき、車の方へは一步も動けませんでした。その場に留まり、状況が落ち着くのを待ちました。そこに立っていると、少年の1人が角から現れ、上半身を兵士たちの方に向けていました。すると彼は胸に手を当て、「撃たれた！」と叫んで走り出し、約15メートル走ったところで倒れ込みました。他の少年たちは、誰かが撃たれたと叫んでいました。そんなことが起きているなんて信じられませんでした。道路には大量の血が流れ、少年は自家用車で病院に運ばれて行きました。その少年が撃たれた後、兵士たちはその場を立ち去りました。

その後、ソーシャルメディアで、その少年の名前がアフマド・ラシード・ジャザールであることを知りました。彼はア・ナジャ病院で死亡が確認されました。

アフマド・ジャザールの母親ワファ・ジャザール (45歳、8人の子どもの母) は、2025年3月12日に行った証言の中で、息子を失ったことについて次のように語りました。

夫のラシード・ジャザール (55歳) との間には、8人の子ども、ルシュディ (20歳)、ミラ (19歳)、マヤ (18歳)、アフマド (14歳)、ハラ (12歳)、アダム (11歳)、ジュド (8歳)、そしてアミール (6歳) がいます。

私たちはサバスティヤに住んでいます、ガザ地区での戦争が始まり、軍が厳しい移動制限を課して以来、ナブルスでもアパートを借りて暮らしています。私は市内の縫製工場で働いており、長女 2 人もそこで学んでいるのですが、検問のせいで大変な思いをしていました。それ以来、子どもたちの幾人かは私と一緒にナブルスにいて、残りの子どもたちはサバスティヤで父親と一緒に暮らしています。アフマドはサバスティヤに留まることを望んでいました。そこには彼の友達がみんないて、ナブルスにいるのが好きではないからです。

2025 年 1 月 19 日、私は仕事からアパートに戻り、昼食をとる間も殆どないうちに、娘のミラがサバスティヤに住む友人から電話で、「私たちの家族の 1 人が銃撃された」と告げられました。誰が撃たれたのかははっきり言いませんでしたが、ミラが SNS を確認したところ、それがアフマドだとわかりました。

私たちは皆、急いで病院へ向かいました。ナブルスのレストランで働くルシュディも、病院に駆けつけてくれました。私たちが到着すると、既に親戚が数人いて、彼らは私が外傷治療室に入るのを止めました。彼らは、アフマドが重傷を負っていると教えてくれ、私を落ち着かせようとしていましたが、私は気が狂いそうで、心の奥底で炎が燃え上がっていました。自分の息子が胸を撃たれ、重体でそこにいると知って、どうして落ち着けるのでしょうか？少しでも心を落ち着かせてくれる知らせを願い、彼が生き延びてくれるよう祈りました。前日に彼を抱きしめたことや、ズッキーニとナスの詰め物を作っていたと頼まれたことなどを思い出していました。

アフマドは絵を描くのが大好きで、姉と同じようにドイツ文化センターに通いたいと言っていました。「働いて、お母さんに家を買ってあげるから、もう家賃を払わなくて済むよ」と彼が言っていたことも思い出しました。彼が生まれてからの全人生が、映画のように頭の中で再生されていました。

やがて、1 人の若い男性が私のところにやって来て、息子に会いたいかと尋ねてきました。「はい」と答えると、彼は私をある部屋へ案内した。そこには医師がいて、私にこう言いました。「アッラーが彼を憐れんでくださいますように」。私には信じられませんでした。ベッドを見ると、目の前にアフマドがいました。胸は血に染まり、その体は動かなくなっていました。息子のもとへ駆け寄り、キスをしました。彼の体はまだ温かく、血もまだ温かく、私の手や服を染めていました。私は、彼が目を開けて、かつて愛情を込めて私を呼んでいたように「ヤ・ハッジア [おお、お母様]」とってくれるように願いました。そうすれば、私は彼を叱って、まだそんな呼び方をされるほど老いていないと言ってやるつもりでした。

「アフマド、私を置いていかないで、戻ってきて、アフマド、どうして私を置いていったの？ 誰が私に家を買ってくれるの？」と叫んでいました。そして気を失い、目が覚めると、周りに看護師たちがいて、鎮静剤を投与されました。あの日以来、私は鎮静剤を飲み続けており、夜になっても眠れず、ただ目を覚ましたまま横たわり、心配と恐怖に押しつぶされそうです。

病院のベッドで血まみれになったアフマドの姿が、どうしても頭から離れません。高血圧や頭痛に悩ま

されるようになりました。いつも疲れ果てていて、料理も仕事も、何をする気力もありません。アフマドが亡くなってから、私たちは皆でサバスティヤに戻り、一室で一緒に寝ています。私はまだ仕事には戻っていません。息子の墓のそばにいたいのです。私は毎日そこへ行き、息子に話しかけています。イスラエル軍は冷酷にも彼を殺しました。彼は軍を危険に曝すようなことは何もしていませんでした。住民の話から理解した限りでは、石を投げたことさえなかったようです。軍は理由もなく、何の正当性もなく、まだ子どもだったのに、私の息子を撃ったのです。

軍は絶えず私たちの町にやってきて、道路を封鎖し、店を閉めさせています。

他の子どもたちのことが心配で、外出させたくありません。子どもたちが外に出るたびに、私は玄関先に立って、戻ってくるのを待っています。今日、子どもたちが学校へ行く朝の 8 時、またイスラエルのジープがこの辺りを走り回っていました。また子どもを失ってしまうのが怖いので、幼い子どもたちを学校に行かせませんでした。

ムタズ・イマド・ムサ・アブ・タビク (16 歳)

ジェニン、2025 年 1 月 21 日



2025 年 1 月 21 日、ヨルダン川西岸地区北部での「アイアン・ウォール作戦」の初日、イスラエル軍がジェニン市およびジェニン難民キャンプを襲撃した後、イスラエル軍兵士たちは、何の衝突も起こっていないジェニン市のアル・ガバズ地区で電動自転車に乗っていたムタズ・アブ・タビクを射殺した。アブ・タビクは腹部に負傷し、市内のイブン・シーナ病院へ搬送されたが、その後まもなくその負傷が原因で死亡した。同日、イスラエル軍は、同市およびジェニン難民キャンプで、未成年者 1 人を含む 9 人を殺害し、近隣のティニク村でも 1 人を殺害したほか、医師や看護師を含む 40 人に負傷を負わせた。

レイラ・ムハンマド・アイマン・アル＝ハティブ (2 歳)

ムタラト・アシュハダ、ジェニン地区、2025 年 1 月 25 日



2025 年 1 月 25 日（土）の夕方、イスラエル軍兵士たちが、パレスチナ・ナンバープレートの付いた民間車両 3 台で、ジェニン地区のムタラト・アシュハダ村に侵入し、大通りにあるア・スカル家の住宅を占拠した。

午後 7 時 30 分頃、接收された建物の向かいにある 2 階のアパートで、アスース家が夕食の支度をしていたところ、通りから銃声が聞こえてきた。当時、家にはバッサム・アスース (58)、妻のインティサール (51)、3 人の娘、シャイマ (22)、ニマル (18)、タイマ (25) に加え、タイマの 2 歳の娘、レイラがいた。家族は床に座り込み、そこなら安全だろうと願っていた。バッサムとインティサール・アスースはリビングに残り、娘たちと孫娘は自分の部屋へ入った。

家族が床に座っていると、突然、家に向かって銃撃が浴びせられた。タイマとシャイマは上半身に破片が当たり負傷し、母親の膝の上に座っていたレイラは頭部に銃弾を受け、重体となった。バッサムとインティサルは、大量に出血している幼い娘を抱き上げ、階下の通りへと駆け下りた。そこで彼らは制服を着た兵士たちに出くわした。また、自分たちの家と向かい合うア・スカル家の 2 階の窓から外を覗き込んでいる兵士たちの姿も目にした。出血している娘を抱えていたバッサムは、将校に「なぜ自分の家に発砲したのか」と尋ねると、将校は謝罪した。

夫妻は地元の車に手を挙げて止め、近くの町カバティヤにある医療センターへ娘を運んだ。そこから赤新月社の救急車でジェニンにあるアル＝ラジ病院へ搬送され、レイラは救命措置の末、死亡が確認された。一方、親戚が救急車を呼び、タイマとシャイマを同じ病院へ搬送した。2 人はそこで治療を受け、その晩に退院した。

兵士たちは午後 11 時まで村に留まった。その間、武装したパレスチナ人らと散発的な銃撃戦を繰り広げたが、これによる追加の死傷者は出なかった。さらに、武装した活動家を搜索するためと思われる他の 3 軒の家宅搜索を行ったが、逮捕者はいなかった。

ハアレツ紙の取材に対し、軍は、兵士たちが「情報によると、指名手配中のテロリストが立てこもっていた」家屋に向けて発砲したと述べた。また「子どもを撃ってしまったことに気付いた直後、兵士たちは赤新月社に通報し、その子どもの妊娠中の母親も避難させた」と説明した。軍はその後、「部隊が建物に到着し、拡声器を通じて家の中にいる人々に外に出よう数回呼びかけるなど、段階的に作戦を開始した。誰も出てこなかったため、部隊は手順に従って発砲した [...] この事件は調査されることになっており、それにより教訓が得られるだろう」と付け加えた。

しかし、B'Tselem の調査によると、家族は自分たちの家に向けられた呼びかけを一切聞いておらず、レイラは民間車両で搬送されたのに対し、妊娠していなかったその母親と叔母は、親族が呼んだ救急車で搬送されたことが判明した。さらに、アパートに立てこもっていた者はおらず、その夜、その場にいた唯一の男性はバッサム・アスースだけだった。

レイラの母親未亡人タイマ・アル＝ハティブ (26 歳) は、2025 年 1 月 26 日の証言で次のように述べた。

土曜日の夕方、午後 7 時 30 分頃、私の母インティサルは夕食にザアタル [ハーブミックス調味料] を添えたピタパンを焼いていました。私はリビングのダイニングテーブルに腰を下ろし、娘のレイラを膝に乗せていました。私の姉妹のシャイマとニマルが私の隣に座っていました。村を貫く大通りに面した私たちの家の近くで、突然、銃声が聞こえました。軍が村に入っていることすら知らなかったもので、私たちは本当に怖くなりました。

リビングには大通りを見渡せる窓があります。姉妹たちと私は身をかがめて、リビングの向かいにある自分の部屋まで這って行き、窓の高さより低い床に座り込み、そして食事と一緒に持ち込みました。レイラは怖がって私の膝の上に座っていました。両親はリビングの床に座り込んでいました。

しばらくして、私たちの家の中に向けて発砲が始まりました。どこから銃弾が飛んできているのかわかりませんでしたが、私の膝の上に座っていたレイラは頭を撃たれ、後頭部から血が噴き出しました。私の隣に座っていた姉は、破片が直撃しました。ほぼ同じ同じタイミングで、私の右腕にも破片が当たったはずですが、その時は痛みを感じませんでした。恐ろしくて、私たちは叫び声を上げていました。両親は、コンクリートの壁で守られているリビングの一角に座っており、2人は直撃は免れましたが、ショック状態でした。両親はレイラを抱きかかえて通りへ駆け下り、私たちも後を追いました。

家の真向かいにあるア・スカル家の家の近くの通りで、兵士たちがいるのを見て私たちは驚きました。父はレイラを抱きかかえていましたが、娘の頭からはまだ血が流れていました。父は兵士たちに英語で怒鳴り始めました。兵士の1人が私の娘を見て、父に英語で「ごめんなさい」と言うのが聞こえました。

レイラの祖父バッサム・アスース（58歳、5人の子どもの父）は、2025年1月26日の証言で次のように述べた。

娘たちが部屋の床に座って食事をしていたところ、私たちの家の窓に向かって銃撃が始まりました。妻のインティサルと私は、リビングの床に座っており、孫娘のレイラは、母親の膝の上に座って食事を食べさせてもらっていました。突然、レイラは後頭部を撃たれ、娘たちも負傷し、タイマの右腕に破片が当たり、シャイマにも破片が当たりました。

家の中では家族全員が悲鳴を上げ、妻と私は頭から大量に出血している孫娘を抱き上げ、階段を降りました。外に出ると、家の真向かいにある近所のア・スカル家の近くに兵士たちがいるのが見えました。また、私の家の窓と真正面に向き合っているア・スカル家の窓に、兵士たちが陣取っているのも見えました。彼らはライフルを構えて、私たちを狙っていたのです。

私は兵士の1人に英語で怒鳴りつけました。なぜ、この子を殺したのかと尋ねました。その兵士が近づいてきて、私の孫娘を見て、英語でこう言いました。「申し訳ない、誤って撃ってしまった」。私たちは救急車を呼ぼうとしましたが、近くに救急車はいなかつたため、私は妻と娘たちを連れて、レイラを最寄りの医療センターへ運ぶ車を探しに行きました。100メートルほど歩いたところで、地元の車を止め、私とインティサル、そしてレイラをカバティヤの医療センターまで乗せて行ってもらいました。そこから、赤新月社の救急車でジェニンにあるアル＝ラジ病院へ搬送してもらい、その医師たちはレイラの命を救おうと尽力したのですが、傷が致命的で、孫は助かりませんでした。

アダム・マジディ・アフマド・サブ・ラバン（16歳）

カランディア検問所、アル・クッド地区、2025年1月26日



2025年1月26日、警察の発表によれば、16歳のアダム・サブ・ラバンをはじめとする3人が、カランディア検問所付近で爆発物を投げたとして、私服の国境警察官の発砲により負傷した。負傷者たちはラマッラーの病院へ搬送されたが、サブ・ラバンはまもなくその傷が原因で死亡した。

アダムの母親（3人の子どもの母）は、2026年3月30日に行った証言の中で次のように語った。

16歳で命を落としたアダムは、私の3人の子どもの長男でした。彼は文系コースで学んでいましたが、特に自動車に関するあらゆることを愛しており、運転を習って免許を取得し、車を買う予定でした。他の若者たちと同じように、彼は家族を持ち、家を築くことを夢見ていました。何よりも、彼は優しさと思いやりに満ちた少年でした。私たちは父親とは別々に暮らしているため、彼は弟や妹、そして私に対して大きな責任感を抱いていました。息子の最大の願いは、仕事を見つけてお金を稼ぎ、今の賃貸住宅の代わりに、私たちのために将来家を購入することでした。

アダムを失ったことは、私にとって大きな打撃です。息子はもうこの世にはおらず、彼に代わるものは何一つありません。息子の死は、癒えにくい傷を私に残しました。弟や妹の顔に面影を見出し、時には彼の不在と記憶による痛みには耐えられないと感じることもあります。私は16年間息子を育ててきたのに、イスラエル兵が放った危険な銃弾によって彼を失ってしまいました。この痛みを私だけが抱えているわけではなく、私の状況が、ただパレスチナ人であるという理由だけで、パレスチナ人として生きることを選んだというだけで息子を失った何千人ものパレスチナ人の母親たちの状況と似ているという思いだけが、この痛みを和らげてくれます。

数日前、家の近くの小さな食料雑貨店の前を通りかかったとき、息子の記憶が胸を締め付けるように甦ってきました。その店の主は年配の男性で、アダムは以前、近所の人たち、特にお年寄りの手助けをしていました。アダムが亡くなった日、私はその店主が泣いているのを見かけました。アダムは私の心にも、兄弟姉妹や彼の父の心にも大きな空白を残しましたが、彼の父と私は、幼い子どもたちの心に残されたその空白を埋めようと努めています。困難はありますが、息子が亡くなってから1年以上が経った今でも、彼が本当に私たちのもとを去ったわけではないと感じています。

サダム・フセイン・イヤード・ムハンマド・ラジャブ（10歳）

トゥルカルム、2025年1月28日に銃撃され、2025年2月7日に死亡



2025年1月27日、軍、国境警察、およびシン・ベト [イスラエル保安庁] の部隊は、イスラエルが2025年1月21日に発表した「アイアン・ウォール作戦」の一環として、当初はジェニン地区に焦点を絞っていたが、トゥルカルム市および近隣の難民キャンプを急襲した。1月28日、午後6時30分頃、41歳のイヤード・ラジャブが、トゥルカルム中心部にある自宅アパートの3階で近所の人たちと談笑していたところ、息子のサダム（10歳）が、母親と電話で話すために建物の正面玄関へ出て行ってしまった。防犯カメラの映像には、サダムが電話を手に玄関

先に立っている様子が記録されており、その後、銃弾を受けて倒れ、悲鳴を上げながら痛みで身悶える様子が映っていた。約2分後、手術後に使用していた松葉杖をついて足を引きずりながら父親が駆けつけ、住民の助けも借りて、続く銃撃から守るため、サダムを数メートル離れた場所へ引きずり出した。その時点で、サダムはすでに動かなくなっていた。

近隣住民が呼び出した救急隊員とパレスチナ救急車がまもなく到着し、サダムが救急車に収容された直

後、イスラエル軍が到着し、救急車がタベット・タベット病院へ向かうことを許可した。その後、軍は建物に突入し、イヤード・ラジャブと他の入居者たちを 1 時間以上に渡って拘束した。軍は入居者のうち 3 人を逮捕し、残りの者たちを釈放した。その中にはイヤード・ラジャブも含まれ、彼はようやく病院へ向かうことができた。病院に到着すると、彼は医師たちが息子を手術のためにナブルスのラフィディア病院へ転院させる予定であることを知った。サダム・ラジャブは約 10 日後の 2025 年 2 月 7 日、ラフィディア病院で負傷が原因で死亡した。

その夜、午後 9 時 30 分頃、トゥルカルムの南東部にあるイルタ地区で、一発の銃声が聞こえた。両親とリビングに座っていた 22 歳のアイマン・ナジは、近くのメインストリートでいとも一緒に座っていることが多かった兄弟を探しに、急いで外へ飛び出した。ナジが家族が住む路地に入った途端、待ち伏せしていた兵士たちが彼に数発の銃弾を浴びせた。銃声を聞いたナジの両親は、建物の入り口へ駆けつけたが、アイマンが 1 メートルも離れていない場所に倒れていたにもかかわらず、兵士たちが発砲を続けたため、彼を助けることはできなかった。発砲が止まったのは、シン・ベト [イスラエル保安庁] の将校がアイマンのいとこである 16 歳のマフムードに電話をかけ、自首するよう要求してからであった。

マフムードが自首して初めて軍の救急車が到着し、隊員たちはアイマンの蘇生を試みた。その時点で、兵士たちは彼の家族を建物内に強制的に押し込み、家族が搬送の様子を見ることを許さなかった。アイマンが搬送された後、兵士たちは建物に突入し、男性全員に手錠をかけ、深夜を過ぎるまでであるアパートの一室に拘束した。家族がアイマンが負傷により死亡したのを知ったのは、兵士たちが去った後だった。彼が生きたまま搬送されたかどうかは不明である。入手可能な情報は、イスラエル軍がトゥルカルムの西にある軍事キャンプで、彼の遺体を赤新月社に引き渡したということだけである。

サダム・ラジャブとアイマン・ナジは、イスラエルが「長期に及ぶ」と当局が表明した作戦を開始して以来、殺害された数十人のパレスチナ人のうちの 1 人である。犠牲者の多くは、ラジャブやナジのように、自宅内またはその近くで殺害され、戦闘には関与していなかった。中には、その地域で衝突が起きていないにもかかわらず銃撃された者さえいた。ラジャブが殺害された後、イスラエル軍は「発砲後、事件の状況を究明するため、憲兵による調査が開始された」という定型的な声明を発表したが、ナジの殺害に関しては、何の声明も出されなかった。

サダムの父親イヤード・ラジャブ（41 歳、5 人の子どもの父）は、2025 年 2 月 10 日に行った証言の中で次のように述べた。

2025 年 1 月 28 日（火）、私たちは隣人たちと一緒に、建物の 3 階にある共有ルームに座っていました。この建物は小さなワンルームマンションで構成されており、入居者の殆どは独身の若い男性です。息子のサダムが、母親に電話をするために階下へ降りていいかと尋ねてきたので、私は許可し、自分は近所の人たちと一緒に残りました。寒かったので、私たちは炭火ストーブの周りに集まって座っていました。

その日はイスラエル軍によるトゥルカルムへの襲撃が始まって 2 日目でしたが、私たちの地域では問題や衝突は起きていないと知っていました。衝突はトゥルカルム難民キャンプに集中し、大規模なイスラ

エル軍が多数の車両や軍事装備を伴ってキャンプや市街地に入り込んでいました。そのため、皆は家に閉じこもり、あまり外に出ようとはしていませんでした。

息子が階下へ降りてから 1 秒後、銃声が聞こえ、続いて息子の悲鳴が聞こえました。息子が撃たれたと気づき、私は急いで 1 階へ駆け下りました。息子は玄関の入り口に倒れており、背中と胸から大量の出血をしていました。

他の人たちが手伝ってくれ、息子を数メートル先、家の東側へと引きずり出しました。そうすれば、通りから見える向かい側から隠れることが出来るからです。兵士たちは、300 メートル以上離れたあの場所にいたんだと思います。丁度その時、1 人の若い男性が近づいてきて、自分は救急救命士だと名乗りました。彼は息子の状態を確認し、数秒後にはパレスチナの救急車が到着しました。救急隊員たちは息子を救急車に乗せました。

息子が救急車に乗せられると直ぐに、アル・マサの菓子店の方角から約 20 人の兵士が駆けつけてきましたが、救急車は何とかタベット・タベット病院方面へと走り去ることができました。兵士たちは、私や建物にいた他の住民たちを 1 時間以上も拘束し、身分証明書を徹底的に調べました。その中の若者たちのうち 2 人は、ガザ出身の労働者で、イスラエルで働いていましたが、ガザで戦争が始まった後もヨルダン川西岸地区に留まっていた。兵士たちはその 2 人と、私たちの建物に住んでいたヌール・シャムス難民キャンプ出身の若い男性を逮捕しました。1 時間以上経った後、私は将校に病院へ行って息子の様子を見させて欲しいと頼んだのですが、兵士たちが建物から去った後でないと無理だと言われました。

結局、私は松葉杖をついて病院まで歩きました。救急外来の入り口には軍のジープが停まっており、兵士たちは中に入る人全員を拘束していました。彼らは、先ほど私たちの建物を急襲し、私たちを拘束した兵士たちだとわかりました。これら兵士が私の身分証明書を確認している間、ジープの中からヘブライ語で「あれは俺たちが撃った子どもの父親だ。あの子はまだ死んでいない」と言う声が聞こえました。その言葉を聞いて初めて、彼らは私を病院の中に入れてくれました。

病院で、医師たちはサダムの傷の重さから、ナブルスのラフィディア病院へ転院させるつもりだと私に伝えました。息子は転院し、そこで手術を受けましたが、助かりませんでした。2025 年 2 月 7 日に亡くなりました。銃弾が彼の腹部の血管を破裂させ、内臓を損傷させてしまっていたのです。私たちは、私が生まれたア・ラバドの村にサダムを葬りました。

ジハード・ナセル・ユセフ・バニ・マタル (17 歳)

タムン、2025 年 1 月 29 日



2025 年 1 月 29 日、ヨルダン川西岸地区北部で実施された「アイアン・ウォール作戦」中、イスラエル軍用機が、タムン村にあるイスラム聖戦組織軍事部門の活動家、ジハード・バニ・マタルの自宅の庭に向けてミサイルを発射した。その際、彼は他の活動家数名と一緒にその場に座っていた。この攻撃により、バニ・

マタールを含む 10 人が死亡し、その中には兄弟 2 人も含まれていた。全員がイスラム・ジハードの軍事部門の活動家であった。このほか 1 人が負傷した。

ディア・オマル・アフマド・サバアネ（15 歳）

カバティヤ、2025 年 2 月 1 日



2025 年 2 月 1 日、ヨルダン川西岸地区北部で行われた「アイアン・ウォール作戦」中、イスラエル軍用機がカバティヤの町で、2 人の若者が乗った車両に向けてミサイルを発射し、2 人とも即死した。この爆発により、自分の家族の店の近くに止めてあった車中にいた 15 歳のディア・サバアネも負傷した。息子からそう遠くない場所にいた別の家族用車両に乗っていた父親も、破片により負傷した。ディアと父親は病院に搬送されたが、ディアは 2 週間半後の 2025 年 2 月 17 日、負傷が原因で死亡した。

カバティヤ在住の Y.N.氏（75 歳、6 人の子どもの父）は、2025 年 3 月 20 日に次のように語った。

2025 年 2 月 1 日、私は女子校の近くにある自分の店にいました。午前 8 時 45 分頃、店の前で大きな爆発音が聞こえました。

向かい側の幹線道路で何が起こっているのか確かめようと外に出てみると、燃えている自家用車が見えました。その周囲には破片が散乱しており、数十個の破片が近くの家鉄製の門を突き破っていました。

被弾して炎上していた車の中には、2 人の若い男性が乗っていました。彼らは死亡し、2 人の遺体はバラバラになっていました。現場に人々が集まり始めた後、彼らがカバティヤ出身のサレハ・ザカルネとアブド・アル＝ハディ・クメールであることが分かりました。

ディア・サバアネは、通りの向かい側、母親の店の前に停めてあった実家の車中にいました。彼の頭にも破片が当たっており、彼の父親も負傷していました。爆発当時、父親は通りを挟んだ向かい側の別の車にいましたが、その通りの幅は 15 メートル以上もありました。

住民たちは 2 人を町の医療センターへ搬送し、ミサイル攻撃で死亡した 2 人の若者の遺体も同様にその医療センターへ運ばれました。

17 日後、少年は負傷が原因で死亡しました。このミサイルはまた、甚大な物的損害をもたらし、近隣の住宅の窓ガラスを粉々に粉砕しました。サバアネ家の化粧品店の正面部分は吹き飛ばされ、全壊しました。道路沿いに駐車していた車両も損傷しました。

ディアの父親アフマド・サバアーネ（42 歳、4 人の子どもの父）は、2025 年 3 月 20 日に次のように語った。

2025 年 2 月 1 日午前 8 時 45 分頃、私はトゥバスでの仕事を終え、帰宅途中でした。妻が経営する店で

ある「ア・ディア・コスメティックス・アンド・クリーニング・サプライズ」の前で車を止め、家の鍵を受け取りにいきました。その店は町の南側、女子校の近くにあります。この店の横にあるもう 1 台の車の中に、息子のディアが座っているのが見えました。私は通りの向かい側にいました。

ドローンの発射したミサイルが、私の車のすぐ横、つまり私の車とディアが乗っていた車の間の道路を走っていた車に命中した時、私は突然、衝撃を受けて呆然としました。ミサイルは私から 1 メートルも離れていない場所で爆発し、私の耳や顔に数個の破片が当たりました。恐怖と戦慄に駆られ、助手席側のドアからなんとか車外に出ると直ぐ、私は北へと走りしました。

ショック状態で、何が起きているのか理解できませんでした。攻撃を受けた車は北からやってきており、車内にはサレハ・ザカルネとアブド・アル＝ハディ・クメールという 2 人の若い男性が乗っていましたが、彼らはミサイルで死亡しました。燃え盛る車の周りに人々が集まっていたので、私もそこへ駆け寄り、自分が負傷していることを知らせようと思いました。その時点では、道路の向かい側の車に乗っていた息子の頭部に破片が刺さっていたことなど、全く知りませんでした。

その後、妻や、妻と一緒にいた子どもたちの安否を確認するために店に戻りました。その時、車の中でディアが意識を失っていることに気づいたのです。当初、私たちは彼が頭に被弾したことに気づきませんでした。ミサイルの爆発に恐怖を感じて、ただ気を失っただけだと思っていたのです。親戚がディアと私をカバティヤの医療センターへ連れて行ってくれました。そこで診察を受けた後、救急車でジェニンにあるアル＝ラジ病院へ搬送されました。

調べてみると、ディアは破片が脳の左側を貫通する怪我を負っていたことが判明しました。アル＝ラジ病院で 2 日間過ごした後、彼はジェニンにあるイブン・シーナ病院の集中治療室に移送され、翌日の 2025 年 2 月 17 日、その傷が原因で亡くなりました。

私は病院で一晩を過ごしました。医師たちは、私の耳の近くに刺さった破片は顔面神経に近すぎるため取り除くことができず、そのまま付き合って生きていくしかないと言いました。他の破片は時間の経過とともに自然に排出されるだろうとも。店の正面も損害を受けました。あの日、家族全員を失うところでした。そんなことは想像したくもありませんが。

アフマド・アブド・アル＝ハリム・シャケル・サアディ（14 歳）

ジェニン、2025 年 2 月 1 日



2025 年 2 月 1 日、ヨルダン川西岸地区北部で展開された「アイアン・ウォール作戦」の最中、自宅近くに立っていた 14 歳のアフマド・サアディと家族に対し、イスラエル軍用機がミサイルを発射し、アフマドは死亡した。家族のうち 2 人が負傷した。その数時間後、軍は別の場所へミサイルを発射し、オートバイに乗っていた同家族の 2 人が死亡した。この攻撃当時、ジェニン市やジェニン難民キャンプには軍部隊は存在していなかった。

アフマドの母親ニハヤ・サアディ（49 歳、4 人の子どもの母）は、2026 年 3 月 27 日に行った証言の中で次のように述べた。

私の息子アフマドは、東部地区にある学校の 9 年生でした。彼はとても物静かで、家族や近所の人々に愛されていました。他人を助けることが大好きで、近所の誰かが彼に何か頼むと、決して躊躇することはありませんでした。アフマドは兄弟姉妹を愛する、素敵な少年でした。私の末っ子でしたが、まだ幼かったにもかかわらず、自分より年上の人たちと過ごすことを好んでいました。

私たちに残されたのは、美しい思い出だけです。家族も近所の人たちも皆、彼を心から愛していました。バイクを手に入れることを夢見ていましたが、夫と私は、特にジェニンや難民キャンプで起きている事態を鑑みて、彼の安全を心配していました。アフマドは友達とサッカーをするのが大好きで、よく家のそばの広い通りで遊んでいました。

アフマドは、兄や親戚数人と一緒に家の外に座っていたところ、イスラエルのドローンが発射したミサイルの破片により殺害されました。彼は、何の罪も犯さず、何も悪いことをしていないのに殺されたのです。そのミサイルは、子どもと大人を区別しませんでした。また、家の前に座っていた他の若者数人も負傷しました。息子が亡くなって以来、私はジェニン東部にある彼の墓を定期的に訪れています。

ムハンマド・ガッサン・アブ・アベド（16 歳）

ヌール・シャムス・R.C.、2025 年 2 月 12 日



2025 年 2 月 12 日、西岸地区北部で行われた「アイアン・ウォール作戦」の一環として、ナブルスのヌール・シャムス・R.C.への襲撃中に、武装勢力とイスラエル軍との間で交戦が繰り広げられた際、参加していた 16 歳のムハンマド・アブ・アベドが死亡した。この交戦では他に 1 人が死亡し、軍によると、兵士 1 人が中程度の負傷を負った。アブ・アベドはイスラム聖戦組織の軍事部門の活動家であった。イスラエルは彼の遺体を拘束している。

アイマン・ナサール・ムハンマド・タイシール・アル＝ハイムニ（12 歳）

ヘブロン、2025 年 2 月 21 日



2025 年 2 月 21 日、ヘブロンの一帯を急襲していた兵士たちが、12 歳のアイマン・アル＝ハイムニに発砲した。当時、彼は 10 歳の弟と共に祖父の家を出て、隣接する叔父の家へ向かう途中だった。B'Tselem の調査によると、2 人はその周辺に兵士がいることに気づき、祖父の家に戻ろうとしたが、引き返す途中で、アル＝ハイムニは背中を撃たれて地面に倒れた。叔父は彼を搬送しようとしたが、近づいてきた兵士たちが叔父に向けて発砲したため、叔父は後退せざるを得なかった。数分後、兵士たちが立ち去ると、家族はアイマンを車で病院へ搬送したが、そこで死亡が確認された。

アイマンの叔父ナディム・アジュールニ（28 歳、2 人の子どもの父）は、2025 年 2 月 25 日に次のように語った。

私はヘブロン南部のジャバル・ジョハル地区に住み、ヨルダン川西岸地区で建設業に従事しています。

2025 年 2 月 21 日、29 歳の姉アンワールが、子どもたち - 12 歳のアイマン、10 歳のアイサル、5 歳のタイヤラ、2 歳のアヤン - を連れて私たちの家を訪ねていました。

午後 6 時半頃、アンワールは帰宅の準備をしていました。家を出る前に、兄のアシュラフがアイマンに、向かいに住む弟のタレクに少しお金を届けてくるよう頼みました。

アイマンと 10 歳の弟アイサルは、その用を済ませに外へ出ました。その瞬間、家の外に軍がいることに気づいたので、私はすぐに 2 人を追って外へ出ました。アイマンは私から約 10 メートル離れたところにいました。彼とアイサルが家の階段を上っていくのが見え、彼は息を切らしていました。すると、一発の銃声が聞こえ、アイマンが階段の上で倒れたのです。私は階段を駆け下って彼の元へ駆け寄りました。

その瞬間、家へと続く道に沿って兵士たちのサーチライトが近づいてくるのが見えました。

私はアイマンを抱き上げ、家の右側にある鉄の門の裏側まで約 4 メートル運びました。すると、兵士たちが私の方向に向かって発砲してきました。撃たれないように、アイマンを地面に下ろし、脇道の方へ後退せざるを得ませんでした。

家の前に兵士が 3 人いるのが見えたので、私は方向を変えて家の裏口へ行き、そこから家族に、アイマンが負傷したので外に出てくるよう叫びました。家族は外に出てきて、家から道路の方へ走りました。

私の妹であるアンワール（アイマンの母親）は、兄弟たちと一緒に道路へ出て、兵士たちに怒鳴り始めました。兵士たちは 2 分間立ち止まりましたが、アンワールが叫び続けると、その後撤退しました。私たちはアイマンを車に乗せ、ヘブロン南部にあるモハンマド・アリ・アル・ムフタセブ政府病院へ運びました。医師たちは蘇生を試みましたが、到着から 30 分後に死亡を宣告せざるを得ませんでした。医師によると、彼は背中を撃たれ、弾丸は首から抜け出ていたとのことです。

翌日、軍のジープが家の入り口にやって来て、兵士たちは暫く家の周辺を歩き回った後、立ち去りました。

アイマンの母親アンワール・アル＝ハイムニ（29 歳、4 人の子どもの母）は、2025 年 2 月 25 日に次のように語った。

ラマッラー市の大統領警護隊に勤務する夫のナッサーと私には 4 人の子どものいましたが、2025 年 2 月 21 日に長男のアイマン（12 歳）は殺害され、今も一緒にいるのは、アイサル（10 歳）、タイヤラ（5 歳）、アヤン（2 歳）の 3 人です。

アイマンが殺害された日、私は子どもたちと一緒に、ヘブロン南部のジャバル・ジョハル地区にある実家を訪れていました。私の兄アシュラフが、アイマンに、実家の向かいの家に住む弟のタレクに少しお金を届けてほしいと頼みました。アシュラフはそのお金を小さな袋に入れ、アイマンの肩にかけ、私たちが家に帰る前に届けてくるよう頼みました。

アイマンは10歳の弟アイサルを連れて実家を出ました。丁度その時、占領軍の兵士たちが近所に侵入しているという話を耳にしました。何が起きているのか確認するために、私は急いで窓へ駆け寄り、子どもたちの命が危ぶまれると思い、子どもたちを家の中に呼び戻そうとしました。

窓の外を覗いたとき、少なくとも一発の銃声が聞こえました。私はパニックに陥り、ドアへと駆け出しました。兄弟や両親も私の後を追って来て、私たちは、兄タレクの家の入りの向かい側にある、道路へと続く階段まで出ました。

アイサルはパニック状態で私たちの方へ駆け寄ってきて、「ユダヤ人がアイマンを撃った」と言いました。地面に横たわっているアイマンを3人の兵士が取り囲み、懐中電灯の光を彼に当てているのが見えました。アイマンは門のすぐそばにいました。

私は彼のところへ駆け寄り、兵士たちに叫んだ。「私の息子に何をしたの？」アイマンはかすれた声で私に言った。「お母さん、兵士たちが僕を撃ったんだ」。私はショックを受け、兵士たちに叫び続けた。「お前たちのうち、誰が私の息子を撃ったんだ？」兄弟の1人がアイマンを抱き上げ、車へと運びました。

兵士たちは後退し、兄弟たちは急いでアイマンを車に乗せ、病院へと向かいました。私は兵士たちの後を追いかけて、「お前たちのうち、誰が私の息子を殺したの？」と叫び続けました。私は彼らを約200メートルほど追いかけてきましたが、アル・カサラという幹線道路に差し掛かったところで、そこにはさらに多くの兵士がいて、私は彼らに向かって叫び続けました。

そのとき、親戚が車で私を迎えに来てくれ、私たちはモハンマド・アリ・アル・ムフタセブ病院へ向かいました。到着した時、アイマンは救急救命室にいて、医師たちは約30分間、彼を蘇生させるためにあらゆる手を尽くしてくれましたが、結局、死亡が宣告されました。

アイマンは中学1年生で、悪いことは何もしていませんでした。彼は兵士たちに石を投げたりはしなかったのに、兵士たちは彼を冷酷に殺害したのです。

アイマンの父親ナサール・アル＝ハイムニ（39歳、4人の子どもの父）は、2025年2月25日に次のように語った。

2025年2月21日金曜日、私の仕事中に妻から電話があり、ヘブロン南部のジャバル・ジョハル地区にある実家に行くと言われました。

その日の夕方、午後 7 時頃、親戚から電話があり、息子のアイマンが叔父のタレク・アル＝アジュールニの家の近くで占領軍兵士の銃撃により負傷したと伝えられました。

私は友人と一緒に仕事を抜け出し、友達の車で息子のもとに向かいました。ベツレヘムの北西にあるコンテナ検問所に到着すると、検問所にいた兵士と国境警察官が、運転していた私の友人にエンジンを切り、身分証を差し出すよう命じました。彼らは車を徹底的に搜索し始め、しばらくすると、国境警察官の 1 人が私のところへやって来て、検査のために身分証を取り上げました。2 分後、彼は走って戻ってきて、その背後には男性 2 人と女性 1 人の国境警備隊員がいました。彼らは私に向けて銃を構えており、その一人が「車から降りて、両手を頭の後ろに回せ」と叫びました。

私は彼の命令に従い、車から降りました。車から降りるやいなや、彼は全裸になるよう命じましたが、私は拒否しました。結局、口論の末、彼は私が着ていたジャケットを脱ぐよう命じ、それからこう尋ねました。「俺たちが殺した少年と、君はどんな関係なんだ？」

その瞬間、私はショック状態に陥りましたが、直ぐに、アイマンが死んだのだと理解しました。アラビア語を話す警官に、私は「あの子は私の息子です」と答えました。すると彼は「神の御心により、君を彼の元へ送ってやる」と返しました。

私たちは口論になり、彼は怒鳴って、武器で私を襲おうとしました。それから彼は、検問所のそばにあるコンクリートの部屋へ移動するよう命じ、私をその部屋の入り口のそばに立たせました。すると、女性国境警察官が到着しました。彼女はその警官と話し、私のことを尋ねると、彼はヘブライ語で「我々は彼の息子を殺したんだ」と告げたのです。すると彼女は笑い出し、踊り始めました。私は彼女に向かって、「おまえも死んでしまえ」と叫びました。

警官は私を部屋の中に押し込み、その後を追って部屋に入ってきました。彼は私を襲おうとしているのだと思ったのですが、ちょうどその時、別の警官が携帯電話を手にとり、走ってやって来て、それを私の耳元に当てました。電話の向こうの相手は、シン・ベト [イスラエル保安庁] の職員だと名乗り、私に「あなたの忍耐に対して、神が報いてくださいますように」と言いました。そして、「あの子はまだ子どもでした。申し訳ありません。誤って殺してしまったのです」と付け加えました。それからその職員は「なぜ今、ヘブロンに戻るのですか？」と尋ねました。私は「子どもに会って、葬るためです」と答えました。するとその職員はこう言いました。「我々はあなたを監視してます。もし何か間違ったことをすれば、あなたの家に押しかけて逮捕しますよ」と。私が「なぜ、私の家まで行ってやるのですか？今ここで逮捕してください」と言うと、彼は「いいえ、今は息子さんの埋葬に行ってください。もし何かすれば、逮捕します」と答えました。

彼らは私を解放し、私はヘブロンへと向かいました

ヘブロン¹の公立病院に着くと、遺体安置所で息子を見つけました。私は法医学研究所に解剖を依頼しました。その後、遺体を確認したところ、背中と胸に銃創があるのがわかりました。

リマス・オマル・ムハンマド・アムリ（13 歳）

ジェニン、2025 年 2 月 21 日



13 歳のリマス・アムリは、家族と一緒にジェニン難民キャンプ南部のアル・ジャブリヤット地区に住んでいた。キャンプへの軍の侵攻が始まってから約 1 ヶ月が経過した 2025 年 2 月 21 日の午後 3 時頃、リマスは母親に隣の叔父の家のいところに会いに行く許可を求めた。当時、その地区では衝突は起きていなかったが、リマスが自宅から約 20 メートル離れた叔父の家へと続く小道に足を踏み入れた瞬間に、5、6 人の兵士からなるグループが 30～40 メートルの距離から彼女に向けて発砲した。リマスは背中を撃たれ、地面に倒れ込み、助けを求めて叫んだ。

彼女の母親ロダイナ・アムリ（40 歳）、兄、いとこたちは直ぐに駆けつけましたが、距離は近かったものの、兵士たちが撃ち続けたため、リマスに近づくことはできなかった。家族は彼女を救出する機会を待ちながら、救急車を呼んだ。兵士たちは数分間発砲を続け、家族が彼女に近づこうとする度に発砲を繰り返した。しばらくして、母親と兄のムアメン（21 歳）は勇気を振り絞り、彼女のところへ駆け寄り、自宅の方へ引きずりながら運んだ。

キャンプ内には軍隊が駐留しており、道路も破壊されていたため、家族が呼んだ民間の救急車は遠回りを余儀なくされ、到着までに時間がかかった。ようやく救急車が到着すると、リマスは父親のオマル・アムリ（44 歳）と兄のムアメンと共に病院へ搬送された。ジェニンにある公立病院に到着した時点で、彼女の死亡が確認された。翌日、リマスはキャンプ内の墓地に埋葬された。イスラエルは彼女の葬儀への参列者を 40 人以内に制限した。

ハアレツ紙への声明の中で、イスラエル国防軍（IDF）の広報担当者は、リマスに発砲した兵士たちについて、「その地域で活動中の部隊の近くを移動する不審な人物を特定した。部隊は不審者逮捕の手順を開始し、その一環としてその人物に呼びかけた。彼女が応答しなかったため、下半身に向けて発砲した」と述べた。しかし、B'Tselem の調査によると、兵士たちはリマスからわずか約 40 メートルの距離におり、彼女が若い少女であることを識別できたはずであった。さらに、目撃者の誰も警告の呼びかけを聞いていなかった。病院の診断書によると、リマスは背中を撃たれており、これは彼女が兵士たちの存在に全く気づいていなかった可能性を示唆する。

2025 年 3 月 11 日、リマスが殺害されてから約 3 週間後、イスラエル軍はこの地区と家族の自宅を急襲し、リマスの家族および他の全ての住民をジェニン難民キャンプから追放した。この行為は、西岸地区北部の難民キャンプを空にし、住民の帰還を阻止するというイスラエルが公然と宣言している政策の一環であり、国際法に対する露骨な違反である。一家は、ジェニン南東部のア・ザバビダ村にあるアメリカン大学の学生寮に設置された国内避難民（IDP）センターへの移住を余儀なくされた。彼らは自宅に立

ち入ることができず、その状態も不明である上、リマスの墓を訪れることもできない。

リマスの母親ロダイナ・アムリ（40歳、4人の子どもの母）は、証言の中で次のように述べた。

2025年2月21日午後3時頃、私は息子のムアメン、娘のリマス、甥のアブド・アル・ジャバールと一緒に家にいました。リマスは、1か月にも及ぶ軍事作戦のせいで外に出ることがほぼ不可能になっており、家でひどく退屈していました。彼女は、家の隣にある叔父の家に、同じ年のいとこたちに会いに行きたいと頼んできました。とても近かったので、私は行かせてあげました。

リマスが外に出て数秒後、外から銃声が聞こえ、続いてリマスが「ママ、ママ」と叫ぶ声が聞こえました。私はムアメンとアブド・アル＝ジャッバーを連れて玄関へ駆けつけ、玄関から僅か数メートルの場所でリマスが倒れているのを見て、衝撃を受けました。彼女は助けを求めるために手を挙げようとしていましたが、依然として私たちの方に向かって銃撃が続いており、外に出ることはできませんでした。私たちは救急車を呼びました。家の向かい側、20～30メートルほど離れたところに、5、6人の兵士のグループが見えました。私たちは玄関先に留まったきりで、銃撃と兵士たちの存在のせいでリマスに近づくことはできませんでした。兵士たちはただそこに立っているだけで、近づいては来ませんでした。

結局、必死になって、私はムアメンと一緒に先へ進み、銃撃が続いているにもかかわらず、なんとかリマスに辿り着き、抱き上げて家の中に運び込めました。数分後、救急車が到着しました。救急隊員によると、リマスは背中を撃たれ、弾丸は腹部から抜け出ていたそうです。彼女は大量に出血しており、もう手を上げることも、話すこともできませんでした。

隣人の家にいた夫は、救急車が到着したのと同じタイミングでなんとか家に帰ることができました。夫とムアメンは救急車に乗り込み、彼女をジェニン政府病院へ搬送しましたが、そこで死亡が確認されました。

翌日、パレスチナ側の DCO [地区調整連絡事務所] から、イスラエル側の DCO が葬儀への参列者を 40 人に限定する許可を出したと告げられた後、私たちはリマスを埋葬しました。

2025年3月11日、ラマダンの断食明けの食事の最中、イスラエル兵が私たちの家に押し入り、私たちを強制的に追い出し、私たちは追放されました。ビルキンの親戚の家へ避難せざるを得なくなり、そこからア・ザバビダにあるアメリカン大学の学生寮にある国内避難民（IDP）センターへ移送されました。それ以来、私たちはここに滞在しています。

リマスの兄であるムアメン・アムリ（21歳）は、2025年4月21日の証言で次のように述べた。

2025年2月21日（金）午後3時頃、私はいとこのアブド・アル＝ジャッバーと自宅で過ごしていました。妹のリマスが、いとこたちと遊びたいので、近くに住む叔父の家に行ってもいいかと母に尋ねているのが聞こえました。彼女が丁度玄関を出た瞬間、外で銃声が連発し、リマスが「ママ、ママ」と叫ぶ声が聞こえました。私は母といとこを後ろに従えて、ドアへと駆け寄りました。地面に倒れているリマ

スが、助けを求めて手を挙げているのを見て、私たちは衝撃を受けました。しかし、彼女が私たちから僅か数メートル先に横たわっていたにもかかわらず、私たちへの銃撃がまだ続いていたため、助けに行くことができませんでした。兵士たちはすぐ目の前にいて、それほど遠い距離ではありませんでした。

私たちは赤新月社の救急車と民間の救急車を呼び、彼女を病院に運んでくれるよう頼みました。玄関の向かいに負傷して横たわっているリマスには、数分間近づくことができませんでした。やがて母が勇気を振り絞って彼女に近づき、私も母に付き添いました。銃撃は続き、弾丸が家の壁に当たっていましたが、なんとかリマスを家の中に引きずり込むことができました。

リマスが負傷してから数分後に救急車が到着し、その後、父もなんとか家に辿り着きました。救急隊員たちは妹をハリル・ア・サルマン病院へ搬送し、父と私は彼女に同行しました。病院で、背中に撃ち込まれた弾丸が腹部から抜けたことが原因で、彼女の死亡が宣告されました。

翌日、私たちは彼女を埋葬しました。葬儀を行うには、パレスチナの DCO [地区調整連絡事務所] からの許可を待たなければなりませんでした。軍は、ごく少数の親族のみ立ち会った状態で彼女を埋葬するよう命じました。

ラマダンの 11 日目にあたる 2025 年 3 月 11 日、兵士たちが私たちの家に押し入り、私たちを追い出しました。現在、私たちはア・ザバビダにあるアメリカン大学の学生寮にある国内避難民 (IDP) センターに滞在中です。

ハメド・ムハンマド・ファデル・ナザール (16 歳)

カルキリヤ、2025 年 2 月 26 日



2025 年 2 月 26 日、兵士たちは、16 歳のハメド・ナザールが他の十代の若者たちと共にエイアル検問所で石を投げている最中に彼を射殺した。救急隊員が彼の遺体を搬出したのは、発砲から約 15 分後のことだった。兵士たちは彼にいかなる医療処置も施さなかった。

オマル・アメル・ヤセル・ズユード (16 歳)

シラト・アル・ハリティヤ、ジェニン地区、2025 年 4 月 2 日



2025 年 4 月 2 日、2 台の軍用装甲車がシラト・アル・ハリティヤの町に進入し、オマル・ズユードを含む少年や若者たちが、それらに向かって石や即席爆発装置 (IED) を投げつけた。兵士たちは車両の 1 台に搭載された機関銃から発砲し、オマル・ズユードの背中を撃ち抜き、彼を死亡させ、他の少年 2 人に負傷を負わせた。兵士たちは数分後にその場を去ったが、負傷者に対していかなる医療処置も施さなかった。

この町の住民 M.T.氏は、2025 年 4 月 3 日に次のように語った。

2025 年 4 月 2 日（水）午後 3 時 45 分頃、私はハイファ道路近くのシラト・アル＝ハリティヤの町の入り口にある洗車場で働いていました。

その時、2 台の「エイタン」装甲兵員輸送車がハイファ道路沿いの東側から到着し、洗車場の前を通り過ぎて、農道を通り、マルジ・イブン・アメル平原とティニク村方面へと進んでいきました。私はいつも通り仕事を続けていました。

約 15 分後、驚いたことに、その 2 台の装甲兵員輸送車が西側から戻ってきて、ロータリーを旋回し、その右側で西向きに停車しました。車外には兵士の姿は見え、兵士たちは装甲車の中にいました。

程なくして、10 代の若者や子どもたちが現場に集まり始め、その装甲車から約 100～150 メートル離れた、高校の塀の近くに陣取りました。彼らは装甲車に向かって石を投げ始め、さらに即席爆発装置も投げかけていました。

兵士たちは 10 代の若者や子どもたちに催涙ガス弾を発射し始め、その後、装甲車の上部に搭載された武器から数発の銃弾を放ち、村の少年 3 人が撃たれました。

後で知ったのですが、そのうちの 1 人は「オマル・アメル・ズユード」という名前で、胸部を撃たれていました。彼は全く動かなかったので、撃たれた直後に亡くなったのだと思います。

私が驚いたのは、子どもたちが撃たれて地面に倒れた後、2 台の装甲車が現場を離れ、西のサレム軍事キャンプ方面に走り去ったことです。発砲の前も後も、兵士は誰 1 人として降車しませんでした。兵士たちは、まるで子どもたちが撃たれて倒れるのを見て、そのまま逃げ出したかのようでした。

子どもたちが撃たれてから数分後、赤新月社の救急車が到着し、イブン・シーナ病院へ搬送しました。その病院で、少年オマル・アメル・ズユードの胸部銃創による死亡が公式に発表されました。

オマルの母親ラニン・ズユド（41 歳、5 人の子どもの母）は、2026 年 3 月 26 日に次のように振り返った。

2025 年 4 月 2 日、息子のオマルは早起きをして朝食をとり、家にいました。その日の午前中、彼は私に「お昼ご飯に何を作るの？」と尋ねてきました。私は、彼の大好物である「カブサ」を作るつもりだと答えました。カブサとは、米、野菜、肉を使った料理で、ヨーグルトやサラダと一緒に食べるものです。彼は私たちと一緒にいて、妹と遊んでいました。

料理の準備が終わり、私たちは一緒に昼食をとりました。オマルは何か買い物をしたいので、少しお金をくれと頼んできました。私たちはシラト・アル・ハリティヤの東側の入り口、大通りであるハイファ通りの近くに住んでいます。当時、その地域には何の問題もなく軍隊の姿も見当たらなかったため、息

子に少しお金を渡し、息子は友人と会ったり、買い物をしたりするために外へ出ました。

彼が家を出て数分後、ソーシャルメディアを通じて、イスラエル軍が町を襲撃していることを知りました。特に、軍が町の各地区をパトロールしていると報じられた後、私は不安と恐怖に襲われました。息子に何か悪いことが起こるのではないかと恐れ、安否を確認し、家に帰ってくるよう頼むために電話をかけました。何度か電話しましたが、息子は出ませんでした。

ちょうどその時、人々が夫に電話をかけ始め、オマルが負傷したと伝えました。夫はそのことを私に隠そうとし、確認するために急いで外へ飛び出していきました。

しかしその後、親戚たちが突然私たちの家に集まり始め、私は息子に何か悪いことが起きたと確信しました。彼が銃弾による傷で亡くなったことは、親戚たちが「撃たれて亡くなった」とはっきりと告げるまで、私としても確かなことはわかりませんでした。翌日、病院から彼の遺体が運ばれてきて、町で葬儀が執り行われました。

私の息子オマルは、大人を敬い、礼儀正しく親切な少年で、頭も良かった。彼はサッカーが大好きで、町のスポーツクラブのユースチームに入部し、ピッチに立つことを心から楽しんでいました。サッカーをしている時こそが、彼にとって一番幸せな時間でした。

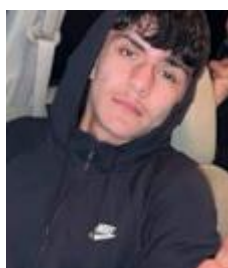
彼にはたくさんの良き友人がいました。彼が亡くなって以来、友人たちは私たちの様子を見に訪ねてきてくれ、お悔やみを述べ、一緒に時間を過ごしてくれています。私は定期的に息子の「オマル」の墓を訪れ、そこでコーランの祈りを唱えています。彼はとても心優しい子でした。私は彼を、人生で最も大切な存在のように恋しく思っています。

友人たちが我が家を訪れた際、オマルがもてなしてくれた様子を今でも覚えています。彼はとても気前が良く、温かく迎え入れ、いつも手持ちの食材から最高で最も美味しい料理を振る舞おうとしました。

息子の「オマル」を失ったことは、私にとって非常に辛いことです。その喪失感是我的心に重くのしかかり、彼がいないことに計り知れない悲しみを覚えています。

「アメル・ムハンマド・サアダ・ラビ」、14歳

トゥルムサヤ、ラマッラーおよびアル・ビラ地区、2025年4月6日



2025年4月6日（日）午後6時20分頃（標準時）、イスラエル兵士たちは、国道60号線から約30メートル離れたトゥルムサヤ北端にあるアーモンド園にいた3人のパレスチナ人10代の少年たちに向けて集中射撃を行った。どうやら、発砲に先立ち、少年たちのうち少なくとも1人が道路に向かって石を投げたようだった。道路の反対側で待ち伏せしていた兵士たちが、少年たちに向けて30発以上の銃弾を発射したようで、3人全員に命中させていた。少年たちの1人、アメル・ラビ（14歳）

は即座に地面に倒れたが、残りの 2 人は、1 人が太ももと股間を、もう 1 人が腹部を負傷したものの、なんとか逃げ出し、友人に電話をして、近くの町アブ・ファラにある診療所まで車で運んでもらった。兵士たちが発砲を続けたため、彼らは地面に倒れたままの友人を搬送することができなかった。暫くして、兵士たちは彼の元へ駆けつけ、応急処置を施そうとしたようだが、彼は傷のせいで死亡した。その後、兵士たちは彼の遺体を現場から運び出した。

負傷した 2 人の少年は、アブ・ファラ医療センターで応急処置を受けた後、民間の救急車でトゥルムサヤへ搬送され、そこで 1 人は赤新月社の救急車に乗り換えた。その後、2 台の救急車は、負傷者をラマッラーのアル・イスティシャリ病院へ搬送するため、トゥルムサヤから国道 60 号線への分岐点に向かって走行した。しかし、町の出口付近で、覆面の兵士たちが検問所を設置しており、銃を突きつけて救急隊員と負傷した少年の 1 人の父親を車両から降ろさせた。兵士たちは救急車に乗り込み、負傷した少年たちの写真を撮影した。約 15 分後、さらに多くの兵士が到着し、その周辺に集まっていた町民や、検問所による交通渋滞に巻き込まれていた人々に催涙ガスを発射した。また、兵士たちは負傷した少年たちを撮影し、父親と医療スタッフの身分証明書を確認した。その後によりやく、救急車の通行が許可された。

少年たちはラマッラーのアル・イスティシャリ病院に搬送され、そこで手術が行われ、治療を受けた。午後 8 時頃、パレスチナ側の DCO [地区調整連絡事務所] が、アメル・ラビの家族に対し、彼の死亡を通知した。その夜遅く、フワラ軍事基地で父親と赤新月社のチームに彼の遺体が引き渡され、翌日、トゥルムサヤで葬儀が執り行われた。

発砲後、軍は 3 人の少年たちを映していると主張する映像を公開した。その映像には、1 人が（それほど大きくは見えない）物体を投げつける様子が映っており、その後、少年たちは銃撃を受け、逃げようとする様子が見て取れた。この映像には、「民間車両が通行する高速道路に向かって大きな石を投げていた」3 人のパレスチナ人を兵士たちが特定したという声明が添えられていた。

少年たちの 1 人の父親で、トゥルムサヤ市役所職員の男性は、2025 年 4 月 7 日に行った証言の中で次のように述べた。

2025 年 4 月 6 日（日）、トゥルムサヤの東側にある自宅で夕方の礼拝を終えた後、私は町の中心部にあるカフェへ出かける準備をしていました。出かける前、家族から銃声を聞いたかと尋ねられたのですが、私は何も聞こえませんでした。外に出て、町の中心部まで車を走らせ、午後 6 時 15 分頃にカフェに到着すると、そこにいた人々は、少し前に聞いた銃声について話していました。町のグループチャットにも銃撃に関する報告が流れ始めていました。

数分後、軍の銃撃で負傷者がでたという話を耳にしました。私は、近隣の町アブ・ファラハの医療センターに搬送された負傷者の様子を見に行くよう頼まれました。車で向かい、午後 6 時 55 分頃に到着すると、人々が「道を空けて、彼の父親が来た」と言っていました。最初は、それが私のことだと気づきませんでした。市の救急車が見え、驚いたことに、その中に息子がいました。彼は担架に横たわり、腹部出血を止めようとする医師たちに囲まれていました。意識はありましたが、服には大量の血が付いてお

り、私を見ると、彼は許しを求めてきました（死を前にした際の慣習）。私は状況を完全には把握できず、その瞬間どうすべきかわかりませんでした。息子を思うと、とてつもない恐怖に襲われました。

この医療センターには、もう 1 人、息子の友人である負傷した少年がいました。彼は腹部を撃たれていました。センターは、これら少年 2 人を医師同伴でラマッラーのアル・イスティシャリ病院へ搬送することを決め、私も救急車に同乗しました。まずトゥルムサヤの中心部へ向かい、そこで息子は赤新月社の救急車に乗り換えました。息子の容態は友人よりも深刻で、赤新月社の救急車は民間のものと比べて設備が充実していたからです。その後、運転手たちはラマッラーへ向かう最善のルート話し合い、60 号線を通ることに決めました。私たちは町の正門に向かって走り、その道中、息子は何度も私に許しを請い続け、私は何が起きたのかは尋ねませんでした。

正門に着くと、軍がトゥルムサヤを出る車両を停止させて検査しているのが見えました。そこで、民間の救急車がわざと私たちより先を行くようにしました。もしその車が止められた場合、私たちが引き返して別のルートを取れるようにするためです。渋滞を目にした私たちは、反対車線を走って迂回しようと試みました。

最初の救急車を 2 人の兵士が止め、負傷した少年を除く全員に車外に出よう命じているのが見えました。私たちはその車から約 20 メートル後方にいました。3 人目の兵士が近づいてきて、私たちの救急車に銃口を向けたのです。彼は停止を命じ、私と乗組員に車外に出よう指示しました。私は兵士にこう言いました。「私と息子はアメリカ市民です。息子は負傷しています。」兵士はアラビア語で「承知している」と答え、自分の腹部を指さしました。つまり、息子が腹部を負傷していることを知っていたのですが、それでも、彼は私と乗組員を強制的に降ろし、歩道の端に座らせました。

3 人の兵士全員が黒いマスクを着用しており、目しか見えていませんでした。ヘルメットを被っていたのは 1 人だけで、もう 1 人は軍用ブーツの代わりに白いスニーカーを履いていました。そのうちの 1 人の声は、私には聞き覚えがありました。彼は、他の入植者たちと共にトゥルムサヤ近くの谷の農地を不法占拠している入植者の 1 人だと思います。彼らは正規の兵士ではなかったのではないかと疑っています。

救急救命士の S.A.氏は、2025 年 4 月 7 日の証言で次のように述べた。

町の正門に到着したとき、国道 60 号線へと続く車線では深刻な交通渋滞が発生中でした。検問所の兵士たちが全ての車両を停止させて検査しているようだったので、私は反対車線を走行することに決めたのです。赤新月社の救急車は私の後ろを走っていました。兵士たちが立っている場所まで 15～20 メートルに近づいたとき、覆面をした兵士が私の進路を塞ぎ、銃を私に向けてきました。彼はヘブライ語で何か叫びましたが、私には理解できませんでした。私は彼が停止を命じているのだと思い、車を止めました。道路の向こう側には、イスラエルのナンバープレートをつけた小さな白い車が停まっており、町からの出口を塞いでいました。

赤新月社の救急車が、病院へ向かう別のルートを取るためにバックしようとしているのを見ましたが、

別の兵士がその車に走り寄り、運転手に銃を向け、停止するよう合図しました。2人の兵士が、私と同行していた医師を救急車から引きずり出し、2つの車線の間の地面に座らせました。彼らは負傷した少年を救急車の中に残し、そして私の救急車の鍵を取り上げたのです。3番目の兵士が、赤新月社の救急隊員と、もう1人の負傷した少年の父親に車から降りて、私たちの隣の地面に座るよう命じました。

私には彼らが正規の兵士には見えませんでした。そのうちの1人は、近くの入植地シロの治安担当責任者だと思いました。この事件の丁度1週間前、私が自分の土地を耕していたとき、1人の入植者がやって来て、その入植地の治安担当責任者だと名乗っていましたし、他の者たちも正規の兵士ではなかったと思います。特に、彼らの車は民間車で、ナンバープレートも軍用ではなく民間用でした。兵士の1人はアラビア語を話していました。

ある兵士が私の救急車の中に入ってきました。彼が負傷した少年を撮影し、名前を尋ねているのを見ました。その後、彼は車外に出ました。その後、別の兵士が2人目の負傷した少年に対しても同じことをしているのを目撃しました。その間、3人目の兵士が、私の救急車に乗っている少年の負傷原因を尋ねてきました。私は、実弾に撃たれたのだと答えました。するとその兵士は、「ああ、こいつらは軍に投石した子どもたちだ」と言いました。私は「彼らは出血しているのだから、私たちを通させてくれ」と訴えましたが、彼は「兵士に石を投げたんだから、出血させておけばいい」と返したのです。

5分～7分の足止め後、トゥルムサヤの住民たちが救急車に近づき、兵士たちに私たちを通すよう圧力をかけ始めました。すると、軍用車両が3台到着し、数人の兵士と、白い服を着た男が降りてきました。その男は救急救命士だったと思います。私たちを止めた3人の兵士は、道路を塞いでいた自分たちの車の方へ向かい、その様子を見て、彼らが正規軍ではないという私の疑いはさらに強まりました。

軍用車で到着した兵士たちは、すぐにその場に集まっていた住民たちに催涙ガス弾を発射し始めました。白い服を着た男は、2台の救急車に次々と近づき、負傷した少年たちの様子を確認しました。兵士の1人が私の救急車に近づき、携帯電話を取り出して少年を撮影し始め、その後、赤新月社の救急車に乗っていた少年にも同じことをしました。私は負傷した少年の父親に、彼らがアメリカ市民であることを兵士に伝えて欲しいと頼みました。兵士は父親のアメリカパスポートを受け取り、それを撮影しました。その後、その同じ兵士が、最初に私たちを拘束し、今は車のそばに立っている3人の兵士たちと話し合っていました。彼は3人の兵士に対して両方の救急車の鍵を要求し、3人はそれを手渡しました。そして、兵士たちは私たちの鍵を返却し、病院へ向かうことを許可してくれました。

アル・イスティシャリ病院へ向かう途中、負傷した少年が私に尋ねた。「あの子は死んだの？」私は、その友人は容体が安定しており、私たちの前の救急車で病院へ向かっていることを伝えました。すると彼は言った。「あの子のことじゃないんだ。アメル・ラビのことだよ」と付け加えたのです。その瞬間、私は彼らが撃たれた時に、3人目の少年と一緒にいたことに気づきました。それまで、誰も彼のことを口にしていなかったのです。病院に着くと、ニュースで3人目の少年が重傷で、軍の拘束下にあることを知りました。午後8時15分頃、ソーシャルメディアでアメル・ラビが死亡したとの情報を目にしました。

アメルの子供ムハンマド・ラビ（48歳、5人の子どもの父）は、2025年4月12日に行った証言の中で次のように述べた。

2025年4月6日（日曜日）、夕方の礼拝中に友人から電話があり、町の北側で3人の少年が銃撃されたと聞いたと告げられました。その友人によると、そのうち2人はなんとか逃げ延びたが、3人目の少年は私の息子アメルだということです。息子に何が起きたのかははっきりしませんが、人々は彼が負傷し、兵士たちに連れ去られたと噂していました。私は直ちに米国大使館に電話をかけ、この事件を報告するとともに、もし息子がまだ生きているなら必要な医療を受けられるよう、イスラエル当局に連絡してもらえようように要請しました。しかし、大使館の対応は非常に遅く、担当官との会話では、私のパスポート番号とアメルの子供番号の両方を確認するのに、17分近くもかかってしまいました。

約1時間半後、パレスチナ DCO [地区調整連絡事務所] から息子が死亡し、軍が遺体を保管しているとの連絡がありました。さらに、軍がその夜、フワラ軍事基地で遺体を引き渡す予定であるとも伝えられました。私は夕方、赤十字の救急医療チームと共にそこへ向かい、午後10時30分頃、アメルの子供を受け取りました。そこから、私たちは息子の遺体をラマッラーのアル・イスティシャリ病院へ運びました。検視の結果、11か所の銃創が確認され、骨盤の左側、生殖器付近に2か所、額に1か所、首の右側に1か所、右肩に1か所、左肩に1か所、心臓付近に2か所、胸の右側に1か所、右腕に1か所、そして右太ももに1か所存在していました。

アメルの子供の葬儀は翌日、正午の礼拝の後に行われ、トゥルムサヤの墓地に埋葬されました。私の息子は2010年に米国で生まれ、ヨルダン川西岸地区の住民であると同時に米国市民でもありました。2013年、彼は私たちと一緒にパレスチナに戻ってきました。彼は町の男子校の9年生で、頭が良く、優秀な生徒でした。同級生だけでなく、年上や年下の子たちにも多くの友達があり、町の誰もが彼を愛していました。

殺される前、アメルは何度も米国に戻って、そこで暮らして働いている兄たちの元に行きたいとせがんでいました。彼は、2人の兄たちのように、米国で自分のビジネスを始めることを夢見ていました。私はいつも、ここパレスチナの学校を卒業するまでは米国に行けないと言っていました。しかし、決意の強さを見て、希望通り、オンラインショップを開設してあげていました。彼は綿あめマシンを販売する予定で、フェラーリ・ブランドが大好きだったため、その店を「フェラゾ」と名付けていました。

マレク・アリ・イブラヒム・ハッタブ（17歳）

アル・ジャラズン難民キャンプ、ラマッラー地区、2025年4月14日



2025年4月14日、2台の軍用ジープに投石した若者集団がジープから逃げようとした際に、兵士たちがアル・ジャラズン難民キャンプの大通り沿いにある建物の2階バルコニーから彼らに発砲した。マレク・ハッタブが衝突に加わっていたかは不明だが、17歳のハッタブは腹部を撃たれた。近くに住む女性が彼を助けようとしたが、兵士たちが彼女にも発砲したため、自宅に退避せざるを得なかった。ハッタブはラマッラーのアル・イスティシャリ病院に搬送されて手術を受けたが、数時間後にその傷により

息を引き取り、医師によって死亡が宣告された。他にも2人の若者、うち1人は未成年者であったが、

銃撃により負傷した。

ハッタブの友人は2025年4月25日、次のように語った。

2025年4月14日（月）午前0時25分、私は7、8人の友人と一緒に、ラマッラー北部のアル・ジャラズーン難民キャンプ中心部の市場周辺にいました。カフェに座って、おしゃべりやトランプをしており、その友人の1人がマレク・ハッタブでした。彼はその後に占領軍兵士に撃たれ、その負傷が原因で死亡しました。

午前0時30分、ソーシャルメディアの投稿によると、軍がキャンプ内に侵入し、キャンプの南東、ラマッラーとナブルスを結ぶ幹線道路沿いの、サフィ家の近くにある学校周辺に展開しているとのことでした。同時に、キャンプ内に停電が発生しました。

軍が侵入したという話を聞いた直後、私たちはカフェを出て、その場所へ向かいました。サフィ家の近くに着きましたが、兵士の姿は見当たらず、市場エリアに戻りました。通りは真っ暗で、殆ど人影がありませんでした。

私がマレクや他の友人たちと市場エリアに座っていると、突然、2台の軍用車両が25～30メートルほど離れた場所に現れました。ライトは消えており、周囲も真っ暗で、軍用車両が近づくまで私たちはその気配に気づきませんでした。

気づいて直ぐ、私たちは逃げ出し、散り散りになりました。約5分後、市場近くのハラト・アル・カイシヤ地区に再び集合しました、その時には軍用車両のライトが点灯していたものの、兵士が降りてくる様子は見られませんでした。

その瞬間、数人の男たちが約30～35メートル離れた場所から車両に石を投げ始めました。兵士たちは車から降りず、発砲もしようとしていませんでした。約5分後、車両が方向転換し始めたので、私たちは彼らが幹線道路を通って立ち去ろうとしていると思い、撤退する彼らに投石しようとハラト・ジャビーネ／ダル・サフィ通りの方へ向かいました。

私たちは幹線道路に向かって55～60メートルほど進みましたが、車両がそこを通過する様子がなく、彼らが結局立ち去っていないことに気づきました。そこで車両を待っていると、すぐ近くで激しく絶え間ない実弾の発砲音が聞こえてきました。最初は車内から発砲していると思ったのですが、路地から出ようとした瞬間、私に向かって2発の銃弾が放たれ、そのとき初めて、発砲が幹線道路の方から来ていることに気づきました。

高さ6～8メートルの壁をよじ登り、反対側へ飛び降りなければならなかったのですが、着地した際に両足と左腕を負傷してしまいました。

飛び降りた後、通りの中央、私から2～3メートル離れた場所に、人が地面に横たわっており、痛みに悲鳴を上げながら這って逃げようとしているのに気づきました。それが友人のマレク・ハッタブだとわかったのですが、兵士たちに撃たれるのが怖くて、彼に近づくことはできませんでした。

丁度その時、ある家のドアが開き、女性がマレクに「こっちへおいで」と呼びかけてくれました。しかしながら、その直後にその家に銃弾が撃ち込まれ、彼女は家の中に戻らざるを得ませんでした。

私はマレクのもとへ駆け寄り、彼をその場から引き離そうとしましたが、怪我のせいで非常に困難でした。しかも、兵士たちは近づこうとする者なら誰にでも発砲してきました。彼の腕をつかんで近くの安全な場所まで引きずり込むまで、約10分かかりました。彼を仰向けにすると、腹部に傷があったので、私は彼のベルトとシャツを脱がせ、助けを呼びながら、出血を止めようと試みました。

約5分後、軍は撤退し、銃撃も止まりました。そこで私たちは、現場に到着した車にマレクを乗せ、ジフナを経由してアル・イスティシャリ病院に向かいました。道中、彼の荒い息遣いが聞こえ、彼を起こそうとすると、彼は「ドアを開けてくれ、息が詰まる」と言って、その後、意識を失ってしまいました。

病院に着くと、マレクは救急室に運ばれ、医師は彼の容体が非常に深刻で、重度の内出血を起こしていると告げました。彼は4時間にも及ぶ手術を受け、その後集中治療室に移送されましたが、午後10時30分、医師たちから彼が負傷により死亡したと告げられました。

アル・ジャラズーン難民キャンプ在住のアブド・アル＝ハキム・ナクレ（62歳）は、2025年4月16日に次のように語った。

私はアル・ジャラズーン難民キャンプのアル・ワカラ地区で1人暮らしをしており、UNRWA〔国際連合パレスチナ難民救済事業機関〕事務所近くの、幹線道路沿いに住んでいます。私の家は、3階建ての建物の2階にあり、家の真下には物置があり、3階は空いています。また、バルコニーがついており、キャンプの幹線道路に面しています。

2025年4月14日（月）午前1時15分、キャンプ内で銃声が聞こえ、それが私の家の近くから聞こえるように感じ、目が覚めました。その音は幹線道路の方角から聞こえてきたようで、10発ほど連続して発砲するような音が聞こえましたが、それ以外は聞こえませんでした。私はすぐに起き上がり、幹線道路に面した寝室の窓を開けました。その窓はアル・バラカ・スーパーマーケットの上にあります。特に異常な点は見当たりませんでした。

当初、私は銃撃犯たちがパレスチナ治安部隊の隊員だと思いました。というのも、違法車両に対する取り締まり作戦が行われるという噂があり、彼らは前日、キャンプの北にあるジフナ村にいたからです。

約15分後、親戚から電話があり、幹線道路に面した私の家の2階のバルコニーに兵士たちがいると告げられました。その情報がどこから来たのかと尋ねると、地元のグループが報告し、自分もバルコニーに

兵士たちがいるのを目撃したと答えました。その後、兵士たちは階段を降りて、彼の視界から消えてしまったそうです。最初は、兵士たちに気づかれるのを恐れて、バルコニーに面した窓に近づく勇気がなかったのですが、結局、約 30 分後に窓へ行ったところ、兵士たちはもうそこにはいませんでした。

午前 5 時 30 分頃、モスクでの夜明けの礼拝を終えて帰宅して、家の周囲を確認したところ、寝る前に必ず閉めている裏門が開いていることに気づきました。門を閉めてから、兵士たちがいたと聞いたバルコニーへ向かったところ、床に 8 つの空の菓莢が転がっていました。そのとき、私は軍が早朝にバルコニーにいたことを確信しました。私はそれらを拾い集め、携帯電話で写真を撮ってから捨てました。

その後、私のバルコニーの向かい側の路地で、少年が地面に横たわっている映像を見ました。バルコニーは兵士たちが立っていた場所で、殺害されたマレク・ハッタブや彼と一緒にいた若者たちに発砲した菓莢を見つけた場所でもありました。その後、他にも 2 人の若者が銃撃で負傷したことがわかりました。

その場において兵士たちの発砲で負傷した、別のアル・ジャラズン住民は、2025 年 4 月 16 日に次のように語った。

2025 年 4 月 14 日から 15 日の夜にかけて、深夜 0 時頃、私はキャンプ北部の、キャンプとジフナ村を結ぶ道路沿いにある自分のレストランにいました。そこで、ソーシャルメディアを通じ、南側の学校がある地域を経由して、占領軍部隊がキャンプに侵入したことを知りました。同時に、キャンプ内に停電が発生しました。

約 5 分後、地元住民のソーシャルメディアグループで、ジフナへと下る道路がある北側から別の部隊がキャンプに侵入したという情報が広まりました。私のレストランもジフナへと下る道路沿いにあるため、すぐに店を閉めて自宅へ向かいしました。

キャンプの中心部にある自宅に向かって歩いていましたが、通りは停電のため真っ暗でした。キャンプ中心部の市場エリアに着くと、2 台の軍用車両が幹線道路をキャンプ中心部に向かって走っているのが見えたので、兵士たちのいる場所から約 100 メートル離れた幹線道路沿いのモスクを通り抜ける別ルートを選びました。

途中、後に殺害されたマレク・ハッタブを含む 7、8 人の若者たちのグループに出くわしました。彼らは立ち止まり、どこへ逃げればいいのか迷っているようでした。兵士たちの位置について矛盾する情報が飛び交っており、どの方向へ進めばよいのか分からなかったのです。

約 2 分後、ソーシャルメディアの投稿で、軍用車両がキャンプ中央の市場エリアで停止したという情報が流れてきました。建物や店が視界を遮っていたので、その一帯の景色は見えませんでした。私たちはモスクの近くで少し待ち、その後、ソーシャルメディアで別の部隊が市場エリアへと進軍しているという情報を得たため、そこから約 75～80 メートル離れたハラト・アル・カイシヤ方面へ、路地の一つを通って進み始めました。

その後、私は幹線道路に近いジャビネ地区（ハラト・ダル・サフィ）の方へ向かいました。その周辺には空き地を取り囲む壁があり、部隊が前進していると聞き、私はその壁の陰に身を隠しました。

その瞬間、数秒間だけ電気が復旧したかと思うと再び停電し、直後にハラト・ダル・サフィにいる私たちや、その下手のアル・カイシーヤ地区に立っていた他の若者たちに向けて銃弾が撃ち込まれました。

銃撃が始まった時、私は撃たれたと感じ、幹線道路に背を向け、市場の方を向いたまま地面に倒れ込みました。一緒にいた若者たちが、アブ・ア・サブネと呼ばれる脇道に向かって走っていくのが見えました。銃撃は幹線道路方角から来ていることに気がついたのですが、兵士たちの姿は見えませんでした。

私は起き上がれず、横たわっていましたが、銃撃は最初は絶え間なく、その後も断続的に続きました。

地面に横たわっている間、誰かがヘブライ語で「来い」と叫ぶ声が聞こえました。兵士たちがこちらに向かってくるのだと思い、私は無理やり体を起こし、人目につかない路地へ逃げようとしたのですが、再び倒れてしまいました。血を流しながら、兵士たちに捕まって逮捕されるのではないかと恐れ、その場に5分から7分ぐらい、留まっていました。

その後、キャンプに住む女性がやって来て、私を立ち上がらせ、自宅に連れて行ってくれました。兵士たちがいたため、直ぐに病院へ搬送してもらうことはできず、私はそこで約25分間過ごしました。その後、2人の若い男性がやって来て、私を車に乗せ、空き地を通って走っていると、救急車に出くわしたので、その救急車でアル・イスティシャリ病院へ運ばれました。

病院では、救急室に運ばれ、鎮静剤を投与されました。目覚めると、私が負傷したのと同時にマレク・ハッタブも銃弾で腹部に重傷を負ったと聞かされました。

私は右脚の手術を受け、来週には脚にプレートを埋め込む手術を予定しています。医師たちは、私の体内に、腕や脚を含め多くの破片が散在しているのを発見しています。

同日、医師たちは、重傷を負った少年マレク・ハッタブが集中治療室で数時間入院後、傷が原因で死亡したと告げました。

ジハード・アダム・アブドゥッラー・アディリ（16歳）

オサリン、ナブルス地区、2025年4月17日



2025年4月17日、オサリン近郊の国道505号線で投石していたアディリと他の2人に対し、待ち伏せしていたイスラエル軍兵士が発砲し、アディリと他の1人が死亡した。同行していた3人目の若者に怪我はなかった。イスラエルは彼の遺体を拘束している。

マフムード・ミトカル・アリ・アブ・アル＝ヒジャ（12 歳）

アル＝ヤムーン、ジェニン地区、2025 年 4 月 23 日



2025 年 4 月 23 日、歩兵部隊がアル＝ヤムーン村に突入した。兵士たちが家屋に侵入すると、12 歳のマフムード・アブ・アル＝ヒジャを含む 10 人から 12 人の子どもや 10 代の若者たちが近くの墓地に集まり、約 50 メートル離れたその家屋のバルコニーに向かって投石を始めていた。目撃者は B'Tselem に対し、兵士の 1 人が彼らに向けて数発発砲したと語った。そのうちの 1 発がアブ・アル＝ヒジャに命中し、彼は倒れた。映像には、子どもや青少年たちがアブ・アル＝ヒジャを運び出している間も、墓地での発砲が続いていた様子が映っている。その後、彼は自家用車で村の医療センターに搬送されたが、そこで死亡が確認された。彼が搬送された直後、軍のジープが駆けつけ、兵士たちはジープに乗り込んで立ち去っていった。

マフムードの母親ナズミヤ・アブ・アル＝ヒジャ（52 歳、4 人の子どもの母）は、2026 年 3 月 26 日に行われた証言の中で次のように述べた。

2025 年 4 月 23 日の朝、私の息子マフムードは、アル＝ヤムーン中心部の古いモスク近くにある自宅から、彼が 7 年生として通っていたビラル中学校へと向かいました。正午には帰宅し、友人たちと既に食事を済ませたと話し、礼拝の後に近所の友人たちと遊びに出かけました。

午後 4 時頃、息子の友人たちが現れて、「イスラエル軍が私たちの村を襲撃し、マフムードが撃たれた」と告げられ、私は衝撃を受けました。その数分後、彼が腹部と太ももを撃たれ、ジェニンにある病院に搬送されたものの、そこで死亡が確認されたことを知りました。

マフムードは私たちの長男でした。彼は元気いっぱい、人生を愛していました。体を動かすこと、特に水泳が大好きで、私たちに、近所のプールに連れて行って欲しいとよく頼んでいました。また、ペットの世話も熱心で、生まれたばかりの子猫を献身的に世話していました。マフムードは馬が大好きで、友達と一緒に有料の乗馬体験にもよく行っていました。移動用の電動スクーターを欲しがっていましたが、私たちには買う余裕がありませんでした。

私が疲れ切っているのを見ると、いつも駆け寄って抱きしめ、私の世話を焼いてくれました。息子はとても甘えん坊で、ジェニンに住む親戚への挨拶回りにも私と一緒に来てくれました。彼は私の最初の子どもので、13 年間の結婚生活の中で、子どもを授かるのに苦労していた私たちにとって、ようやく授かった子でした。

彼の誕生は、家族全員に計り知れない喜びをもたらしてくれました。彼は、10 歳の弟イブラヒム（今は私たちの唯一の息子）と、11 歳の姉タラ、6 歳の妹ヌールを残して逝ってしまいました。マフムードが亡くなって以来、子どもたちは悲しみに暮れ、ひどく寂しがっています。イブラヒムはまだ子どもですが、大人ぶってその空白を埋めようとし、娘たちは絶えずマフムードのことを尋ね、彼に会いたいと思っています。

アブド・アル＝ハレク・アブド・アル＝ハレク、16 歳

ナブルス地区サレム、2025 年 4 月 25 日



2025 年 4 月 25 日（金）午後 3 時 30 分頃、2 台の軍用ジープがナブルスの東にあるサレム村に進入した。村の中心部に差し掛かった際、ジープに乗っていた兵士たちは、明白な理由もなく数発のスタングレネード〔閃光手榴弾〕を投げ込んだ。当時、16 歳のアブド・アル＝ハレク・アブド・アル＝ハレクは、放課後によくそうしていたように、近くのロータリー付近にある実家の食料品店で 1 人で働いていた。アブド・アル＝ハレクは、兵士たちが村に侵入したことを耳にしたようで、食料品店を閉めることにした。その間、数人の兵士がジープから降り、そのロータリーに隣接する木立を潜り抜けながら、徒歩でロータリーに向かって進んできた。

アブド・アル＝ハレクが店の電動シャッターを閉め、左に曲がって立ち去ろうとしたとき、一発の銃声が響き、彼は左胸を撃たれ、地面に倒れた。近くの洗車場から駆けつけた 2 人の若者が彼を避難させようと試み、なんとか店の裏まで運び出したが、その直後にジープが接近し、ロータリーからの出口を封鎖した。ジープから 5、6 人の兵士が降りてきて、その若者たちに後退するよう命じた。

その間、アブド・アル＝ハレクの親族であるミドハット・ジャブール（41 歳）と、ミドハットの高齢の母サマ・ジャブールも現場に到着した。応急処置を施そうとしていた兵士たちは、ミドハットが親族と名乗ると、彼に近づくことを許可した。その後直ぐに、兵士たちは、洗車場から駆けつけた若者たちが車でアブド・アル＝ハレクを搬送することを許可した。

2 人の若者とミドハット・ジャブールは、アブド・アル＝ハレクを車に乗せた。兵士たちが彼らの行く手を阻んだため、別のルートでナブルス市へ向かった。ジャブールによれば、その時点で、アブド・アル＝ハレクには生命の兆候が見られなかった。ナブルスで、彼は救急車に移され、ジャブールに付き添われて病院へ搬送された。到着後、医師たちは蘇生を試みたが成功せず、死亡を宣告せざるを得なかった。

イスラエル軍は、アブド・アル＝ハレクの搬送直後に村を離れた。

シファ・マルーフ（69 歳）は、証言の中で次のように述べた。

2025 年 4 月 25 日（金）の午後、私は遊びに来ていた姉のファイゼ（66 歳）と一緒に、ア・トゥタ・ロータリーに近い村の中心部にある自宅にいました。午後 3 時 30 分頃、突然スタングレネード〔閃光手榴弾〕の爆発音が聞こえました。私は北向きの窓へ行き、自宅から約 100 メートル離れた「イズ・アル＝ディン・アル＝カッサム・モスク」の近くに 2 台の軍用ジープが停まっているのを見ました。その軍用ジープは村の西側に向かって走り出した後、家々の間を通り抜けていたので、見えなくなりました。

その直後、自宅から僅か数メートル離れた場所にある「アル・イクワ」食料品店の電動金属シャッターの音が聞こえました。この食料品店は村人のムサブ・アブド・アル＝ハレクが経営しており、開店や閉店時には毎日その音を耳にします。村に軍が駐留しているせいで、店を閉めているのだろうと私は推測

しました。通常、軍が急襲してくる時は、兵士が店に入り込んで商品を壊すのを恐れて、店を閉めます。そして、皆が家の中に逃げ込み、ドアに鍵をかけて身を守るのです。

店のドアが閉まった直後、一発の銃声が聞こえ、近くの窓から外を見ると、16 歳のアブド・アル＝ハレクが地面に倒れているのが見えました。彼は店主の息子で、放課後によく店を手伝いに来ていました。私は、叫び声を上げました。家の隣で洗車場を営む男性が直ぐに自分の店で洗車中の別の若い男性を連れて駆けつけてくれました。

2 人の若者はなんとかアブド・アル＝ハレクを数メートル移動させ、店の裏手の地面に寝かせました。私と姉が家の階段に辿り着いたとき、ロータリーの方から 5、6 人の兵士が銃を私たちに向けて近づいてくるのが見えました。彼らは私と姉に家の玄関前で立ち止まるよう命じ、その後私たちを無理やり家の中に入るように求め、2 人の若者にはこの場から離れるよう命じました。私は救急車を呼び、窓から様子を見守りました。兵士たちはアブド・アル＝ハレクの側に立っていました。彼はひどい状態に見えましたが、私には出血は確認できませんでした。兵士たちが彼の服を引き裂いて脱がせていました。その間、彼の親族数人が到着しましたが、兵士たちは彼らを見ると、「下がれ」と怒鳴りつけたのです。すると、1 人の男性が「自分は負傷した少年の親族だ」と告げ、兵士たちは彼に近づくことを許しました。

兵士たちがバッグから救急用品を取り出すのを見ましたが、それらは使われませんでした。代わりに、彼らは若者たちに合図を送り、近づいて彼を搬送するよう指示した。若者たちは洗車場に停まっていた車に負傷した少年を乗せ、ア・トゥタ・ロータリーを通る道を走りましたが、軍のジープがロータリーで道を塞いだため、若者たちは引き返し、別のルートを取りました。その後、私は軍のジープがその地域から立ち去るのを見ました。

アブド・アル＝ハレクのいとこミドハト・ジャボール（41 歳、4 人の子どもの父）は、証言の中で次のように述べた。

金曜日、私は村の中心部、ア・トゥタ・ロータリー近くの自宅にいました。午後 3 時 30 分頃、10 歳の息子ユセフが、16 歳のいとこアブド・アル＝ハレクが負傷しているのを窓から見たと言いました。私はすぐにソファから立ち上がり、2 階のアパートを出て建物の入り口へ下りると、そこで母と出会いました。私は母の手を取り、2 人で 10 メートルほど歩き、アブド・アル＝ハレクが地面に横たわっている場所まで行きました。数人の兵士が彼の周りに立っており、そのうちの 1 人が私に立ち止まるよう合図を送ってから、アラビア語で「君は彼の兄弟か？」と尋ねてきました。私は彼が私の兄弟だと答えると、彼らは私に近づくよう合図を送りました。

私は座り込み、アブド・アル＝ハレクの頭を膝の上に載せました。彼はまだ息をしていますが、呼吸は非常に遅く、意識は殆どありませんでした。その間、兵士たちは彼の服を引き裂き、体を左右に返していました。弾丸の侵入箇所を探しているのだと察し、胸の左側にごく小さな穴があるのに気づくと、私は彼らに「ここだ、この場所だ」と伝えました。兵士の 1 人がバッグから注射器を取り出し、蓋を開けると同時に、アブド・アル＝ハレクは大きな呻き声を上げました。あの瞬間が、彼が最後の息を引

き取った時だったと思います。兵士が「彼を連れて行け」と言ったので、私は洗車場のオーナーと、彼と一緒にいた別の若い男性を呼び寄せました。私たちは力を合わせて、アブド・アル＝ハレクを持ち上げ、その若い男性の車に乗せました。私たちはア・トゥタ・ロータリーを通り抜けようとしたのですが、そこにいた 2 台の軍用ジープが道を塞ぎ、先ほどまでアブド・アル＝ハレクの周囲にいたのと同じ兵士たちが、そのジープの近くにいました。彼らは銃を私たちに向けてきたので、私たちは引き返し、ナブルスへ向かう別ルートを取らざるを得ませんでした。私は救急車を呼び、負傷者を乗せて向かっていることを伝えました。その時点で、アブド・アル＝ハレクには生命の兆候は全く見られませんでした。

私たちはナブルス市役所ビルの近くで救急車と合流し、アブド・アル＝ハレクを救急車に移し、私も彼と一緒に乗りました。救急隊員は脈拍と呼吸を確認しましたが、生命反応はありませんでした。病院に到着し、医師たちが蘇生を試みましたが、無駄でした。彼らはアブド・アル＝ハレクの死亡を宣告せざるを得ませんでした。それは私にとって大きな衝撃でした。彼は私のいとこの息子で、私は彼をとっても愛していました。彼は人望も厚く、子どもも大人も皆、彼と一緒にいたいと願っていました。彼はいつもとても親切で、誰にでも手を差し伸べていた人物でした。

アブド・アル＝ハレクの父親ムサブ・アブド・アル＝ハレク（49 歳、8 人の子どもの父）は、2026 年 3 月 16 日に次のように語った。

彼が 4 歳の時に、私はアブド・アル＝ハレクの母と別れました。子どもたちの親権は私が持ち、彼女は再婚しました。別居後、私は子どもたちに深い慈しみを抱きながら、10 年間は再婚せず、何かを欠いていると感じないように、子どもの世話に専念しました。私たちはとても仲が良く、私は息子にとって母であり父でもあり、また彼は私の心の支えとなっていました。

2025 年 4 月 25 日金曜日、私の記憶では午後 3 時 30 分頃、私は村の中心部、「ストロベリー・サークル」にある私の店 - 食料品店 - をたった 30 分だけ離れていました。2000 年からこの店を経営していますが、息子のアブド・アル＝ハレクが成長したので、仕事に関しては全て彼に頼るようになっていました。

一瞬にして、全てが変わってしまいました。私は近所の住民の結婚式の披露宴に出席する予定があり、店をたった 30 分ほど離れるため、息子に店番を頼んだのです。披露宴は村の西側で行われ、皆がそこへ出かけていたため、この通りには殆ど男性がいなかったのです。

すると、友人から電話があり、「アブド・アル＝ハレクが負傷した」と知らされました。私はスマホで店の防犯カメラの映像を確認すると、店が閉まっているのがわかりました。私は兄のムジャヘドを連れて、すぐに車で店へ向かいました。途中、村の西側でジープ 2 台と救急車 1 台を見かけたので、私は救急車を止め、負傷者がその車に乗っているかどうか尋ねたのですが、彼らは、その人はラフィディア病院方面への別の救急車に乗っていると答えました。私は息子の容体を尋ねると、彼らは私が親族かどうか尋ね、嘘をつかれたくなかったので、親族ではないと答えると、彼らは彼が亡くなったと告げました。

私の兄のムジャヘドが「いや、そんなはずはない」と叫び、私はその場に立ち尽くしてしまいました。

何が起きているのか、頭には入ってきませんでした。兄が私の代わりに運転席に座り、私たちはラフィディア病院へと車を走らせました。道中、ムジャヘドは「聞いたことを信じちゃいけないよ」と繰り返し私に言い続けていました。ラフィディア病院に到着すると、救急救命室では医師たちが息子の命を救おうと懸命に処置を施していました。息子は胸に 2 発の銃弾を受けていました。医師たちは命を救うことができず、彼が亡くなったことを告げ、哀悼の意を表し、私を慰めようとしてくれました。息子はもういないのだ。私は一瞬にして彼を失ってしまいました。

兵士たちが村にやって来て、何の理由もなく彼を撃ったのです。兵士に向かって投げられた石など、何一つなく、通りには人影もなかったのですから。

息子は高校 1 年生で、今頃は高校 2 年生になっているはずでした。そして、来年には大学生になっていたかもしれません。彼はスポーツが大好きで、祖父のように体育教師になりたいと願っていました。水泳や乗馬をし、サッカーをこよなく愛し、学校のチームでプレーし、定期的にジムに通ってウェイトトレーニングもしていました。私は彼のために牝馬まで買ってあげたほどです。彼はその馬をとっても可愛がり、バスケットやトルコ菓子で甘やかしていました。

彼は兄弟姉妹と非常に強い絆で結ばれており、特に、1 歳年下で知的障害のある妹のニルミンには、温かく愛情深く接していました。彼女も彼をとっても愛しており、今も彼を恋しく思っています。

息子の死以来、私たちはとても辛い日々を過ごしています。この喪失の痛みがどれほど激しいか、言葉では言い表せません。毎日、私は墓地へ行き、まるで彼がまだ生きているかのように会いに行き、話しかけています。1 人になると、スマホに保存した彼の写真を見ます。彼の友達が成長していく姿を見る度に、深い悲しみに襲われます。今、彼らは高校 3 年生で、もうすぐ大学に進学する時期なのに、私の息子は死んでしまい、何の理由もなく、ただある兵士が血を流したかったというだけの理由で、土に埋められているのです。

息子は私たちの店の前で殺されました。兵士たちは特にその年齢の少年たちを標的にしているのだと思います。彼らは少年たちに生きていて欲しくない、死んで欲しいだけなのです。彼と同じ年頃の多くの子どもたちが、何も悪いことをしていないのに、このように殺されているのです。

リダ・マフムード・カマル・バニ・オデ、17 歳

タムン、トゥバス地区、2025 年 5 月 15 日



2025 年 5 月 15 日、タムンの町への軍事襲撃の最中、兵士たちは、リダ・バニ・オデを含む武装パレスチナ人が立てこもっていた 3 階建ての建物を包囲し、その建物に向けてショルダー・ミサイルを発射した。続く銃撃戦の中で、リダは他の 4 人のパレスチナ人とともに死亡した。作戦中、イスラエル軍は建物の大部分を破壊し、居住不能な状態にした。作戦終了時、イスラエル軍が他の事例でも行ってきたように、バニ・オデの遺体は、他の 3 人の遺体と共に軍用ブルドーザーのバケットに積み込まれ、タ

ムーンの街や近隣の集落の通りを運ばれた。軍によると、襲撃中にこの町および近隣のトゥバス市で 4 人のパレスチナ人が逮捕された。バニ・オデはイスラム聖戦組織の軍事部門の活動家であった。イスラエルは彼の遺体を拘束している。

リダの母親サマヘル・バニ・オデ（49 歳、4 人の子どもの母）は、2026 年 3 月 30 日に行った証言の中で次のように述べた。

2025 年 5 月 14 日、殺害される前日、リダは帰宅しましたが、普段とは様子が違っていました。彼は私や他の家族と一緒に何時間も座っていました。まるで私たち 1 人ひとりを観察しているかのようでした。彼はまた、兄を訪ね、たくさん話し、たくさんの質問をしました。その日、何かのタイミングで、彼は私に新しいズボンを買いたいと言ったので、私は父親が買いに行ってくれると伝えました。

リダはいつも笑いながら、彼の姉の子どもたちと遊んでいました。みんなと一緒に写真を撮るのも大好きでした。普段は外出し、夜遅くに帰ってくることが多かったのですが、その日は一日中家にいました。夕方、息子はシャワーを浴びて新しい服に着替え、私に「この服、どう思う、ママ？」と尋ねました。私は「マシャアッラー [アッラーが望まれた通り]、あなたってハンサムだから、何を着ても似合うわよ」と答えました。私は台所にいて、彼を見つめながら、「マシャアッラー」と言いました。まるで久しぶりに彼を見たような気がして、彼の顔は輝いて見えました。すると彼は私のところへやって来て「見て、僕、ハンサム？」と言って、私にキスをしたり抱きしめたりし始めました。私は彼の兄の香水を取り出して彼に吹きかけ、彼は「香水はもう十分だよ、ママ」と言いました。

彼は夕食の後に出かけ、私はまるで別れを告げるかのように立ち尽くして彼を見送りました。私は彼に「神様があなたを守ってくださいますように、息子よ」と言いました。あの夜、彼がどこへ行ったのかは分かりません。朝、私はとても早く起きて、彼の父親を起こし、朝食を用意しました。その後、再び眠りにつく前に、携帯電話の電源を入れましたが、占領軍による軍事活動やその類のニュースは何も見当たりませんでした。普段なら、占領軍がタムン地区を襲撃しない週などほとんどないのに・・・私は携帯電話の電源を切りました。

午前 7 時頃、私はまだ眠っていました。すると、姉から電話があり、軍が町を襲撃し、特殊部隊が家の一軒を包囲していると伝え、リダが家にいないなら、無事を確認するために電話をしたほうがいいと勧めてきました。電話をしましたが、彼は出ませんでした。その後、他の親戚からリダの安否を尋ねる電話がかかってきました。「リダは家にいる？大丈夫？」彼の兄のアシュラフはまだ眠っていたので、彼を起こして、軍が町を襲撃し、リダが家にいないことを伝えましたが、彼はそれを気にも留めていませんでした。彼はリダに何かが起こるなんて思っていなかったのです。それから私は息子と娘たちの朝食を作りに行きましたが、その間にアシュラフに電話があって、「リダのために祈って」と告げられたのです。アシュラフは私のところへやって来て、「お母さん、ガスの火を消して、ガスの火を消して、朝食を作らないで、食べたくない」と言いました。彼は家の中を落ち着きなく歩き回り、「ママ、リダのために祈って」と繰り返しました。私がアシュラフに「リダに何かあったの？」と尋ねると、彼は、リダが軍に包囲されている家に、他の若者たちと一緒にいると教えてくれ、私は泣き出してしまいました。

人々が集まってきて、私を慰めようとしてくれました。彼らは、みんな無事だ、若者たちは家から出てくるだろう、と言ってくれていました。すると、リダが殺されたという知らせが入りました。まだ18歳にもなっていなかった私の息子。優しい心を持ち、あらゆる素晴らしい資質を備えた無垢な少年。私は自分を責め始めました。なぜ出かける時に抱きしめてやらなかったのだろう？なぜ彼を行かせてしまったのだろう？私は自問自答し、独り言を呟き始めました。今にも彼が私の元に戻ってきて、家の中に入ってくるのではないかと想像し、ドアや窓をじっと見つめ続けました。家の隅々に彼の姿が見えるような気がして、涙が止まりませんでした。私がどんな状態にあるか、神だけがご存知でした。しかし、神（神は崇められよ）は息子をお召しになり、他の者たちと共に命を落としてしまったのです。

彼が亡くなる前の最後の「イード・アル＝フィトル [断食明けの祭り]」の間、私たちは一緒にいて、素晴らしい日々を過ごしました。しかし今年、リダはこの祝日に私たちと一緒にではありません。私は祝日の間、たくさん泣きました。幸せな気持ちになることなどできませんでした。

リダや他の仲間たちは連れ去られ、彼らの遺体は占領軍によって拘束されています。私は毎日、彼のことで苦しめられ、毎日神に、彼の遺体を私たちに返してくれるよう祈っています。リダにキスをして、抱きしめたいのです。彼の墓に寄り添いたいのですが、占領軍は今もお彼の遺体を拘束しています。まるで彼が毎日、新たに殺されているかのようです。なぜなら、彼の遺体さえも私から遠く離れているからです。私は一分一秒ごとに彼のことを思い出しています。彼が今どこにいるのか、私にはわかりません。占領軍は、何十人もの殉教者たちの遺体と同様に、彼の遺体も拘束しているのです。

私は全ての人道支援団体や人権団体に対し、介入して彼の遺体を取り戻し、彼を埋葬できるよう助けてくれるよう訴えます。私は苦しんでおり、体調も崩れています。彼の遺体を見て、ここ私たちの土地に埋葬し、まるで毎日会っているかのように彼の墓を訪れることなしには、生きていけません。

彼の死の知らせは衝撃でしたが、私は神と運命を信じています。ひどく恋しく思い、抱きしめたい、あるいはただ彼の墓に触れたいと願っています。私は毎日、彼がまた私のところに戻ってくるのを待っているかのようにドアを見つめ、「リダが来た、リダが去った」と呟きます。しかし今日に至るまで、私は彼の埋葬が許されていません。それが、たとえ墓の中であっても、彼がまだ私たちと一緒にいると感じ、少しばかりの安らぎを見出すための唯一の方法なのです。

ムハンマド・ニダル・マジェド・アブ・リブデ、17歳

エルサレム旧市街、2025年5月16日



2025年5月16日、警察官がムハンマド・アブ・リブデ（17歳、エルサレム旧市街在住）を、旧市街のバブ・アル・シルシラ（鎖の門）で射殺した。警察によると、彼は警察官を刺し、中程度の怪我を負わせたという。イスラエルは彼の遺体を拘束している。

ニダル・シャグヌビ（16 歳）

ナブルス地区ブルカ、2025 年 5 月 17 日



2025 年 5 月 17 日、ニダル・シャグヌビと他の 2 人の 10 代の少年たちが国道 60 号線で投石をしていた際、イスラエル兵士が待ち伏せて発砲した。シャグヌビは重傷を負い、同じく負傷した友人たちは現場から逃げ出し、住民によって救急車に運ばれ、ナブルス市の病院へ搬送された。シャグヌビの行方を搜索していた地元住民たちは、その現場に近づけなかった。兵士たちが依然として現場に留まり、空に向かって発砲していたため、救急車による搬送が妨げられていたからである。発砲から

約 2 時間後、パレスチナ側の DCO [地区調整連絡事務所] は、シャグヌビが負傷により死亡したとの連絡を受けた。イスラエルは現在も、彼の遺体を拘束している。

ニダルの父親ワエル・シャグヌビ（54 歳、5 人の子どもの父）は、2026 年 3 月 28 日に行った証言の中で次のように語った。

ニダルが 2 歳の時、彼の母と私は離婚し、私はその後再婚しました。ニダルは私たちと一緒に暮らしており、月に 2 回、その都度数日間、母親を訪ねていました。

2025 年 5 月 17 日（土）午前 11 時頃、ニダルはナブルスの「アスカール R.C.」に住む母親のもとへ 3 日間の訪問から戻ってきました。彼が戻ってきたとき、彼は嬉しそうに興奮した様子で、2 日前にナブルスで受け取った初めての身分証明書を私に見せてくれました。彼は私に自分の写真を見て欲しいと頼み、「どう見える？」と尋ねてきました。私は「よく似合ってるよ」と答えました。彼は大人になり、身分証を持てることに胸を躍らせ、私も同じ気持ちでした。彼は既に私より背が高く、私は彼が日ごとに成長していく姿を見守っていました。彼は以前、ひげや口ひげをより際立たせるために剃っていたことがあり、私たちはそれを笑い話にしていました。

午後 4 時半頃、私たちは 2 人きりで昼食をとりました。彼は母との面会や、ナブルスに住む叔父たちを訪ねたことについて話してくれました。午後 6 時、友人のヤザンがやってきて、2 人は一緒に村へ遊びに出かけました。ニダルはいつものように身なりを整え、香水をつけ、新しい身分証は失くしてしまうのが怖くて家に置いていきました。彼は家を出て、二度と戻ってきませんでした。

午後 10 時頃、村の誰かから電話があり、ニダルが負傷したから、村の北側へ来るように言われました。私はすぐにそこへ向かいました。そこには数人の住民がいて、道路には 3、4 人の兵士が立っていたので、私はそのうちの 1 人に近づき、何が起きたのか尋ねました。彼は私の身分証の提示を求めてきました。私は負傷者を見たいと伝えた。すると彼は近くのオリーブ畑の方を指さし、「あいつはテロリストだ」と言いました。私は息子がどこにいるのか尋ね、会わせてほしいと頼み、その方向へ進もうとしましたが、兵士は銃の引き金を引き、近づくのを禁じ、撃つと脅しました。私は自分が父親であり、息子はまだ子どもに過ぎないと訴えました。

兵士は電話をかけ、その地域の責任者だと名乗る人物と私とを話させました。その将校はアラビア語で、

息子のために祈り、彼を憐れんで欲しいと言いました。彼の言葉から、ニダルが殺されたのだと理解しました。私が望んでいたのは、ただ息子に会って、彼に何が起きたのか、どうやって、なぜ撃たれたのか、そしてどこを撃たれたのかを知ることだけでした。

近くを走る国道 60 号線には軍用車両や、マゲン・ダビド・アドム（イスラエル）の救急車もありました。地元の住民たちが私を抱きしめ、落ち着かせようとしてくれました。パレスチナ側の DCO [地区調整連絡事務所] に電話したところ、イスラエル側の DCO から息子の死亡について連絡があったと伝えられました。私はどこを撃たれたのか尋ねましたが、彼らはそのような情報は持っていないと言いました。

ニダルの死以来、私は精神的に辛い日々を送っています。1 人で引きこもりがちになり、家族を養わなければならないにもかかわらず、仕事をするのも困難です。安定した収入源がなく、家族の経済状況は非常に厳しくなっています。

私はまだ息子の姿を見ていません。息子が負傷した後も、亡くなった後も、面会を許されませんでした。彼が木立の中に横たわっていた時、私は彼のそばに近づくことも、顔を見ることも許されず、体のどの部分に傷を負ったのかも分かりません。遺体は私たちに返還されておらず、彼に別れを告げたり、埋葬したりする機会も与えられません。

ユセフ・フカハ (14 歳)

シンジル、ラマッラー地区、2025 年 6 月 2 日

2025 年 6 月 2 日、兵士たちはシンジル村近くの国道 5056 号線に隣接する農地に設けた待ち伏せ地点から、ユセフ・フカハを射殺した。B'Tselem が、この事件を防犯カメラで捉えていた近隣住民から得た証言によると、多数の兵士が午前中に待ち伏せを仕掛け、午後 1 時 32 分に 2 発の銃声が聞こえた。約 7 分



後、さらに 2 発の銃声が響いた。発砲後、映像には、負傷して倒れたフカハの側に 2 人の兵士が立っている様子が映っていた。2 回目の発砲から約 10 分後、3 台の軍用救急車が現場に到着し、兵士たちはフカハ氏を覆い隠してそのうちの 1 台に乗せた。救急車が去った直後、兵士のうち 2 人が家へと向かい、防犯カメラの映像の閲覧を要求した。目撃者の男性によると、彼は兵士たちと一緒にその映像を見たという。映像には、最初の発砲音が聞こえる約 1 分前に、フカハが国道 5056 号線に向かって歩き、

その後数メートル後退し、オリーブの木々の間に約 7 分間隠れている様子が映っていた。その間、イスラエルのナンバープレートをつけた 3 台の車両が道路を通過したが、フカハは何の行動も取らなかった。兵士たちは映像を数回視聴した後、それを消去した。この事件後、軍はフカハが道路に向かって石を投げようとしたと主張した。フカハの遺体はその後、イスラエルによって拘束されたままである。

この村に住む 45 歳の住民は、事件の翌日に行った証言の中で次のように語った。

私はシンジル町の北側にあるアル・マジラア地区に住んでいます。私の家は、マアレ・レヴォナやギヴァト・ハロエの入植地、そして国道 60 号線へと続く国道 5056 号線沿いにあります。この道路は「旧ナブルス街道」としても知られています。

この事件の10日前、2025年5月24日（土）から、入植者たちから「車両への石投げがあった」との申し立てを受け、私の家の周辺での兵士たちの異様な動きに気づきました。その間、入植者による襲撃から家を守るために防犯カメラを設置していたため、兵士たちは私の家に数回家宅捜索を行いました。

2025年6月2日（月）、私は朝から、家の周辺や、そこから約20～25メートル離れた向かいの農地で、兵士たちの姿や動きに気づいていました。

午後12時54分、私が家の屋根の上に立っていると、向かいの農地に、砂漠色のタープ〔巨大な防水シート〕で身を隠した4人の兵士が座っているのが見えました。数分後、ドローンの存在にも気づき、私は家の中に戻りました。

午後1時32分、数秒間隔で2発の銃声が聞こえました。私は庭に出てみたが何も見当たらず、その後窓から外を覗いたが、不審な動きは見当たりませんでした。

午後1時40分頃、再び庭に出ると、さらに2発の銃声が聞こえました。今度はより大きく、近くからでした。農地から道路に向かって降りてくる兵士2人の姿が見え、そのうちの1人がもう1人の兵士にヘブライ語で「ここから来い」と言っているのが聞こえました。

私は家の中に戻り、防犯カメラで何が起きているかを見守りました。家から10～15メートルほど離れた木の下に、負傷者が横たわっているのが見えました。2人の兵士は彼の側に1分か2分ほど立ち尽くした後、農地の方へ戻っていきました。

午後1時50分頃、救急車を含む軍用車両が到着しました。兵士たちは担架を取り出し、負傷者をその上に載せました。午後2時13分、彼らは少し前に到着していた救急車にその負傷者を乗せ、救急車は走り去りました。

その直後、4人の兵士が私の家に来て、中に入り、手袋をゴミ箱に投げ込みました。彼らは私に防犯カメラの映像を見せ、巻き戻すよう要求しました。映像には、黒い服を着た少年が農道を歩き、道路に近づいた後、引き返してオリーブの木の下での低い石垣の隣に約7分間立っている様子が映っていました。その間、道路を車両が通り過ぎていましたが、何も起こっていませんでした。

さらに兵士たちがやって来て、映像に何か映っているかと尋ね、映像を見ていた兵士たちが「いいえ、彼が木の後ろにいることしか映っていません」と答えました。兵士の1人がその映像を撮影し、その後、彼らは録画データを削除しようとしていました。

その後、国境警察の警官がやって来て、携帯電話で負傷した少年の写真を見せてくれました。彼は既に死んでいるように見えました。私は彼がフカハ家の一員だと気づきましたが、知らないふりをしました。

その後、将校がやって来て、兵士の 1 人を称賛し、「よくやった」と言いました。それから彼らは、調査を続ける間、私に部屋に留まるよう命じた。また、私の携帯電話も調べ、何か撮影したかを尋ねました。

兵士たちは午後 3 時 20 分頃まで家に留まり、その後立ち去りました。彼らが去るやいなや、私はパレスチナ当局に通報し、村の住民たちにメッセージを送って、子どもたちが無事かどうか確認してもらいました。カメラを確認したところ、全ての録画が削除されていたことが判りました。

約 1 時間後、イスラエルのメディアは、石を投げた「16 歳のテロリスト」を軍が射殺したと報じましたが、これは私が映像で目にした内容とは完全に矛盾しています。事件から約 2 時間後、私はソーシャルメディアを通じて、殺害されたのが 14 歳の少年、ユセフ・フアード・アブド・アル＝カリム・フカハであることを知りました。彼の遺体は今もなお、イスラエル当局によって拘束されたままです。

ユセフの父親 (48 歳、6 人の子どもの父) は、2025 年 6 月 10 日に行った証言の中で次のように語った。

私は農民で、ラマッラーの北東にあるシンジルという町に住んでいます。妻と私には 6 人の子どものおり、そのうちの 3 人は 18 歳未満で、ユセフもその 1 人でした。

亡き息子ユセフは 2010 年 8 月 12 日に生まれました。彼はシンジルの男子高校の 9 年生でした。彼は車が大好きで、特に BMW を愛し、整備士になりたいと願っていたので、私たちは彼が職業学校に転校する計画を立てていました。

2025 年 6 月 2 日 (月) 午後 1 時頃、ソーシャルメディアを通じて、町の北部で子どもが負傷したという情報を得ましたが、それが誰なのかは書かれていませんでした。午後 2 時頃、負傷した子どもは私の息子である 16 歳のムハンマドだという報告が投稿され始めましたが、その時、ムハンマドは自宅で私の目の前に座っていました。市役所から確認の連絡があり、私はムハンマドが目の前に座っていることを伝え、確認のために彼の ID 番号も伝えました。

ユセフはその時外出しており、私は彼が町の中心部にいると思い込んで、北部にいるとは思っていませんでした。約 1 時間後の午後 3 時頃、軍が身元を誤認してしまい、負傷した子どもは実は私の息子ユセフであるという報告が入り始めました。

その時点で、市役所から再び電話があり、軍がパレスチナ側の DCO [地区調整連絡事務所] に連絡を取り、市長が単独でフワラ基地へ赴き、その子の身元確認を行うよう要請したと伝えられました。市役所からは、確認のため、息子のユセフの他の身分証明書の提出を求められました。市長はフワラ基地へ赴き、殺害された人物が私の息子ユセフであることを確認しました。

もう 1 週間以上が経ちましたが、イスラエル当局は依然として息子の遺体を私に引き渡してくれません。そのため、私は追悼のためのテント(mourning tent)を設営して弔問客を迎えることもできていません。

私たち、家族や友人たちは、彼にきちんと別れを告げることもできていません。私は今でも、彼がどこにいるのか、遺体がどうされたのかさえ分かりません。全ては自治体を通じて処理されています。私は、息子を埋葬し、別れを告げることができるよう、息子の遺体を受け取る権利を強く求めます。14 歳の子どもを殺害することを正当化できる理由など、何一つありません。

アマル・ムタズ・ハマリエル、14 歳

カフル・マリク、ラマッラー地区、2025 年 6 月 23 日



2025 年 6 月 23 日、道路を見下ろす丘から装甲軍用車両に向かってアマル・ハマリエルが石を投げた後、その車内の兵士たちが彼の背中を撃った。彼と一緒にいた友人は、彼が倒れるのを目撃し、現場から逃げ出した。ハマリエルは、DCO [地区調整連絡事務所] との調整を経て到着したパレスチナの救急車によって、既に生命反応のない状態で搬送され、ラマッラーの病院で死亡が確認された。

2025 年 6 月 25 日、アマルの友人は次のように語った。

2025 年 6 月 23 日（月）午後 2 時 15 分、友人のアマルから電話があり、午後 2 時 30 分に村の中心で待ち合わせようと言われました。私たちは合流し、彼の叔父ムハンマド・ハマリエルが経営する「ア・リガ・カフェ」へ向かいしました。アマルは店の掃除や準備を始め、彼が作業をしている間、私たちはパレスチナの情勢について話しあっていました。

アマルが作業を終えると、彼は村の西にある「ミスク」という店で飲みに行こうと提案し、私たちは歩いて行きましたが、閉まっていました。そこで彼は、449 号線を見下ろせる場所へ行こうと提案しました。歩いて行くと、道路から約 150～200 メートルの農地に差し掛かったところで、アマルが黒い制服を着た兵士たちを指さし、私も近くに青と白のイスラエル警察の車両が停まっているのが見えました。

兵士の 1 人が、狙撃姿勢でライフルを車両の上に置き、私たちのいる場所を狙ったので、私たちはすぐに高い丘に身を隠し、通りからも、兵士たちがいる道路の南端からも見られないようにしました。私たちは交代で警察車両を覗き込み、まだそこにいるかどうかを確認していました。

約 10 分後、パトカーはテル・アル＝アスール方面へ走り去りましたが、アマルは依然として不安そうで、軍が近くにいるのを感じていました。それでも、私たちはもう少し近づき、449 号線から約 100～150 メートルの地点で立ち止まりました。

丁度その時、アロン道路／アイン・サミヤ道路からテル・アル＝アスール方面へ白い車が近づいてくるのが見えました。その道路は軍用道路と見なされており、パレスチナ人は利用しないため、入植者の車だったと思います。その車は奇妙な運転をしていて、まっすぐ進まず、それでもテル・アル＝アスール方面へと進み続けていました。車内の入植者たちは私たちに気づいたようでした。

車が通り過ぎてから、私たちはそこに 10 分ほど座っていました。すると、東からテル・アル＝アスール

難民キャンプに向かって、イスラエル国旗を掲げた軍用車両が猛スピードでやってくるのが見えました。私たちはその車両を知っており、「国旗パトロール」と呼んでいました。村の誰もが、その車両には通常、最も悪質で暴力的な兵士たちが乗っていることが判っていました。

その瞬間、父から電話がかかってきたので、私は急いで 30～40 メートルほど村の方へ戻って電話に出ました。父が「今どこにいるんだ」と尋ねたので、「村のグラウンドでアマルとサッカーをしている」と答えました。そう言ったのは、とても怖かったからです。

話している間、アマルの方を見ると、彼が私を見つめていました。彼は、私が置き去りにした場所、バイパス道路に近いところにまだ立っていたのです。私が一瞬、村の方を振り返ったとき、突然 2 発の銃声が聞こえ、振り返ると、アマルが倒れていました。私は農地を抜け、村へと走り出しました。走っている最中、誰かが「止まれ！」と叫ぶ声が聞こえましたが、私は振り返らず、そのまま逃げ続けました。

村の家々に辿り着くとすぐに、私はアマルの携帯電話に電話をかけたのですが、彼は出ませんでした。倒れた様子や、動いていないこと、そして何の音も立てていないことから、私は彼が射殺されたのだと悟りました。その後、それが事実だと知り、パレスチナ医療センターへ別れを告げに行きました。

シルワド在住の救急救命士で、ハマリエルを病院へ搬送したアヘド・サミラット（48 歳）は、2025 年 6 月 26 日に行った証言の中で次のように述べた。

2025 年 6 月 24 日（火）午後 5 時 30 分頃、カフル・マリク村の若者たちから電話があり、村の南にあるバイパス道路付近で、負傷者が軍に拘束されていると知らされました。

私はシルワドから救急車で、救急救命士のスヘイル・ハメド、同じく救急救命士である私の息子ムハンマド・スメイラットと一緒に、デイル・ジャリル村を経由してその場所へ向かいました。私たちは、テル・アル＝アスールとして知られる軍事基地の近くにある、村の西側の正門に到着しました。そこは 1 年以上前から鉄製の扉で封鎖されていた。私がそこへ向かったのは、若者たちが、占領軍がその場所で負傷者を私に引き渡すと言っていたからです。

5 分以内に到着すると、パレスチナ赤新月社の救急車はありましたが、占領軍の兵士はいませんでした。負傷者の居場所を特定するのに少し時間がかかり、結局、負傷者がアロン道路とテル・アル＝アスール軍事基地を結ぶバイパス道路の近くにいることが分かりました。そこは軍事道路と見なされており、沿道には入植者の前哨基地が幾つかありましたが、私はそこへ車を走らせ、鬱蒼とした木立に辿り着きました。バイパス道路の脇には、軍用車両 4 台と白い軍用ピックアップトラックが停まっていたが、イスラエルの救急車や軍用の医療車両は見当たりませんでした。

最初の軍用車両が 5 分間、私たちの進路を塞ぎ、その後、ある兵士が私を最後尾の車両へと誘導し、そこで別の兵士が道路の中央に戻るよう指示しました。私は車を戻し、停車して車外に出ました。するとすぐに兵士が近づいてきて、ヘブライ語で自己紹介し、負傷した少年が死亡したと告げ、担架を持って

くるよう求めました。それから彼は、道路の北端にある、カフル・マリク方面の丘を指さしました。

救急隊員のスヘイル、息子のムハンマド、そして私は、そこへ徒歩で向かいました。私たちは100～150メートルほど歩き、道路より僅かに高い丘に着きました。兵士の1人が、その少年の正確な位置を指し示し、私たちが午後6時05分にその場所に到着すると、地面に仰向けになって横たわっている少年が見えました。彼は黒いズボンを履いており、片方の足にはスリッパを履いていましたが、もう片方の足は裸足でした。胸は露わになっており、誰かがシャツを引き裂いたようでしたが、応急処置の痕跡 - 包帯や手袋、その他の医療器具 - は一切見当たりませんでした。その場に、医師だと名乗る兵士が1人いましたが、彼は手袋を着用していませんでした。少年には生命反応が見られませんでした。

少年の体の上をアリが這い、私は彼が長い間地面に横たわっていたのだと結論づけました。

少年を診察したところ、背中の中より少し上の位置に、弾丸の侵入創と思われる小さな穴が見つかりました。また、首の左前側には、弾丸の脱出創と思われる大きな穴もありました。少年をストレッチャーに乗せると、体から血が流れ出し始め、これは内出血の兆候でした。

私たちは彼を救急車に乗せ、直ちにラマッラーのパレスチナ医療複合施設へと直行しました。到着後、医師たちは正式に少年の死亡を宣告しました。CTスキャンとX線検査を行った後、医師の1人が、弾丸が背中から入り、心臓を貫通して首から出たことを確認しました。その後、ソーシャルメディアを通じて、亡くなった少年がカフル・マリク出身の14歳のアマル・ハマイエルであることを知りました。

アマルの父親ムタズ・ハマイエル（46歳、4人の子どもの父）は、2025年6月25日に次のように語った。

私はパレスチナ治安機関の公務員として働いているほか、羊の飼育も行っており、それが私たちの他の収入源となっています。息子のアマルは、カフル・マリク男子学校の7年生でした。彼は常に成績が優秀で、また約4年間、ムエタイのトレーニングにも励んでいました。

彼はパレスチナ代表として3度ムエタイの大会に出場し、2023年には世界選手権で銅メダルを獲得したほか、地元の選手権でもメダルやトロフィーを獲得しており、国際的なプロアスリートになることを夢見ていました。

2025年6月23日（月）の午後12時30分から1時の間でしょうか、私がタイベの政府機関で仕事をしている最中、アマルから電話があり、私が吸っているタバコが村で売られているのを見かけたそうで、「村では手に入らない」と私が愚痴っていたのを聞いていて、1箱買ってあげる言ってきました。私は、友達と出かける前に、村の中心にある祖母の家に1箱置いて行って欲しいと頼みました。

午後2時40分、仕事を終えてカフル・マリクへ車で戻り、母の家に着くと、アマルがタバコの1パックを窓辺に置いてくれているのが見えました。少し休んで昼食をとり、それから約1時間後に羊を放牧に

出しました。その時は、アマルと彼の友人たちが村で遊んでいるのだと思っていました。

午後 4 時 40 分頃、友人が電話で、村の南側のバイパス道路である 449 号線の近くで銃撃があったと教えてくれました。私はあまり気に留めず、村の友人と一緒に羊の放牧を続けていました。

午後 5 時、妻から電話があり、アマルがずっと帰らず、どこにいるのか分からないと言ってきました。私はすぐに息子に連絡を取ろうと何度も電話をかけ続け、午後 5 時 30 分頃、誰かがヘブライ語で応答しました。その人は、アブ・アル＝ニムルという名の将校だと名乗りました。私はアマルが彼と一緒にいるかどうか尋ねました。私は彼が逮捕されたのだと推測しました。その将校は私が誰なのか尋ねたので、アマルの父だと答えました。私の名前を尋ねてきたので、ムータズ・ムスタファと答えました。彼はアマルが軽傷を負っていると告げ、電話を切りました。

私は一緒にいた友人に、アマルの携帯電話にもかけてみるよう頼みました。同じ人物が出ると、またしてもアブ・アル＝ニムルだと名乗りました。友人は私から数メートル離れた場所に移動し、その将校と話し続け、2 人は約 5 分間話していました。友人が将校と話すために離れていったその瞬間、私はアマルが死んだと直感しました。

彼が電話を切るとすぐに、私は村の中心部にある自宅へ車を走らせ、そこから友人の車に乗り換え、村の封鎖された正門へ向かった。そこには 449 号線へと続く道路があります。その正門から村へと続く道の入り口の軍検問所で私たちは軍に阻止され、兵士たちの向かい側、約 10～15 メートル離れた場所に車を止めました。私は兵士たちに、自分が負傷した少年の父親だと伝えました。すると、アラビア語を話す兵士が近づいてきて、ID の提示を求めました。その後、兵士は私に、息子のアマルに会いたいなら、村の若者たちにその場所から離れるよう頼めと告げました。

私は若者たちにその場から離れるよう頼むと、兵士たちは私に近づくことを許可してくれ、その兵士は、他の 4 人の兵士と共に、私を 449 号線まで案内してくれました。兵士たちと一緒に立っていた場所から、救急車が見えましたが、それがパレスチナ側のものかイスラエル側のものかは判別できませんでした。私は兵士たちに、息子に会いたいと伝えました。

アラビア語を話す兵士は、救急車が息子を病院へ搬送したと教えてくれました。私は将校に、アマルがどこで負傷したのか尋ねました。彼は「分からない」と言い、病院から連絡があり、アマルの容体について知らせてくれるだろうと答えました。彼は私の ID を返却し、その場所から立ち去るよう求めました。

その時点では、私はまだアマルが亡くなったことを知りませんでした。私は車でラマッラーのパレスチナ医療複合施設へと車を走らせ、その途中、友人からの電話で「アマルは背中から弾丸が入り、首から抜けたことで死亡した」と告げられました。

翌日、2025 年 6 月 25 日、私たちはアマルの葬儀を行い、村の北側の墓地に彼を埋葬しました。

ラヤン・タメル・アンワル・フシエ、14 歳

アル・ヤムン、ジェニン地区、2025 年 6 月 25 日



2025 年 6 月 25 日、兵士たちがアル・ヤムンの町に突入した。ほぼ同時刻、14 歳のラヤン・フシエと、同じく 10 代のいとこが町の中心部にある理髪店に到着したが、店が閉まっていることに気づいた。一方、この地域では衝突が発生中で、地元住民がイスラエル兵に向けて発砲したり、石や IED [即席爆発装置] を投げつけたりしていた。

2 人の少年たちは襲撃の件や、兵士たちがこの地域の家屋を占拠していることを知ると、脇道へと入ったが、近くの建物の屋上に兵士の一団が配置されていたことに気づいていなかった。彼らがその家と向かい合う路地の角に辿り着いたとき、兵士の 1 人が 30～40 メートルの距離から彼らに発砲し、フシエが撃たれて地面に倒れた。彼のいとこは逃げ去り、フシエは住民たちによって救急車に運ばれ、病院へ搬送された。

フシエのいとこは 2025 年 6 月 26 日に次のように語った。

2025 年 6 月 25 日（水）午後 3 時 30 分頃、いとこのラヤン・フシエと私は、アル・ヤムンの町の西側にある自宅の近所から、町の中心部、古いモスクの近くにある理髪店まで歩いて向かいました。理髪店に着くと、店は閉まっていたのですが、その理由は不明です。

ほぼ同時刻、軍の部隊が町に侵入してきました。その多くは東部地域に集中しており、私は部隊が指名手配中の男を逮捕するために家宅捜索を行っていることを知りました。若者たちとイスラエル軍の部隊の間で衝突が発生しており、武装した男たちが兵士に向けて発砲したり、IED [即席爆発装置] を爆発させたり、軍用車両に石を投げつけたりする事態となっていました。

ラヤンと私は、古いモスク近くの路地に入りましたが、アブド・アル＝マレク家の屋根の上に兵士たちがいるとは知りませんでした。兵士たちの位置から西へ 30～40 メートル離れた通りの角に辿り着いたとき、兵士の 1 人が突然、私たちに向かって発砲し始めました。

私はラヤンより 2、3 歩先を歩いており、銃声を聞くと直ぐに逃げ出せたのですが、彼は撃たれて地面に倒れました。

ラヤンから避難した住民の中には、既に現地で待機していた救急車で搬送された人もいたと聞いています - 私たちは銃撃事件の前にその救急車のそばを通り過ぎました - ラヤンは頭部や首の周辺、体の他の部位に受けた銃創により死亡し、遺体は病院から返還され、埋葬されました。

この事件を目撃したアル・ヤムンの住民は、2025 年 6 月 26 日に次のように語った。

2025 年 6 月 25 日（水）の午後、私は家の外に立っていました。その時はイスラエル軍による町への襲撃が行われており、近くにパレスチナの救急車が停まっていた。軍は町中心部の東側にある、指名手配された男の 1 人の家を襲撃しており、軍用車両も町の通りや路地を走り回っていました。何人かの若者や 10 代の少年たちが軍用車両に石や IED [即席爆発装置] を投げつけ、私は通りで実弾の発砲音や

閃光手榴弾、催涙ガス弾の爆発音を耳にしていました。

午後 3 時 30 分頃、2 人の少年が私の家の前を通り過ぎるのを見かけました。私は向かい側の屋根の上に兵士がいることに気づいていませんでしたが、少年たちがその屋根から見える位置に差し掛かったとき、突然そこから数発の銃弾が彼らに発射されました。少年の 1 人はなんとか北へ逃げられましたが、もう 1 人の少年、ラヤンは数発の銃弾が当たり、そのうちの 1 発は首に命中しました。彼は数歩後ずさり、それから私の約 15 メートル先で地面に倒れました。私は他の数人の住民や救急隊員たちと彼の元へ駆け寄り、救急隊員たちは彼をアル・ヤムンの町にあるアル・ハダフ医療センターへ搬送しました。

ラヤンが撃たれてから約 15 分後、兵士たちは誰 1 人も逮捕することなく町を去りました。

ラヤンの母親ザキエ・フシエ（39 歳、5 人の子どもの母）は、2026 年 3 月 26 日に行った証言の中で次のように語った。

2025 年 6 月 25 日（水曜日）、息子のラヤンが目を覚まし、朝食を食べた後、父親のタメルと一緒にジェニンへ行き、タメルの店用の果物や野菜を買いに行った様子を、今でも覚えています。

彼らは午後の早い時間にジェニンから戻り、私たちは一緒に昼食をとりました。その後、私は家族のために果物とスイカを用意し、やがてラヤンの友人たちも加わりました。私たちは一緒に座って果物を食べ、とても幸せで、喜びに満ちていました。

午後 2 時 30 分頃、私たちがアル・ヤムンの西部地区にある自宅にいたところ、ソーシャルメディアを通じて、軍が町を襲撃していることを知りました。その時点で、ラヤンはすでに着替えを済ませ、いつものように友人たちと町へ遊びに出かけていました。

午後 4 時頃、ソーシャルメディアの投稿で、この町の若者が負傷し、ジェニンにある病院へ搬送されたと報じられました。その数分後、17 歳の息子アンワルが帰宅し、負傷した若者はラヤンで、彼が亡くなったと教えてくれました。あまりにも恐ろしく、胸が張り裂けるような知らせでした。私は激しいめまいに襲われ、家から出ようとしたのですが、その痛ましい知らせに打ちのめされ、気を失って地面に倒れ込んでしまいました。すぐに、家族や近所の人たちが我が家に集まり始め、彼らは既に私の息子ラヤンの死の知らせを受け取り、事実確認まで済ませているようでした。

ラヤンは動物を育てるのが大好きで、見つけた子犬を全て家に連れて帰り、成長するまでミルクをあげて世話をし、躰けもしていました。それは彼にとってこの上ない喜びでした。

ラヤンは、7 歳の唯一の妹ルジャインを溺愛し、深く愛しており、並外れて大切にしていました。彼女に対しては非常に忍耐深く、多くの愛情を注いでいました。誰にも妹をからかったり、傷つけたりすることを許しませんでした。

ラヤンは心優しい少年でした。何かで落ち込んだり怒ったりした時、いつも自分の行動を振り返り、もし誰かに迷惑をかけてしまったなら、すぐに謝罪していました。その一方で、自分の意見を率直に述べることを恐れず、確固たる信念を持って意見を表明していました。

彼が亡くなってから毎日、彼のことを思い出し、その喪失に涙しています。彼が亡くなって以来、私たちの生活から喜びは全て失われてしまいました。

アムジャド・ナサール・シェハデ・アワド、16 歳

ラマッラー、2025 年 7 月 1 日



2025 年 7 月 1 日、イスラエル軍が市内へ侵攻し、4 人を逮捕した後、市内中心部のアル・マナラ広場で、他の若者たちと共にイスラエル軍に向けて石を投げていた 16 歳のアムジャド・アワドは、兵士たちに射殺された。

イヤード・アブド・アル＝ムウティ・イヤード・シャラハティ（14 歳）

ナブルス、アスカー難民キャンプ、2025 年 7 月 6 日に銃撃され、7 月 9 日に死亡



2025 年 7 月 6 日、イスラエル軍がナブルスのアスカー難民キャンプへの侵攻を終えて撤退する際、同キャンプでイスラエル軍に向けて石を投げていた若者たちに対して兵士が発砲した。この際、14 歳のイヤード・シャラハティと他の 2 人の若者が重傷を負った。シャラハティは自家用車で市内のラフィディア病院に搬送されたが、3 日後に負傷が原因で死亡した。

彼の母親シュルク・シャラハティ（32 歳、5 人の子どもの母）は、2025 年 8 月 7 日に行った証言の中で次のように述べている。

私は 15 歳で結婚し、長年に渡って夫と 2 人で、夫の実家のたったの一部屋で、非常に厳しい状況の中で暮らしてきました。イヤードは私の長男で、2011 年に出産しました。彼は私の人生における最初の喜びであり、あの辛い年月を和らげてくれた唯一の美しい存在でした。私にとって、子どもたちが全てです。私が人生に望むのは、子どもたちが成長し、私たちの生活がより良くなることです。

4 年前、夫が骨の癌を患い、それ以来、容態は著しく悪化しています。夫はもう働けず、身体的・精神的な手厚いケアを必要としています。息子のイヤードは、まだ幼いにもかかわらず、学校を辞めざるを得ませんでした。困難な状況のせいで、彼は早く大人にならざるを得なかったのです。同年代の子どもたちのように勉強したり遊んだりすることなく、息子は私たち夫婦や兄弟姉妹を養うために働かなければなりませんでした。他に収入源はなかったのです。イヤードが働けば、私たちは食事ができました。働かなければ、食べるものはありませんでした。

イヤードは空き飲料ボトルを回収していましたが、売った袋1つにつき、たったの10シェケルしか得られませんでした。彼は午前4時に家を出て午前10時に戻り、時には夕方にもう一度出かけて数時間働き、約30シェケルを稼ぐこともありました。彼はビリヤードやサッカーをするのが大好きでした。

2025年7月5日（日）午後4時頃、イヤードは空き瓶を回収するために家を出ました。午後9時頃、私が家にいると、何かが私の喉を締め付けるような感覚に襲われました。義父から夫に電話があり、実家に来るよう呼び出したとき、私は何かが起こっていると感じました。自宅にはインターネットがなく、私は何も知らなかったのです。

夫が実家から戻ってきて、イヤードが負傷したと教えてくれました。私は叫び、息子を私から奪わないでと懇願しました。病院に到着すると、イヤードは救急室におり、医師からは脚を負傷したと告げられましたが、大丈夫だろうと思っていました。息子も私に話しかけて、頭とお腹が痛いと言いました。

長い手術が必要だと言われました。手術は数時間に及び、午前5時頃まで続きました。医師たちがやって来て、彼は大丈夫だと言いましたが、手術室から運ばれてきた時、イヤードは目を開けていたものの意識はありませんでした。私は彼に話しかけようとしたのですが、反応はありませんでした。

息子は集中治療室に移送されました。私は治療室の外に立ち尽くし、クルアーンを読みながら、救って欲しいと祈っていましたが、彼が私からどんどん遠ざかっていくのを感じていました。医師に尋ねると、怪我は極めて深刻で、腹部の動脈が断裂しており、余命は数時間しかないと言われました。

待っている間、私は何度か気を失い、夫に家に連れて帰ってもらいました。それは私の人生で最も長く、最も辛い夜で、一睡もできませんでした。

午前7時、電話が鳴り、イヤードが亡くなったと告げられました。打ちのめされるような衝撃で、私の人生にあった全ての美しいものが消え去ってしまいました。私の息子は私が見ている前で成長し、声変わりしてひげが生え始め、私より背が高くなっていました。彼が成長して1人の男になっていく姿を見ていることは、この上ない喜びだったのです。私は自分の目で見ていたことが信じられませんでした。今や彼はこの世を去ってしまったのです。

私は今も彼のベッドのそばに行き、泣いてしまい、眠れていません。家の中のあらゆるものが彼を思い出させるのです。料理もできず、何をする気力も湧きません。子どもたちも食欲を失ったままです。

彼の兄弟たちは、いつも彼のことを尋ねてきます。彼の父親は、もう生きたくないと言い、ただ息子のもとへ行きたいとばかり言っています。

彼は、キャンプの東側、木がある唯一の場所で、同年代の少年たちと一緒にいました。そこはアズムートとデイル・アル・ハタブの村々、そしてフワラールジェイブ道路を見下ろす場所です。若者たちは、

日陰に座って、人混みから逃れるためにそこへ行っているのです。

軍は意図的にそこへやって来て若者たちを挑発し、正当な理由もなく彼らを殺害しています。この子たちは一体何をしたというのでしょうか？彼らには、子ども時代を過ごし、遊び、幸せになる権利がないとでも？なぜ息子を殺したのですか？なぜ私の目の光である息子を、私から奪ったのですか？

アムル・アリ・アフマド・カバ、13 歳

ヤバド、ジェニン地区、2025 年 7 月 18 日



2025 年 7 月 18 日、ヤバドの町への襲撃の最中、アムル・カバは部隊が駐留していた場所の近くを通ったところ、兵士たちは「止まれ」と叫び、同時に発砲した。彼は逃げようとした際に撃たれた。彼が倒れた後、兵士たちは救急隊員が彼のもとへ近づくのを阻止し、息子が撃たれたと聞いて現場に駆けつけた父親に対し、近づかないよう警告射撃を行った。それにもかかわらず、父親はまだ息のある息子の元へ近づくと、兵士たちはライフル銃の銃床で父親を殴打し、手錠をかけ、息子の隣に座らせた。兵士たちは父子を 30 分以上もその状態に置き、負傷した少年の治療や搬送を拒否し、懇願する父親に黙るよう命じた。兵士たちが救急車の通行を許可したのは、アムルが傷により死亡した後だった。報道によると、軍はアムルが部隊に向けて IED [即席爆発装置] を投げつけ、現場で別の IED も発見されたと主張している。

アムルの母親アイダ・カバ（42 歳、4 人の子どもの母）は、2026 年 3 月 26 日に行った証言の中で次のように語った。

2025 年 7 月 18 日金曜日の朝、夫のアリがアムルを起こしたのを覚えています。唯一の息子のアムルは 13 歳、その他 3 人の女の子がいます。夫はアムルに話しかけ、冗談を言って目を覚まさせようとしていました。私たちはアムルがベッドから起きるのを待って、一緒に朝食をとり、インスタントコーヒーを飲むつもりでした。アムルが起き上がると、私の 2 人の姉妹、リリアンとラヤンも加わり、みんなで一緒に座りました。夫はアムルに、親戚の結婚式に一緒に行くよう頼みました。

その後、アムルは、私が昼食に何を作るのか尋ねてきたので、私は、大好物のチキン詰めを作っていると伝えると、彼はとても嬉しそうでした。金曜礼拝の時間になると、アムルは家の近くの、町の北側にあるアル・クルム地区のモスクへ向かいました。彼がモスクから戻り、私は昼食の支度を終え、皆で集まって一緒に食事をしました。

午後 4 時頃、私は同じ地区に住む義理の両親の家を訪ねることにしました。アムルは、友達と会ってコンピューターゲームをするつもりだと言い、クナーファ [中東の伝統的なお菓子] も買いたいと付け加えました。夫の実家に着くと、親戚の 1 人がアムルのことを尋ねたので、彼がヤアバド中心部のアブ・シャムレ地区にあるインターネットカフェで友達と会いに出かけたと答えました。すると彼女は、イスラエル軍がヤアバドの各地区や通りを襲撃していると教えてくれ、私はパニックに陥りました。不安の波が私を襲い、アムルに何度か電話をかけてみましたが、彼は出ませんでした。

それで、夫のアリに電話し、アムルに連絡を取ろうとしたが電話に出ないと伝えました。電話を切った後、夫から再び電話があり、アムルはまだインターネットカフェで友人たちと一緒にいるが、軍とのトラブルを避けるために家に帰るつもりだと教えてくれました。夫と話した後、外を車で通り過ぎる夫の姿を見かけたので、アムルを迎えに行って家に連れて帰るのだろうと思いました。

数分後、ソーシャルメディアで、軍がヤバド中心部の「患者の友の会」周辺で若者を撃ったという情報を知りました。その場所は、アムルが帰宅する際に通るはずだったルート上にありました。

夫がアムルを迎えに車で出かけるのを見て安心していたので、若者が撃たれたという話を聞いたとき、それがアムルだとは思いませんでした。その若者の母親を気の毒に思い、神様が彼女に力を与えてくださるよう祈っていました。自分が、その祈りの対象の母親だとは判っていませんでした。しかし、母親としては安心できず、ソーシャルメディアで言及されていた、その若者が負傷したとされる場所のすぐ隣に住む親戚に電話をかけました。家の周辺で何が起きているのか尋ねると、彼女は「地面に若い男性が倒れていて、兵士たちが彼を撃った」と答えました。彼女は「スプレーした」という表現を使いましたが、それは兵士たちがその若者に弾丸を浴びせたという意味だったのです。その若者の名前を知っているかと尋ねましたが、彼女は知らないと答えました。

彼女との電話を切るとすぐに、私の携帯電話は鳴り止まなくなり、皆がアムルの行方を尋ねてきました。私はパニックに陥り、心臓が激しく鼓動し始めました。私はすぐに義理の両親の家を出て、約 200 メートル離れた自宅へ向かいました。道中、すれ違う人たちは皆私を見つめ、ある小さな子どもが「アムルが死んだ！」と叫びました。その声に私は恐怖に襲われました。瞬間に、全身に鳥肌が立ち、激しい寒気が走りました。かろうじて家まで辿り着きましたが、到着すると、家の中はすでに近所の人や親戚で溢れかえっていました。その時、私はその身元不明の負傷した若者が、私の唯一の息子アムルであることを理解したのです。

息子アムルとの関係は、深い友情と大きな愛情に満ちたものでした。彼は私たちにとって、単なる息子以上の存在でした。彼はいつも姉妹たちにとっても優しく、彼女たちを大切にし、常に彼女たちを喜ばせようとしていました。

特にムルキーヤ〔中東のモロヘイヤスープ〕が大好きで、いつも私に作って欲しいと頼んでいました。夏の夜、彼が夜更かしをする時は、彼が大好きだったスイカの入ったお皿をベッドの横に置いておきました。息子が殺された日、私は彼に 25 NIS〔ニュー・イスラエル・シェケル〕（約 6.70 USD）を渡したことを覚えています。その後、4歳のいところから、アムルが彼に「5 NIS（約 1.35 USD）をくれた」と聞いたときは驚きました。僅かな金額でしたが、その話を聞いてとても嬉しくなりました。

首や足の深い傷、体には 9 発の銃弾が貫通していた息子の遺体を見た瞬間は、今でも忘れることが出来ません。

アムルが亡くなって以来、私たちの生活は悲しみに満ちています。私は全ての希望を失ってしまいました。私の息子アムルは、人生を愛する子どもでした。夫と私は彼をととても愛し、彼のあらゆる要望にいつも喜んで応えていました。

イブラヒム・マジェド・アリ・ナセル (15 歳)

カバティヤ、ジェニン地区、2025 年 7 月 22 日



2025 年 7 月 22 日、兵士たちがカバティヤの町の入り口にある一軒の家に突入した。イブラヒム・ナセルと他の 2 人の少年が、その家の近くに停車していた軍用ジープに投石した。兵士たちは少年たちに発砲し、ナセルは負傷してオリーブの木立へと逃げ込み、そこで倒れた。救急隊員が彼をジェニン市の病院へ搬送したが、そこで死亡が確認された。他の 2 人の少年はその場から逃げ去った。防犯カメラの映像には、兵士たちが 3 人の少年を追跡し、発砲している様子が映っている。

イブラヒムの母親マナル・ムサ (47 歳、3 人の子どもの母) は、2026 年 3 月 28 日に行った証言の中で次のように語った。

殺害された日、イブラヒムはミルカ村の農場で働いていた異母兄弟の手伝いに行っていました。息子は午後の早い時間に帰宅し、シャワーを浴びて食事をとった後、私に、馬から落ちて数日間入院していた友人が丁度カバティヤの自宅に戻ってきたので、その友人を訪ねてくると言って出かけました。

その後、兵士がイブラヒムの胸部を撃ち、彼はその場で亡くなったと聞きました。

イブラヒムは心優しく、勤勉で、学校でも一生懸命勉強していました。彼はオマル・イブン・アル＝ハッタブ高校の優秀な生徒の 1 人であり、最終学年の終わりには優秀賞の認定証を授与されていました。

彼は家が好きな子でした。私と一緒に過ごすのが大好きで、私が隣の村ミルカの実家を訪ねる時は、いつも一緒に来てくれました。彼は祖母をととても愛しており、祖母もまた彼をととても可愛がっていました。

また、2 歳年下の妹マリアムを心から愛していました。彼はいつも妹の面倒を見て、食料品店でお菓子やキャンディ、ポテトチップスを買ってあげていました。イブラヒムは電動スクーターを持っていて、それを乗るのが大好きで、そのスクーターで、私たちのために用事を済ませたり、野菜や果物、その他の食料品を買ってきてくれていました。

夏休みの間、彼はひよこを育てていて、いつもとても丁寧に世話をしていました。ひよこたちが成長していくのを見て、彼を感じる満足感と喜びが私にも伝わってきていました。

ムハンマド・ハレド・ハッサン・マブルク（15歳）

アイン・ペイト・アル・マー・R.C.、ナブルス地区

2025年7月23日に銃撃され、7月25日に死亡



2025年7月23日の夕方、ナブルスとその難民キャンプが軍、国境警察、シン・ベト部隊による20時間もの襲撃を受けていた最中、ムハンマド・マブルクは父親の野菜売場へ向かい、仕事を手伝おうとしていた。途中でいどこに出くわし、部隊がその地域に接近しているという情報を耳にした2人は、路地に身を隠そうとした。国境警察のジープと軍のジープがその路地に入り、そのうちの1台から降りてきた兵士たちがマブルクに対して約10～15発の発砲を行った。彼は即座に地面に倒れ込んだ。現場

を目撃した住民が彼を救急車へ搬送したが、病院へ運ばれた2日後に傷のため死亡した。

ムハンマド・マブルクのいとこ17歳のアブド・アル＝ガニは、2025年7月28日に次のように語った。

私は家族と一緒にキャンプに住んでおり、父と一緒に建設現場で働いています。

2025年7月23日（水）午後6時頃、UNRWA〔国連パレスチナ難民救済事業機関〕の診療所近くのキャンプ内を歩いていると、いとこのムハンマド・マブルクに偶然出会い、彼は野菜売場で働いている父親を助けに行く途中だと私に話しました。

丁度その時、私たちは車の音を聞き、人々が「軍が来る」と言い出したので、その場から急いで逃げ出しました。辺りを見回しましたが、何も見えなかったので、路地の一つに立ち止まり、そこから何が起きているのかを見守っていました。私たちがいた場所は、幹線道路方面から見てキャンプの入り口まで僅か100メートルぐらいでした。すると、イスラエルのジープが2台 - 1台は国境警察、もう1台は軍用 - が見えました。兵士たちがそこから降りてきたので、私はその場を離れ、ダル・ア・タブン路地に入りました。彼らは私から約100メートル離れたところにいました。

私はその場を離れた後、10～15発ほどの連続した銃声が聞こえ、路地の入り口にまだ立っていたムハンマドが地面に倒れるのが見えました。まるでパイプが破裂したように、彼は大量に出血していました。男の人がムハンマドを路地の中に引きずり込み、「救急車！」と叫んで助けを求め、ムハンマド救急車で運びました。その男の人の服は血でびしょりで、地面も血で覆われていました。

私はどうすればいいのかわからず、ショック状態でした。何が起きたのか、なぜ彼らが発砲したのかも理解できず、その理由を説明できるものは何一つ見当たりませんでした。私たちは兵士たちの姿を殆ど目にしていないのに、彼らは何の警告もなく発砲したのです。ジープは既にその場を離れてたことに気づきました。彼らは理由もなくムハンマド撃ったのです。ただ殺したかっただけなのです。

ムハンマドは大学病院に搬送されましたが、大量の出血から、容態が非常に深刻でした。私は病院へ行き、そばに付き添い、彼が生き延びるよう祈りました。しかし、2日後の金曜日の朝、医師たちは彼の死亡を宣告しました。私は完全にショック状態でした。ムハンマドはついさっきまで私のそばにいて話し

ていたのに、突然、墓の中に入るようになったのです。

アル・アイン在住のサイード・ユネス（46歳、5人の子どもの父）は、2025年7月28日に次のように語った。

私は、ガザの戦争をきっかけにイスラエルでの職を失って以来、失業状態が続いています。

2025年7月23日（水）午後6時頃、私がUNRWA〔国連パレスチナ難民救済事業機関〕の診療所近くのキャンプ内を歩いていると、妻から電話があり、軍がキャンプの近くまで来ていて、子どもたちとだけにいるのが怖いから家に帰ってきて欲しいと言われました。私は「今キャンプにいるし、ここでは何も起きていない」と伝えましたが、彼女は通りで「軍が幹線道路にいる」という話を聞いたと言いました。私は「心配しないで、今帰る途中だ」と伝えました。

アル・クトゥブ・ベーカーリー近くの幹線道路沿いにある自宅へ向かう途中、イスラエルのジープを2台 - 1台は国境警備隊、もう1台は軍のもの - を見かけ、そこから兵士たちが降りてきていました。私から約100メートルしか離れていない場所にいたジープの横を通り過ぎるのを避けるため、私はダル・ア・タブンの路地に入りました。すると、連続した銃声が聞こえ、少年ムハンマド・マブルクが脚から血を流しながら地面に倒れるのを見ました。

私は彼を路地の中に引き入れ、どこへ連れて行けばいいのか考えました。なぜなら、軍の兵士たちがキャンプの入り口にいたからです。「救急車、救急車」と私は叫びました。彼は大量出血していました。私は家々の間をくぐり抜け、彼を別の出口まで運び、そこには救急車が待機していました。彼を車に乗せると、救急隊は彼を大学病院へ搬送しました。しかしながら、大量の出血から、彼の傷が極めて深刻であることは明らかで、彼は金曜日の朝に亡くなってしまいました。

ムハンマドの母親カウラ・マブルク（51歳、7人の子どもの母）は、2025年8月7日に行われた証言の中で次のように語った。

私の息子ムハンマドは、この家の心であり魂であり、家を喜びで満たしてくれていました。彼は兄弟姉妹の中では年少の方でしたが、父の世話をし、大いに支えてくれました。夫は赤ちゃんの頃にポリオに罹患し、障害の程度は90%で、松葉杖を使っています。ムハンマドはあらゆる面で夫を手助けしてくれていました。特に我が家は階段が多く、一步一步手助けが必要だったからです。彼は父の支えでした。

彼は家の中心でもあり、家族全員を支えてくれました。私たちは、彼が大人びていて頼りになると感じていましたが、一方で小さな子どものようなユーモアのセンスも持っていました。彼は皆を笑わせ、大人も子どもも問わず、笑顔をもたらしてくれていました。

2025年7月23日（水）、私が食事の支度を終え、ムハンマドに「まずあなたに昼食を出してから、お父さんに食事を持って行って、お父さんも食べられるようにするね」と伝えました。ムハンマドは家で食べるのを嫌がって、「お父さんと一緒に食べるよ」と私に言いました。

午後 5 時半頃、15 歳の息子ムハンマドは、キャンプの入り口にある友人の店に座っていた父親のところへ出かけていきました。私はムハンマドの好きなムサカン [マリネしたローストチキンをフラットブレッドの上にのせたもの] とフリーカスープ [フリーカ (ローストした青大麦スープ)] を作りました。

でも、ムハンマドは家を出てから、二度と戻ってきませんでした。

午後 6 時頃、夫からの電話で、ムハンマドが負傷したと聞かされました。私はショックを受けました。特に変わったこともなく、軍は市内の別の地域にいたからです。私は叫びながら家を飛び出し、病院まで車で連れて行ってくれる人を探しました。

親戚が私をア・ナジャ病院まで連れて行ってくれました。救急救命室でムハンマドがベッドに横たわり、医師や看護師、医療機器に囲まれていました。病院側は私が近づくことを許さず、「怖がらないで、息子さんは大丈夫だから」と言っていました。しかし、私は恐怖で震え、歯がガタガタと鳴っていました。意識を失い、微動だにしない息子の姿を見て、どうして怖がらずにいられるのでしょうか？

彼らは私を救急室から出そうとしました。その時、私は息子の心臓が止まっており、太ももの大動脈が損傷し、複数の手術が必要だと理解しました。午前 1 時まで、何らかの兆候や反応を待ち続けましたが、無駄でした。

午前 1 時を過ぎた頃、医師たちは、息子の出血が再び始まり、臓器が次々と機能不全に陥り、腎不全を生じていると告げました。72 時間持ちこたえれば、一命は取り留められるだろうと言われました。

金曜日の午前 7 時、息子の死という辛すぎる知らせが家に届きました。医師たちは、息子のために祈るようにと私に言いました。

それは耐え難い打撃でした。彼は若く、無邪気で、人生を愛し、笑ったり冗談を言ったりするのが大好きな少年でした。彼らは私たちの家庭にあった全ての美しいものを奪い、彼と共に私たち全員をも殺してしまっただけです。もう何も以前と同じではありません。夫は私にこう言います。「僕は死ぬつもりだ。もう生きたくない。彼のところへ行きたい」。

ムハンマドは父親にとって友人のような存在で、いつも父親のそばにいました。この悲劇が起きた時、私たちは既に厳しい時期を過ごしていました。というのも、27 歳の兄ハッサンが 1 年間の行政拘禁 [裁判による刑事手続きを経ず、行政機関や治安当局の判断によって人を拘束・収容する措置] されており、その拘束期間が僅か 5 日前にさらに 6 か月延長されたばかりだったからです。

32 歳の娘アムネは数か月前に結婚しましたが、兄のハッサンは拘禁中だったので、彼女の結婚式には出席できませんでした。私たちの生活には喜びなどなく、占領下での苦しみだけです。占領は私たちの生

活に重くのしかかり、子どもたちを私たちから奪い去っていきました。

イブラヒム・イマード・アフマド・ハムラン、13 歳

アラバ、ジェニン地区、2025 年 7 月 23 日



2025 年 7 月 23 日、軍用車両が襲撃後に、カバティヤの町から撤退していた際、近くの町アラバにある丘から数人の少年たちが車両に投石した。車両の 1 台から降りた兵士たちは、少年たちをオリーブ畑の中まで追いかけて発砲し、イブラヒム・ハムランを殺害した。他の少年たちはなんとか逃げ延びた。発砲から約 1 時間後に現場に到着した救急隊員がハムランを病院に搬送したが、病院で死亡が確認された。

イブラヒムの母親マナール・ハムラン（48 歳、6 人の子どもの母）は、2026 年 3 月 28 日に行った証言の中で次のように語った。

2025 年 7 月 23 日の午後、当時 13 歳半だった私の息子イブラヒムは、遊びに出かけ、友達と過ごすつもりだと私に告げました。彼らは普段、午後になると高校の校庭でサッカーをしたり、町の通りや路地を歩き回ったりして遊んでいました。

その日の午後 3 時 30 分頃、ソーシャルメディア上で、ある少年がイスラエル軍に撃たれ、パレスチナの救急車が彼をジェニン政府病院に搬送したが、到着時には既に生命の兆候がなかったというニュースが広まり始めました。

イブラヒムは体格が良く、がっしりしており、とても社交的でした。サッカーが大好きで、地元のチームのゴールキーパーを務めていました。彼はいつも私に、特に肉料理など、好きな料理を作って欲しいと頼んでいました。

彼は家族の中で一番年下でしたが、姉たちの世話をよく焼き、彼らの仲は極めて良好でした。

心優しい少年で、お菓子やポテトチップスを買うお金を渡すと、彼はいつもパストラミを買って、庭にいる猫たちに与えていました。自分のために何かを買うのではなく、猫たちを甘やかすことがどれほど息子を幸せにし、そして息子がどれほど猫たちを愛していたかが、私にはよくわかっていました。

8 か月以上前に息子が私たちの生活から姿を消して以来、私たちは彼のことを考え、話し続けることをやめたことはありません。私たちは皆、彼を失った悲しみと苦しみの中にいます。

アフマド・アリ・アサド・サラ（15 歳）とムハンマド・ハレド・アリアン・イッサ（17 歳）、

アル・カデル、ベツレヘム地区、2025 年 7 月 23 日



2025 年 7 月 23 日、アフマド・サラとムハンマド・ハレド・イッサは、アル・カデルの分離フェンス付近での待ち伏せ攻撃で銃撃され、死亡した。軍は、彼らが国道 60 号線で火炎瓶を投げつけたと主張

している。ソーシャルメディア上で拡散された動画には、現場に救急車が到着している様子が映っており、銃声も聞こえている。イスラエルは2人の遺体をなお拘束している。

イスラム・アブド・アル＝アズィーズ・ヌフ・マジャラマとムハンマド・サリ・オマル・マスカラ（いずれも14歳）、ジェニン難民キャンプ、2025年9月8日



2025年9月8日、1月から開始された「アイアン・ウォール作戦」の一環として数か月に渡る軍事活動が行われた後、軍によって避難を余儀なくされていた住民たちが自宅の状況を確認し、持ち物を回収するために戻ってきた。この地域に軍が駐留していることを全く知らなかった住民たちが、キャンプを出る途中で土塁付近にいたところ、軍用車両が到着し、地域で何の衝突も発生してい

ないにもかかわらず、銃撃された。この銃撃により、14歳の少年2人が死亡した。1人はイスラム・マジャラマで、破壊された自宅を訪れた後、家族と共にキャンプを立ち去ろうとした際に撃たれた。もう1人はムハンマド・マスカラで、好奇心からその地域にやって来ていた。2人はジェニンにある病院に搬送されたが、そこで死亡が確認された。この銃撃により、他に2人が負傷した。軍によると、兵士たちは脅威となる容疑者に向けて発砲したという。

ムハンマドの母親ジハン・マスカラ（35歳、3人の子どもの母）は、2026年3月28日に行った証言の中で次のように語った。

それは辛い一日でした。息子は中学3年生の初日を終えたばかりでした。学校から帰ってきて、家族と一緒に昼食をとり、その後、午後に友達に会いに行ってもいいかと私に尋ねてきました。彼は、ハイファ通りにある「ハブ・アル・リー」という人気のシャワルマ・レストランに行くと言いました。その店にいた間に、イスラエル軍がジェニン難民キャンプから撤退したという噂を耳にしたようです。私が息子の友人たちから聞いたところによると、彼は友人たちに、ジェニンキャンプ近くのハイファ通りに行くつもりだとことわり、好奇心から帰還する国内避難民（IDP）の様子を見たいと言っていたようです。しかし、その噂は事実ではなく、彼がキャンプ東端にあるア・ザハラ地区から到着したとき、イスラエル兵が軍用ジープに乗って突然現れて、ジープから降りて発砲し、私の息子ムハンマド・マスカラと、イスラム・マジャラマという名前の別の少年を殺害しました。

私の息子ムハンマドは、他人に対して親切で優しい子でした。息子の死を悼みに訪ねてきた人々をもてなしていた時、ある年配の女性がやって来て、息子が殺される3日前、彼女が果物や野菜の入った袋を運んでいるところを通りかかり、手伝いを申し出たと話してくれました。彼女は息子にお金を渡そうとしましたが、彼はそれを断り、「おばあさんが年配で、袋も重いから」手伝ったと説明したそうです。

また、屋根用のタイルをしく事業をしている父親に付き添い、仕事を手伝うこともよくありました。父親が全ての仕事を1人でこなすのではなく、ムハンマドはどんな作業でも、父親の負担を少しでも軽減しようと努めていました。夫も、ムハンマドはいつも、できる限り私の負担を軽くし、私に過度な負担をかけないように心がけていたと語っていました。

息子は子犬の世話をするのも大好きで、しつけの仕方も知っていました。動物と触れ合っている時の幸せそうな様子が、私にははっきりと見て取れました。

彼は中学 2 年生で、優秀な生徒の 1 人で、殺害される直前にその学年を終えたばかりでした。

イスラムの父親アブド・アル＝アズィーズ・マジャラマ（52 歳、6 人の子どもの父）は、2026 年 3 月 28 日に次のように語りました。

2025 年 9 月 8 日、私がジェニン市中心部の卸売市場にある自分の店にいたところ、息子のイスラムから、ソーシャルメディアで、軍がキャンプから撤退した後、ジェニン難民キャンプの住民たちがキャンプや自宅に戻り始めているという情報が流れていると聞かされました。

午後 5 時 30 分頃、私はキャンプからの追放以来、ジェニン市内で借りていたアパートに帰り、そこから妻、息子のイスラム、そして弟と共にキャンプへ向かいました。私はジェニン公立病院の近くに車を止め、そこから歩いて行きました。私たちは、軍がキャンプの入り口に築いた土塁を通り過ぎ、約 9 か月間にわたる強制的な不在を経て、キャンプ北東端にある自宅にたどり着くことができました。

他の人々も自宅の様子を見に来ていました。目測ではそこには 50 人から 60 人ほどがいました。家の中を確認すると、キャンプへの侵攻の際の兵士たちによる破壊のせいで、家は極めてひどい状態で、徹底的な清掃と修復が必要だということが判りました。

私たちは家の中に約 30 分ほど滞在し、必要な物資を持ち出し、ジェニン政府病院から約 50 メートル離れた、ジェニン難民キャンプの東側の入り口にある土塁に向かって歩き、ジェニンへと戻り始めました。

その土塁に辿り着いたとき、キャンプ内から突然 2 台のジープが猛スピードで駆け寄ってきました。ジープは私たちから約 100 メートル離れたところで停止し、兵士たちが降りてきました。

自宅の様子を確認してキャンプから戻ってきたばかりの人々は恐怖に駆られ、土塁の反対側へと走り出しましたが、兵士たちはそれら逃げる人々に向かって発砲し始めました。

私たちもその土塁を越えようとしたのですが、越える前に、息子のイスラムが銃弾に撃たれて倒れるのを目撃しました。数人の民間人が彼を抱きかかえて近くの病院の救急室へ運びましたが、息子はすでに重傷で息を引き取っており、救急室の医師たちは死亡を宣告するしかありませんでした。

私の息子、イスラムは、善良で優しい子でした。彼は 3 人の姉妹を深く愛し、いつも彼女たちの世話を焼いていました。よく一緒に遊んだり、手伝ったりして、勉強も熱心な生徒でした。

イスラムは動物、特に猫が大好きでした。家では猫たちの世話をし、餌をあげたり、定期的に面倒を見ていました。

ムハンマド・バハジャト・ムハンマド・アル＝ハラク（9歳）

ア・リヒヤ、ヘブロン地区、2025年10月16日



2025年10月16日（木）、2台の軍用ジープが、ヘブロン市の南にあるア・リヒヤ村に、その北にあるカルカス村方面から進入した。ジープは村の中心部にある女子高校の隣で停止したが、そこでは子どもや10代の若者、若い男性たちが校庭でサッカーをしていた。

村に進入する兵士たちは校庭に向けて催涙ガス弾を発射したり、発砲さえすることが多く、子どもや若者たちはすぐに西へ走り、家々の間に身を隠した。一部の10代の若者たちは、通りを通り過ぎる装甲ジープに向かって数個の石を投げたようだ。先頭のジープは走り去ったが、2台目は停止し、10代の若者たちは逃げ出した。

4人の兵士がジープから降り、そのうち2人が子どもたちが逃げた方向に向けて発砲した。1人は催涙ガス弾を、もう1人は実弾を発射した。その実弾の1発が、校庭から逃げ出し、兵士たちがいる通りを見下ろせる約150メートル離れた場所に登っていた9歳のムハンマドバハジャト・アル＝ハラク（9歳）の骨盤に命中した。彼は中庭から逃げ出し、兵士たちから約150メートル離れた場所、兵士たちがいる通りを見下ろせる高台に登っていた。撃たれた後、彼は数歩歩いた後、血を流して地面に倒れ込んだ。

ムハンマドを撃った後、兵士たちは彼に向けて数発の催涙ガス弾を発射し、続いて彼に駆け寄ろうとした若い男性に発砲した。その青年はようやくムハンマドの元へたどり着き、彼を抱き上げた。彼はムハンマドを約30メートル離れた場所まで運び、そこからムハンマドは車でアル・ファワール難民キャンプへ搬送され、さらに別の車でヤッタの町にあるアブ・アル・ハッサン・アル・カセム病院へ移送された。医師による蘇生措置は失敗に終わり、午後6時頃、死亡が確認された。

その夜、イスラエル側は発砲の経緯について調査を行うと発表した。翌日、2025年10月18日（土）の早朝、数台の軍用ジープが再び村に入り、学校周辺や発砲現場を捜索し、その地域の防犯カメラを確認した上で、住民に事情聴取を行った。

屋上からその出来事を目撃した村の住民は、2025年10月18日に行った証言の中で次のように述べた。

2025年10月16日午後4時頃、私は学校から約200メートル離れた自宅の屋上に座っており、校庭でサッカー中の子どもたちを見ていました。そのうちの1人が、9歳のムハンマド・バハジャト・アル＝ハラクでした。丁度その時、イスラエル兵が軍用ジープ2台で村に侵入してきました。彼らが乗り込んでくるとすぐに、子どもたちは全員、校庭から西へ走り出し、家々の間に隠れました。というのは、兵士が村を襲撃する際、通常はその校庭に向けて催涙ガス弾を発射するからです。

4人の兵士がジープから降りると、子どもたちに向けて催涙ガス弾を発射し始めた。そのうちの1人は、実弾も無差別に発射しました。子どもたちはその一帯に散り散りになり、そのうちの何人かはジープから数十メートル離れた場所で立ち止まって様子を見ており、ムハンマドもその中にいました。子どもた

ちは兵士たちに声をかけ、叫んだり笑ったりしていましたが、兵士の 1 人が少なくとも一発を発砲し、それがムハンマドの体の左側に命中しました。ムハンマドは祖父の家の近く、兵士たちがいる場所を見下ろす道路脇に立っていました。

私はムハンマドが数歩進んでから倒れるのを見ました。兵士の 1 人が彼に向かって催涙ガス弾も発射したのはおそらく、若者たちが駆け寄って彼を助けようとするのを防ぐためなのでしょう。私には、その兵士がムハンマドを撃った後、喜びのあまり踊り、仲間に手を振っているのが見えました。ムハンマドは少し這おうとしましたが、やがて動かなくなりました。若者の 1 人が彼のもとへ駆け寄ろうとしたのですが、兵士はその若者に実弾を 2 発発射しました。その若者は何度も試みた末、ようやくムハンマドのところまで辿り着き、彼を抱き上げました。私もその場へ駆けつけると、その若者がムハンマドを約 20 メートルほど離れた場所まで運んでいるのが見えました。ムハンマドは大量に出血しており、意識を失っていました。私たちはムハンマドを村人の車に乗せ、搬送させました。

その日の夕方 6 時頃、医師によって死亡が宣告されました。

負傷した少年を病院に連れて行った村の住民は、2025 年 10 月 19 日に提出した証言の中で次のように述べている。

木曜日、私はア・リヒヤ近郊のアル・ファワール難民キャンプで受ける予定だった個人レッスンに向かうために家を出ました。途中、レッスンが中止になったことを知ったため、午後 3 時頃、村へと車で引き返しました。

友人に会い、彼が女子高校の校庭でサッカーをしようと提案してきました。私たちはよく、村の他の子どもたちや若者たちと一緒にそこへ遊びに行っています。カルカス村の方角やアル・ファウワール難民キャンプから軍用ジープがこの村によくやってきて、私たちを校庭から追い出すために、兵士たちがスタングレネード〔閃光手榴弾〕を投げつけたり、催涙ガス弾を発射したりします。その日も、午後 4 時頃までサッカーをしていましたが、その後、カルカス方面から 2 台の軍用ジープが村に入ってくるという話を耳にしました。催涙ガス弾やスタングレネードを投げられるのではないかと恐れて校庭を離れ、学校の西側へ移動しました。

彼らが村に進入するとすぐ、ジープの 1 台が学校の壁の南側の角付近に停車し、もう 1 台は約 50 メートルほど進んだところで停車しました。最初のジープから 4 人の兵士が降りてきて、私たちに催涙ガス弾を発射し始め、そのうちの 1 人の兵士が銃に弾を装填し、実弾の発砲を始めました。

私は、学校を見下ろす高台にある、数十メートル離れた家の塀の陰に身を隠しました。道路上には、私のすぐ近くに子どもたちのグループが立っており、通りをさらに上ったところに、ムハンマド・アル＝ハラクが兵士たちが立っている場所を見下ろしているのが見えました。少なくとも一発の銃声が聞こえ、その後、ムハンマドが倒れました。彼は体の右側を下にして倒れ、兵士たちは、彼が倒れた場所に向けて数発の催涙ガス弾を発射しました。

彼が撃たれたと気づき、私は彼の方へ向かいました。彼は私から数メートル離れたところにいました。彼を引きずり出そうとしたのですが、彼に辿り着いた瞬間、兵士たちが私に向かって数発発砲してきたので、後ずさりせざるおえませんでした。もう一度試してみることにし、彼らが私に向かって撃ち続けていたにもかかわらず、なんとかムハンマドを掴んで抱き上げました。彼の体の中央部から大量の出血がありましたが、私は彼を抱えて、20～40メートルほど離れた近くの家へと走りました。そこで、村の人たちが彼を車に乗せるのを手伝ってくれました。私はムハンマドを自分の膝の上に寝かせましたが、彼の容体は非常に深刻でした。

車はアル・ファウワールに向かって急いで走りました。その道を行けば、兵士たちに妨害される可能性が低いと思ったからです。少年の容体は非常に悪く、大量出血が続いていました。アル・ファウワールでは、最初の車が無免許だったため、別の車に乗り換え、その車でヤッタの町の病院へ向かいました。道中、ムハンマドは依然として大量に出血し続け、意識はなく、約40分後に病院に到着しました。少年は救急室に運ばれ、医師たちは蘇生措置と止血を試みましたが、その後、私たちは外に出されたましたが、私の服は血まみれになっていました。そこで午後6時頃まで待っていましたが、その頃になって医師から、少年は傷が原因で亡くなったと告げられました。

ムハンマドの母親アリヤ・アル・ハラク（32歳、5人の子どもの母）は、2025年10月27日、息子を失ったことについて次のように語った。

私はヘブロンの南にあるア・リヒヤ地区に、夫のバハジャト・アル＝ハラク（38歳）と、子どもたち－メイス（14歳）、ワジディ（12歳）、シラ（6歳）、エリアス（4歳）－と一緒に住んでいます。

私の息子ムハンマドは、まだ9歳でした。

ムハンマドはサッカーが大好きでした。彼は弟のエリアスをとても可愛がり、特に愛しており、お小遣いの一部を貯めて、お菓子を買ってあげたりしていました。ムハンマドは、私たちの近くにあるア・リヒヤ村のアル・ファールク学校の4年生で、クラスでもトップクラスの生徒の1人でした。彼は医者になることを夢見ていて、兄弟たちと遊ぶときは、いつも「ドクター・ムハンマド」と呼んでと頼んでいましたが、イスラエル兵士に撃たれて命を落とした今、その夢は決して叶うことはなくなりました。

2025年10月16日、昼頃、学校が終わった後、ムハンマドは学校から UNRWA [国連パレスチナ難民救済事業機関] 名義で支給された新しいランドセルを持って帰宅しました。息子は嬉しさのあまり、まるで浮き立つような気分で、そのランドセルがどれほど気に入ったかを私に話してくれましたが、弟のワジディにも同じものがもらえなかったことだけは残念がっていました。

私たちは非常に貧しい家庭で、ラマッラーのスーパーマーケットで夫が日雇い労働で得るわずかな賃金以外に収入源がないため、今年は子どもたちに新しい服やランドセルを買うことができませんでした。

ムハンマドはランドセルを自分の部屋のクローゼットにしまい、日曜日に学校に持って行くのを楽しみ

にしていました。ノートを開き、自分の取った高い成績を私に見せてくれました。学校での一日の様子を話してくれ、朝私があげたピザの一切れを友達と分け合ったことも教えてくれました。それから息子は子ども部屋へ行って着替えました。

私は息子に昼食を作りましたが、少し食べただけで、すぐに立ち上がりました。もっと食べなさいと呼び戻しましたが、お腹がいっぱいだと言い、友達と一緒に仕掛けた鳥捕り網の様子を見に行きたいと言いました。10分後、彼はとても嬉しそうな顔で戻ってきて、鳥を捕まえたと言いました。丁度その時、ワジディが祖父からもらったオリーブの袋を持って入ってきて、ムハンマドはオリーブの選別を手伝いたいと言いました。彼は選別を始め、半分ほど終えたところで、疲れたから祖父の家に行きたいと言い出しました。彼は外へ出ましたが、後でわかったのですが、途中で友達にばったり会い、彼らと一緒に村の女子校でサッカーをしに行ったそうです。

私は父と一緒にヤッタへ買い物に行きましたが、ショッピングモールにいと、突然胸が締め付けられるような感覚に襲われ、パニックになり、不安でたまらなくなりました。何か恐ろしいことが起きる気がしました。午後5時15分頃、父の携帯電話が鳴りました。私は父の手から電話を奪い、「この電話は私宛だと思う」と言いました。電話に出ると、私が口を開く前に、叔父が「あっちで何が起きてるんだ？誰が怪我をしたんだ？」と聞きました。私は震える声で、「私の子どもの誰かが怪我をしたの？」と尋ねました。叔父は「心配するな、お前の子どもじゃない」と答え、すぐに電話を切りました。

私は震えながら泣き出し、父に「子どもたちの誰かが怪我をした気がする」と伝えました。父は私を落ち着かせようとしていましたが、私は何か悪いことが起きたと分かっていると告げました。

私たちはタクシーで家に向かいました。運転手に地元の WhatsApp グループの一つを開くよう頼むと、血まみれのムハンマドを若い男たちが運んでいる短い動画が目に入りました。私は「軍がムハンマドを殺した！」と叫びました。父は私を落ち着かせようとしながら、周囲の人に電話をかけ、ムハンマドは軽傷に過ぎないと伝えられました。

タクシーをヤッタのアブ・アル・カセム病院へ直行させ、そこで私は救急治療室にいるムハンマドと、蘇生措置を施そうとしている医師たちの姿を目にしました。私は部屋に入ろうと「息子に会いたい」と叫びましたが、医師たちは私を入れませんでした。10分ほど経った頃、医師の1人が部屋から出てきて、親戚たちに、ムハンマドの心臓は再び鼓動を打ち始めたが、大量出血のために至急輸血が必要だと伝えました。その瞬間、私は崩れ落ちて意識を失いました。

意識が戻ると、私は点滴と酸素吸入器に繋がれていました。医師たちが部屋から出てきて、ムハンマドを集中治療室へ移すのを見ました。私は彼らを追いかけて走ろうとしましたが、エレベーターに乗せてもらえなかったので、泣きながら息を切らして階段を駆け上がり、待合室に辿り着きました。そこにはすでに家族の多くが集まっていました。

その後、医師の 1 人が出てきて、ムハンマドが亡くなったと告げました。まるで自分の心臓が止まったかのような感じでした。私はその場に崩れ落ち、再び気を失いました。

意識が戻ると、また点滴をつけ、ベッドに横たわっていました。私はベッドで上半身を起こして泣きました。ラマッラーで仕事から帰ってくる夫を待ち、約 2 時間半後、夫の弟が到着して家に送ってくれました。家に帰ると、子どもたちは既に兄が亡くなったという話を聞いており、すすり泣いていました。

午後 9 時、若者たちがムハンマドの遺体を運んできました。息子はまるで眠っているかのように、安らかに美しい姿でした。夫は遺体の横を歩きながら、声をあげて泣き崩れていました。午後 10 時、彼らはムハンマドを家の中に運び込み、兄弟姉妹や親戚、友人たちが彼に最後の別れを告げられるようにしてくれました。家中は泣き声と嘆きの声で満たされ、その後、若者たちは彼の遺体を担ぎ、村の墓地へと最後の旅路へと送り出しました。遺体が出たとき、私は再び崩れ落ちてしまい、そこにいた救急隊員が、私が回復するまで応急処置をしてくれました。

私たちはムハンマドの死を理解することも、受け入れることもできません。息子を永遠に失ってしまったという事実を受け入れることができないのです。私たちは彼の写真、通学カバン、そしてサッカーボールをベッドの上に置いています。ムハンマドはいつも妹のシラを学校まで送り迎えしていました。今、娘は彼がいなければ学校に行くことを拒み、「ムハンマドを戻して、それから行く」と言っています。子どもたちは、彼がいなければ自分の部屋で眠ることを拒んでいる状態です。

イスラエルによる占領はムハンマドの夢を奪い、そして私たちから人生を奪い去ってしまいました。極度の貧困にもかかわらず、私たちは幸せな家族であり、何も欠けるものはないと感じていました。しかし今、彼なしでは生きていけないのです。私の家は悲しみに包まれています。夕食の食卓では、誰も食事に手をつけようとしません。毎晩、夫はムハンマドのベッドのそばに行き、泣いています。

事件の 3 日前、ムハンマドは夫が携帯電話の画面に妹のシラの写真を設定しているのを見かけ、嫉妬したのかその写真を自分の写真に替えていました。

私は一日に何十回も息子の部屋に入り、ベッドに横たわり、彼の香りを吸い込み、着ていた服を抱きしめています。私たちが共に過ごした瞬間を思い出そうとしているのです。

2025 年 10 月 22 日（水）、イスラエルのジャーナリストを伴った軍用車両が、ムハンマドが撃たれた現場に到着しました。最初は、彼らがこの事件について本格的な調査を行うのだと思っていましたが、兵士たちが拡声器で住民を脅し、ムハンマドの名前を挙げながら、彼の死を後悔しておらず、石を投げる者ならたとえ幼い子どもであっても躊躇なく撃つと言っているのを聞いて、希望を失いました。彼らは、ガザで行ったのと同じことを私たちにもすると言い、ジェニンやトゥルカルムでやったように村の通りを破壊すると脅していました。

ヤメン・ハメド・ユセフ・ハメド (15 歳)

シルワド、ラマッラー地区、2025 年 10 月 30 日



2025 年 10 月 30 日、兵士たちは、シルワドの町の南入口に軍が設置した土塁の近くで、15 歳のヤメン・ハメドを撃った。事件の経緯は不明であり、目撃者もない。ハメドが撃たれた後、兵士たちは約 25 分から 30 分間、救急車が彼のもとへ到着するのを妨害し、その後、救急隊員が徒歩でのみ近づくことを許可した。事件の録音記録には、救急救命士がハメドの容体について尋ねた際、兵士の 1 人が「神に感謝、死んだ」と答える声が記録されている。ハメドはラマッラーの医療センターへ搬送されたが、

到着後まもなく死亡が確認された。遺体を検視した医師は、胸部と肩に銃創があり、首のねじれを示唆する頸椎の骨折が 2 か所あると報告した。軍側は、ハメドが不審な物体に火をつけた後に射殺されたと主張している。

ヤメン・ハメドを搬送した救急救命士のアヘド・ア・スメイラット (48 歳) は、2025 年 11 月 5 日に次のように語った。

2025 年 10 月 30 日 (木) 午後 11 時、ソーシャルメディア上の投稿で、町の南入口にある未舗装の検問所の近くで誰かが負傷したとの情報が流れました。これを見て、私は同じく救急救命士である息子のマンドルと、アハマド・ハメドという名の別の救急救命士と救急車に乗り込み、現場に 2 分もかからずに到着しました。

南側の入口へと続く幹線道路 - 2023 年 10 月 7 日から土塁によって封鎖されていた - に辿り着くと、誰かが私に近づくよう手招きしているのが見えました。暗かったため、町の住民かと思いましたが、その人物から約 10 メートルほどの地点に近づいたところで、彼が銃を私に向け、「下がれ」と叫んでいる兵士であることに気づきました。

私は救急車を U ターンさせ、土塁から約 100～150 メートル離れた、ア・サラム学校へと続く道の方へ引き返しました。そこに着くと、拡声器をオンにして、兵士たちとの衝突を避けるため、若者たちに後退するよう呼びかけました。また、パレスチナ市民調整局に連絡して、負傷者がいるが、兵士たちがその負傷者へのアクセスを妨げていると報告しました。私は「待て」と言われました。

その後、道路状況を確認するために再び少し前進したところ、兵士たちが 2 発発砲しました。その銃弾が私たちに向けられたものか、それとも空に向かって撃たれたものかは、はっきりしません。私は再び後退し、若者たちに車両を移動するよう求めました。その後、パレスチナ軍事調整局から電話があり、詳細を尋ねられた上で、再び「待て」と言われました。

7 分から 10 分後、接近の許可が下りたので、私は調整担当者がまだ電話口にいる状態で、救急車を再びその場所まで移動させました。私が近づくと、兵士の 1 人が私に停止するよう叫びました。拡声器を通じて、接近の許可を得ていることを兵士に伝えましたが、彼はその場に留まるよう命じました。

道路の真ん中で、地面にある何か黒い物の周りに 6 人の兵士が立っているのが見えました。そのうちの何人かは、携帯電話のライトをその物体に向けて照らしており、彼らは私が救急車から降りることを許しませんでした。約 6、7 分後、1 人の兵士が私のところにやって来て、後退するよう命じました。60～70 メートルほど後退すると、その兵士は私に救急車から降りて徒歩で近づくよう呼びかけました。私はヘブライ語で「その少年は生きているのか？」と尋ねると、彼は「アルハムドゥリッラー（アラビア語で「神に賛美あれ」）、彼は死んでいる」と答えました。

私は、土塁と向かい合っている道路の真ん中で仰向けに横たわる少年のところへ近づきました。彼は下着以外は全裸で、生命反応は全く見られませんでした。

彼を診察したところ、3 か所の銃創が確認された。2 ヶ所は左肩に、もう 1 か所は左側の胸と腹部の間にあり、出口創は見当たりませんでした。また、首には浅い切り傷があり、これは服を脱がされた際にできたものかもしれません。

その後、他の 2 人の救急隊員も救急車から降りてきて、私たちは彼をストレッチャーに移しました。搬送中に、私は彼の首が不安定であるかのように不自然に動いていることに気づきました。そこには、手袋や包帯など、以前に誰かがその部位の治療を試みた形跡は見当たりませんでした。

午後 11 時 20 分頃、その少年をラマッラーの病院へ搬送しましたが、そこで死亡が確認されました。医師の診察の際、肋骨の骨折や、胸の下と左肩の 2 か所の銃創に加え、首の 2 か所の骨折による気道閉塞を起こしていたとの説明を受けました。

パレスチナ医療複合施設の整形外科医で、ヤメン・ハメドが病院に到着した際に診察を行った医師は、**2025 年 10 月 30 日に次のように語った。**

少年ヤメン・ハメドがパレスチナ医療複合施設に到着後、CT スキャンを行ったところ、2 発の銃弾を受けたことが判明しました。1 発目は心臓の下側の左側を撃ち抜き、2 発目は左肩を貫通して肺に入り、肺出血を引き起こしていました。

さらに、2 発の銃弾により肋骨の骨折もありました。この負傷自体が重篤かつ致命的なものでした。3 分から 5 分以内に治療や医療処置が行われなければ、心臓と肺の機能停止を招き、続いて身体機能全体が停止し、最終的に死に至ります。

銃創に加え、ヤメンは首の捻れによる外傷が原因で首の周辺に骨折を負っており、その結果、第 4 頸椎と第 5 頸椎に 2 か所の骨折が確認されました。

出口創が見当たらず、弾丸が体内に残っていたことから、発砲は比較的遠距離から行われた可能性が高いと思われます。

ジャミル・ハナニ（17歳）

ベイト・フリク、ナブルス地区

2025年11月2日に銃撃され、11月3日に死亡



2025年11月2日、兵士たちが3台のジープでナブルス地区のベイト・フリクの町に進入すると、若者たちが彼らに向かって石を投げつけた。ジープの1台から降りた兵士が若者たちに向けてスタングレネード〔閃光手榴弾〕を投げつけ、その後、振り返って、通りの角に立っていたハナニとその友人たち - 彼らは投石には加わっていなかった - に向けて発砲した。ハナニは腹部に負傷し、通りの向かい側にあるア・サダカ診療所に搬送されたが、その後、兵士たちが診療所を急襲した。兵士たちが数分後に立ち去った後になってようやく、ハナニはナブルス市のラフィディア病院へ搬送されたが、翌日、傷が原因で死亡した。

ハナニの友人は、2025年11月5日に次のように語った。

私はベイト・フリク高校の生徒です。日曜日、友人のジャミル・ハナニ（17歳）が私のところへ遊びに来ました。午後9時35分頃、私たちは町の西側にある私の家を出て、彼の家へ向かいました。私たちがア・サダカ診療所の近くにある幹線道路に差し掛かったとき、町の中心部から3台の軍用ジープがやってくるのを見て驚きました。私たちはそのまま進むべきか、立ち止まるべきか迷いました。町の中心部からジープに石が投げられているのを見て、通り抜けるのが怖くなり、建物の間に身を隠しました。

3台のジープは私たちから約100メートル離れたところで止まりました。私は道路を渡って反対側へ行くことにしたのですが、そこに着くまで、ジャミルがついてこず、向かいの歩道に立ったままです。ことに気づきませんでした。その瞬間、1台のジープから兵士が降りてきて、その通りの少し先にいた男たちに向かってスタングレネード〔閃光手榴弾〕を投げつけ、それからジープに回り込んで、ア・サダカ・センターの近くにいる男たちの方を向いて、発砲しました。聞こえたのは一発の銃声だけでした。男たちは建物の中に駆け込み、「負傷者だ、負傷者がでた」と叫び声を上げました。彼らが1人の男を担ぎ上げ、医療センターへ運び込むのが見えました。

その直後、数人の兵士が医療センターに入り、その後出てきました。数分後、救急車がセンターから出発する音が聞こえ、ジープは町を去って行きました。そのとき初めて、負傷者が私の友人、ジャミル・ハナニであることを知ったのです。彼は腹部を撃たれていました。彼を見舞いたかったのですが、容態が非常に深刻だと言われ、その後、彼が亡くなったことを知りました。

ジャミルの父親アテフ・ジャミル・ハナニ（56歳、4人の子どもの父）は、2026年3月16日に次のように語った。

2025年11月2日（日）午後6時頃、私は眠っていた息子のジャミルを起こし、妻と私が祖父を訪ねに行くことを伝えました。私は息子に処方箋と50NIS〔ニュー・イスラエル・シェケル〕（約17.40米ドル）を渡して、薬局で私の薬を買ってくるよう頼み、私たちは家を出ました。

妻の実家に着いた午後 9 時 30 分頃、ソーシャルメディアで軍が町に侵入したことを知り、ジャミルに電話したのですが、出なかったので、また眠ってしまったのだと思っていました。

午後 10 時頃、町の診療所から電話があり、息子のジャミルが負傷して病院に搬送されたと知らされました。私はすぐに妻や親戚たちとナブルスの病院へ向かいました。どうやってそこに辿り着いたのか、自分でも覚えていません。あの瞬間は一生忘れないと思います。私は病院中を探し回り、やがて息子が手術室におり、背中に 2 発の銃弾を受け、脊椎、内臓、腹部に重傷を負っていることを知らされました。

彼らは私を安心させようと、「息子は助かる」と言ってくれましたが、手術室の外の雰囲気や、大量の輸血が必要だったことから、私は息子の容体が深刻であることを悟りました。病院には親戚や友人、町の人々など大勢が集まってきて、それがかえって恐怖心を募らせるばかりでした。私は無力感に襲われました。息子は手術室の中にいて、私には何もできませんでした。

午前 1 時頃、医師が出てきて、出血を止めることができたこと、そして彼が集中治療室に移される予定だと伝えてくれた。しかしその後、息子の心臓は止まり、助かりませんでした。心臓が止まったのはこれで 3 回目だと告げられ、それは私の人生でこれまで受けた中で最も辛い知らせでした。

ジャミルは、メインストリートの薬局の近くで、薬を買った後、家に帰るために道路を横断しようとしていたところでした。私は息子のポケットから薬と、お釣りである 17 NIS (約 5.90 米ドル) を見つけました。それらは息子が最後に触れたものなので、私にとってとても大切なものです。後でわかったことですが、彼は通りをパトロールしていた軍隊に不意を突かれ、血を流したいという欲望以外の何の理由もない、兵隊から発砲されたのです。兵士たちは何の対応もせず、誰 1 人逮捕しませんでした。

彼らは町の通りを短時間パトロールしただけで、そのパトロールが罪のない子どもを殺害するという結末を迎え、その後すぐに立ち去りました。まるで狩りに出たかのようにですが、彼らが狩っているのは人間なのです。彼らにとって、私たちは無に等しいのです。

数日後、イスラエル警察から電話がありました。警官の 1 人がアラビア語で私に話しかけ、何が起きたのか知りたいと言いました。私は彼にこう言いました。「なぜ兵士たちは私の息子を殺したのか、彼らに聞いてください。私は何も求めています。ただ、なぜ彼を殺したのかを知りたいだけです。下半身を撃つこともできたはずですし、逮捕して殴ることもできたはずです。彼に致命的な弾丸を 2 発撃ち込む以外のどんな手段でも取れたはずです。なぜですか??」

その警察官は、私を助けたいと言ってきたので、私は彼に「それなら、私の息子を返せ」と言いました。私は彼らを信用していないし、彼らは判断力など持っていません。彼らは、何の責任も負わずに血を流すことを許す軍の命令に従っているだけです。それどころか、パレスチナ人を殺した者は、おそらく祝福され、昇進するのでしょうか。彼らが私の息子にしたことに、私の心は今も燃え上がっています。彼が亡くなり、二度と戻ってこないなんて、とても信じることはできません。

ジャミルは活発な少年でした。サッカーやバスケットボールが大好きで、友達と一緒にグラウンドを借りたり、ナブルスで開催されるトーナメントにも参加していました。車も大好きで、BMWを持つことを夢見ていました。私は息子に、私の父の名前である「ジャミル」と名付けましたが、彼はまさに（アラビア語でその名前が意味する通り）美しい子どもでした。

彼が亡くなって以来、私たちの生活は一変してしまいました。子どもたちの部屋を見るたびに、何かが欠けていると感じます。ジャミルはどこへ行ったのでしょうか？ どうして彼は私たちから、そして兄弟たちから、奪われてしまったのでしょうか？

私の子どもたちはいつも泣いていて、母親が泣いているのを見ると、家を出て行ってしまいます。特に、16歳の兄ムハンマドは、彼と年齢が近く、仲の良い親友で、一緒に過ごす時間が多かったのです。

その間にも、ラマダンとイード・アル＝フィトル〔ラマダーン月の終了を祝う大祭〕が彼なしで過ぎ、それはとても辛いことでした。ジャミルのことを、そして彼が私たちのもとを去った様子を思い出すたびに、私は正気を失いそうになります。兄弟たちがそれぞれのベッドで眠っているのに、彼のベッドだけが空っぽであるのを見ると、胸が締め付けられるような痛みを感じます。私たちはほぼ毎日、墓地へ彼に会いに行きます。彼は遠くない所にて、無意識のうちに私の足がそこへ連れて行ってくれるような気がしています。

彼らは息子を殺害しましたが、誰も責任を問われていません。これらの兵士たちは大人と子どもを区別しません。彼らにとって、私たちは皆、標的なのです。

息子は軍による拘束という経験さえも免れることはできませんでした。日々深刻化する経済危機のせいで、ヨルダン川西岸地区で長い間仕事が見つからず、私は彼を連れて、グリーンラインの内側〔イスラエル主権下〕にあるティラ地区へ働きに行きました。許可証がなくても、イスラエルへ仕事を探しに行くしかなかったのです。ジャミルは私にこう言いました。「夏の間、僕を仕事に連れて行って。夏休み中、家に座っているより、父さんの手伝いをするよ。」そこで息子は私と一緒に行きました。初日は仕事をしましたが、2日目に寝泊まりしていたアパートに強制捜査が入り、私たちは逮捕されました。ジャミルは25日間、私は2か月間、刑務所に送られました。後に、息子は、殴打されたこと、そして点呼の際、地面に寝かされて遠吠えすることを強制されたと私に話しました。息子が刑務所から釈放された日も、イスラエルのスタッフに殴られ、ペッパーズプレーを噴射されたそうです。妻は、ジャミルが拘置所から出てきた時、とても痩せ細っていたと話してくれました。息子はまだ子どもだったのに、このような過酷な経験を強いられ、まさに犯罪者の兵士たちによって短い命を絶たれたのです。彼らはパレスチナ人を1人も生かしておきたくない。ベン・グヴィルが〔国家安全保障大臣に〕就任してから4年、状況は極めて厳しくなり、理由もなく殺害事件が増加しています。彼らは殺害後、その行為を正当化するための言い訳をでっち上げるのです。ヘブライ語メディアでは、「テロリスト」が殺害されたと報じられました。非武装の子どもがどうしてテロリストになり得るのでしょうか？ これは狂気の極みであり、人命に対

する尊厳などひとかけらも残っていません。

私は自問し続けています。なぜ私たちの子どもたちは、世界の他の子どもたちとは違うのでしょうか？なぜパレスチナの子どもたちが、このような過酷な経験を強いられなければならないのでしょうか？なぜ軍事検問所を通らされ、道路でも、通りでも、近所でも、至る所で虐待を受けなければならないのでしょうか？そして、自宅の中にさえ、安全ではありません。いつ何時、兵士が玄関のドアを破り、あなたや子どもたちをベッドから引きずり出し、恐怖に陥れるか分からないのです。どこにいても安全だと感じることはなく、絶え間ない脅威に晒され、子どもたちを守ることができない無力感に苛まれています。

ムラド・ファウジ・ユセフ・アブ・セイフェイン (15 歳)

アル・ヤムン、ジェニン地区、2025 年 11 月 6 日



2025 年 11 月 6 日、兵士たちはジェニン地区のアル・ヤムン町を急襲し、衝突発生後、屋上を占拠した。覆面をしていた 15 歳のムラド・アブ・セイフェインは、兵士たちに向けて即席爆発装置 (IED) を投げようとした瞬間に撃たれ、手に持っていた IED が爆発した。発砲と爆発の後、兵士たちは誰もアブ・セイフェインに近づくことを許さなかった。ソーシャルメディアに投稿された映像では、住民たちが血まみれの頭巾を掲げており、そこには 4 つの穴が確認できる。イスラエルは未だに、彼の遺体を拘束している。

ムラドの母親シャディヤ・アブ・セイフェイン (61 歳、12 人の子どもの母) は、2026 年 3 月 26 日に行った証言の中で次のように語った。

2025 年 11 月 6 日、私の息子ムラドは朝起きて、彼が 10 年生として通っていたアル・ヤムーン高校へ向かいました。彼はアル・ヤムーンの西地区の自宅を午前 7 時 30 分頃に出て、午後 1 時頃に帰宅しました。学校の食堂で何かを食べたのか、家では昼食をとりませんでした。

午後 2 時頃、ムラドは父親のファウジと一緒に、私たちが建物を建設中のジェニンへ行き、建材の準備を手伝いました。

2 人は夕方頃に帰宅し、ムラドはシャワーを浴びて夕食を済ませ、それから「友達に会いに行く」と言って家を出た。

午後 10 時 30 分頃、娘夫婦が遊びに来ており、私たちはソーシャルメディアで最新情報を追っていました。私たちの地域では、イスラエル軍による町や住宅地への襲撃が頻繁にあるため、殆どの人が頻繁に情報を確認する傾向にあります。

イスラエル軍が町の各地区を襲撃しており、イスラエル兵に誰かが殺害されたという報道を見て、私たちは不安になりました。

ニュースは次々として入ってきていて、スマホの画像をよく見ると、地面に倒れて負傷している若い男性がいて、それがムラドだと気づいて愕然としました。それは私の人生で最も衝撃的で、辛い瞬間でした。ムラドは私の末っ子でした。

まだ若かったにもかかわらず、ムラドは自分の考えがはっきりしていて、強い意志の持ち主でした。何か欲しいものがあれば、自信を持って、巧みに手に入れていました。私たちの経済状況は安定していたものの、彼は何か欲しいと、必ず自分でそれを買う努力をしていました。

ムラドは馬をどうしても欲しがっていました。彼は非常に意志が強く、乗馬中に怪我をするのではないかと夫や私が心配していたのですが、兄弟たちの助けを借りて若い子馬を購入し、調教や乗馬を始めていました。彼はその体験を心から楽しんでいました。

ムラドは優しく、いつも私のことを気にかけてくれていました。私が退屈している様子や、何かで落ち込んでいるのを見ると、私の隣に座って肩をポンポンと叩き、元気づけようと努めてくれていました。

最も辛いのは、イスラエル軍がムラドの遺体を持ち去り、それ以来ずっと彼の遺体を拘束していることです。死後であっても、彼に別れを告げたり、抱きしめたりできなかったことが、本当に辛くてたまりません。私が願っているのはただ一つ、彼の遺体を受け取り、家族の墓地に埋葬し、定期的に墓参りをし、彼に祈りを捧げ、スーラ・アル＝ファーティハ〔クルアーンの最初の章〕を唱えることです。

ムハンマド・アティムとムハンマド・カセム、ともに 16 歳

エルサレム地区アル＝ジディラ出身、2025 年 11 月 6 日に銃撃され、

その翌日、家族に死亡が通知された



2025 年 11 月 6 日午後 9 時 53 分、イスラエル軍部隊がアル・ジディラ村のアル・ジブ検問所から村に侵入し、分離フェンスに近い村の北部へと直行した。部隊の侵入と同時に、フェンスの方向から激しい銃声が聞こえたが、これは既にその場にいた別の軍部隊による発砲であった。追加部隊がフェンスに到達して間もなく、兵士たちは再び発砲し、同村の住民である 16 歳の少年 2 人、ムハンマド・アティムとムハンマド・カセムを負傷させた。B'Tselem の調査によると、少年たちは近くを走る国道 45 号線に向けて火炎瓶を投げるために現場に向かっていた。発砲後、兵士たちは負傷した少年たちを連れ去り、その場を離れた。

事件発生後数時間のうちに、軍はパレスチナの DCO〔地区調整連絡事務所〕を通じて、少年たちを拘束していることを否定したが、その夜遅くに説明を変更した。当初はこの少年たちが逮捕され、そのうちの 1 人が脚に負傷したと述べていたが、その後、2 人とも重傷を負っているとした。翌日午前 11 時頃、パレスチナの DCO は家族に対し、2 人の少年が負傷により死亡したと通知した。遺体は現在、イスラエルによって拘束されている。

ムハンマド・アティムの父親は 2026 年 3 月 30 日、次のように語った。

私はムハンマドの父親です。2025 年 11 月 7 日、パレスチナ当局から正式に息子の死を知らされたとき、ムハンマドは 16 歳でした。ムハンマドは中学 2 年を終えた後に学校を中退しました。勉強が嫌いで、続ける気もなく、代わりに私の木工所で一緒に働き、私から技術を学び、手伝うことを選びました。若くはあったが、彼は大人びた振る舞いをし、責任を担うことが好きでした。

私はムハンマドの仕事に対して給料を支払っていましたが、結局、彼はそのお金の大部分を私に返してくれていました。家族の生計を支えたいという思いがあり、年上の兄弟たちだけが家計を助けているという状況が気に入らなかったからです。彼はジムでトレーニングをするのが好きで、仕事の後は毎日、村の友人たちとの集まりに出かけていました。

彼が殺された日、ムハンマドはいつものように家を出ました。事件の約 1 時間前、妻が私にムハンマドに電話して、あまり遅く帰らないように伝えてほしいと頼んできたので、私は息子と電話で話をしました。彼は村の中心で友達と遊んでいると教えてくれたのですが、それが私たちにとって最後の会話となり、そしてその後に恐ろしい知らせが舞い込むことなど、私は知る由もありませんでした。

その会話から約 1 時間後、フェンス付近で占領軍による激しい銃撃があったという報告が入り始めました。息子のムハンマドが犠牲になったなどとは、夢にも思いませんでした。しかし、妻は何かおかしいと感じ、彼に連絡を取ろうとしましたが、応答がありません。妻が心配だと言ったので、私も電話をかけましたが、やはり応答はありませんでした。その後、息子が友人と遊んでいた場所に携帯電話を置き忘れていたことが判明しました。その友人も息子と共に命を落としたのです。フェンス付近での事件の詳細については、ソーシャルメディア上で数時間に渡って矛盾する情報が飛び交い、誰がそこにいたのか、正確に何が起きたのか、そして彼らに何が起きたのか、信頼できる情報は一切ありませんでした。

その後、占領軍に射殺された人々の名前が投稿され始め、私の息子ムハンマドの名前もその中にありました。家は大騒ぎとなり、悲しみと緊張に包まれ、ムハンマドの姉妹や母親は、その報告が本当かどうかまだ分からない中で、彼のことを思って泣き出しました。私は妻や子どもたちの前では平静を装おうと努めましたが、いつ崩れ落ちてもおかしくない状態でした。

その報告が事実であることが確認されると、家の中の泣き声はさらに大きくなりました。その痛ましい知らせを前に、私はもはや涙をこらえることができませんでした。

ムハンマドは私たちのもとを去ってしまいましたが、ある意味では、彼は今も私たちと一緒にいます。家や木工工房で、今でも彼の存在を感じることができます。息子との思い出は数え切れないほどありますが、彼を失ったこと以上に辛いのは、イスラエルが彼の遺体を拘束し、私たちが彼に別れを告げ、埋葬を妨げているという事実です。私たちの状況は、息子たちの遺体が占領当局に拘束されている何百もの遺族たちと同様なのです。

ムハンマド・カセムの父親は、2026年3月30日に次のように語った。

私は、亡くなった当時16歳だったムハンマドの父親です。彼は文学コースの高校生で、殺害されるまで逮捕されたことも、怪我をしたことも一度もありませんでした。ムハンマドはサッカーが大好きで、サッカー界のあらゆる出来事を定期的に追っていました。彼はとても社交的で、学校の課題を終えると、いつも村の友達に会いに出かけていました。

ムハンマドには、妻と私も大いに助けられていました。私が1948年以前の領土（イスラエル）内で働いているため、彼はいつも母親の家事を手伝ってくれていました。また、私が仕事から帰ると、アル・ジブ検問所まで車で迎えに来てくれていました。彼はできる限りのことをしてくれていましたが、運命のいたずらで、彼は友人と共に分離フェンスの近くで殺されてしまいました。占領軍は、息子たちが近くの幹線道路に火炎瓶を投げつけようとしたと主張しています。

ムハンマドの死による大きな悲しみに加え、彼が殺害されて以来、占領当局が彼の遺体を拘束したままであることも、大きな苦痛です。イスラエル当局は息子とその友人を殺害し、自分たちの利益に都合の良い物語を広めるだけでは足りず、さらに私たちが彼に別れを告げ、慣習に従って埋葬することを妨害しています。さらに、彼らは絶えず説明を変え続けることで、私たちにさらなる苦痛を与えました。事件の夜、彼らは一時は息子が逮捕されたと述べ、次に負傷したと主張し、ずっと後になってようやく、パレスチナ当局に対し、息子とその友人が軍の銃撃で殺害されたと通知しました。今日に至るまで、ムハンマドの母親は彼が死んだことを信じていない。彼女はこう言っています。「彼の遺体を受け取り、その匂いを嗅ぐまでは、彼らの話を信じないわ」。

息子を失うのはつらいことです。私はいつも、彼が他の若者たちと同じように成長して結婚し、私たちが彼に子どもを授かる姿を見られるという喜びを味わえることを夢見ていました。しかし、占領軍の銃弾が一瞬にして彼を奪い去りました。私たちはこの現実と向き合い、互いに強さを示し合おうと努めていますが、家中に満ちる彼の思い出に直面すると、時折途方に暮れてしまうことがあります。

ビラル・バハー・アリ・バランとムハンマド・アブ・アヤシュ、ともに15歳

ベイト・ウンマル、ヘブロン地区、2025年11月13日



2025年11月13日、待ち伏せしていた兵士たちが、ビラル・バランとムハンマド・アブ・アヤシュを射殺した。この事件は、2人が作業中だった同町の南部の農地で発生した。軍によると、2人は火炎瓶を手にしていて射殺されたという。軍が公開した写真には、バランの遺体がモザイク処理されており、その横に火炎瓶が置かれている様子が写っている。別の写真では、アブ・アヤシュの遺体の横に兵士が立っている様子が写っている。

ソーシャルメディア上で拡散された動画には、2人の少年のうち1人が野原を走っている様子が映っており、その後、銃声が聞こえる。イスラエルは2人の遺体を拘束している。

ジャダッラー・ジハード・ジャダッラー（14 歳）

アル・ファラー難民キャンプ、トゥバス地区、2025 年 11 月 16 日



2025 年 11 月 16 日、アル・ファラー難民キャンプを急襲した兵士たちが、キャンプへの襲撃情報を聞きつけて、2 人の友人（いずれも 10 代）と共に帰宅途中だったジャダッラー・ジハード・ジャダッラーを銃撃した。友人の 1 人は破片で負傷した。ジャダッラーの両親や兄弟姉妹は、地面に倒れて負傷している彼の姿を目撃したが、母親が彼に近づこうとすると、兵士たちは彼女を追い払い、空に向かって発砲した。兵士たちは約 40 分間、彼の搬送を妨げ、医療処置も施さなかった。ソーシャルメディアに投稿された映像には、負傷したジャダッラーが地面でもがき苦しむ様子が映っており、その傍らに立つ兵士たちは彼を無視している。別の映像では、兵士の 1 人が彼に触れているが、医療処置を施しているようには見えない。軍によると、ジャダッラーはキャンプ内で活動中の兵士を傷つけようとしたという。発砲から約 4 時間後、パレスチナ側の DCO [地区調整連絡事務所] は家族に対し、ジャダッラーが負傷により死亡したことを伝えた。イスラエルは彼の遺体を拘束している。

ジャダッラの父親ジハード・ジャダッラ（42 歳、8 人の子どもの父）は、2025 年 11 月 23 日に行った証言の中で次のように述べた。

私は 1948 年の領土による難民 [イスラエルの建国とそれに伴う第一次中東戦争によって故郷を追われたパレスチナ難民] です。家族と共に、数百の家族が過酷な状況下で暮らす過密なキャンプ内の質素な家に住んでおり、殆どの人が生計を立てるのに苦労しています。

ここ数か月、キャンプへの軍による襲撃が増加し、ほぼ毎週のように襲撃や何らかの軍事活動が行われており、その度に、人々が負傷したり死亡しています。過密状態と狭い路地のため、軍隊の姿を常に確認できる状態ではありません。

2025 年 11 月 16 日の朝、子どもたちは学校へ行き、妻と私は家にいました。午後 2 時頃、子どもたちが学校から帰ってきて、私たちは一緒に昼食をとりました。息子のジャダッラも帰宅しましたが、「もう食べたからお腹が空いていない」と言いました。

その日の午後、私たちは家でいつものように過ごしていました。ジャダッラは、以前、友人とビリヤードやその他のゲームを楽しんでいたクラブに行きたいと言いました。そのクラブは家から約 300～400 メートル離れた、キャンプの中心部から外へ続く道の突き当たりにあります。

ジャダッラは午後 3 時頃にクラブへ向かいました。その後、ソーシャルメディアを通じて、キャンプ内で軍事活動が行われており、その一帯に兵士が展開していることを知りました。突然、数発の銃声が聞こえました。その音に妻は怯え、すぐに「ジャダッラが怪我をしたに違いない」と言いました。彼女には強い直感があったのですが、私は妻を安心させようと、「何も起きていない」と伝えました。

私は急いで 2 階へ駆け上がりました。そこには、クラブの向かいにある路地の入り口を見下ろせる窓が

あり、妻も私の後を追ってきました。すると、息子の姿が見え、服で彼だと分かりました。息子は地面に横たわり、身悶えしながらもがいており、周囲には多くの兵士が取り囲んでいるのが見えました。

私たちは皆、ショックを受けました。子どもたちも駆けつけ、兵士たちに囲まれて地面に横たわる兄弟の姿を目にしました。私たちには何もできず、近づくことさえできませんでした。軍はキャンプの両側から救急車が彼のもとへ近づくのを阻止し、医療処置も施しませんでした。

妻はそこへ行って彼のそばに近づこうとしましたが、兵士たちは彼女に引き返すよう命じ、空に向かって発砲しました。息子は負傷したまま、約 1 時間もの間、その場に横たわり、痛みで身悶えしていました。息子はその間に治療を受けれたはずですが。

その後、兵士たちはマットを持ってきて、息子を上に乗せ、ジープで連れ去りました。

私たちは何らかの知らせを待ち続け、時間は殆ど進みませんでした。数時間後、調整事務所から、息子が殺害されたと知らされました。兵士たちが息子を連れ去った時の容態がどうだったのかは分かりません。武装した多くの兵士が彼を撃ち、誰も彼のところへ行って手当てをすることを許しませんでした。

彼らは冷酷にも私の息子を殺害しました。なぜ彼を撃ったのか分かりません。彼らは息子のすぐそばにいて、理由もなく撃つ代わりに、手で彼をつかんで連れ去ることもできたはずですが。この地域では衝突は起きておらず、息子も何もしていませんでした。

私たちはただ普通の市民として生活しているだけで、誰ともトラブルを起こしたことはありません。

私の息子はまだ生徒で、無力な子どもでした。彼らは息子を殺して連れ去り、本当に死んだのかさえ、私にははっきりとは分かりません。私は息子に会いたいのです。彼の遺体を私に返して欲しいのです。

サミ・イブラヒム・サミ・マシャイエク、15 歳

カフル・アカブ、東エルサレム、2025 年 11 月 20 日～21 日



2025 年 11 月 20 日から 21 日の夜、深夜 0 時頃、約 12 名の特殊パトロール部隊の隊員を乗せたイスラエル国境警察の車両 2 台が、東エルサレムのカフル・アカブ地区に突入した。車両はラマッラー - エルサレム道路の、シカル交差点付近にある商業施設の横で停車した。警官の一部は覆面をし、目撃者によると、彼らのライフルにはサイレンサーが装着されていた。

警官たちはラマッラー - エルサレム道路の車線を封鎖し、交通を滞らせた。住民たちが現場に集まり始めると、警官たちは交差点に向けてスタングレネード〔閃光手榴弾〕を投げ込み、催涙ガス弾を発射した。約 25 人のパレスチナ人の 10 代や若い男性たちが近くのガソリンスタンドに集まり、ある時点で、そのうちの何人かが約 100 メートル離れた場所からイスラエル軍に向けて投石を始めた。

警官の一部は、交差点を見下ろす商業ビルに侵入し、建設中の 3 階まで上がった。近隣住民が撮影した動画には、床に伏せて狙撃手の姿勢をとる警官の姿が映っている。ガソリンスタンド付近に集まった若者たちの中には、ウム・ア・シャレイェット出身の 18 歳のアムル・マルブと、彼の友人の J. と A. の 2 人がいた。3 人は襲撃の話を聞いてその現場に駆けつけた。マルブと J. は投石に加わった。ある時点で、マルブと J. は道路を渡り、コーヒースタンドの陰に隠れた。そこで、彼らはカフル・アカブ在住の 15 歳のサミ・マシャイエクと出会ったが、彼とは面識がなかった。3 人はスタンドの陰に隠れ、こちらに向かって来ようとしたが、スタンドから約 50～60 メートル手前で止まった警官 5、6 人に向かって投石していた。

その直後、J. は銃声を聞く間もなく実弾が手に命中し、近くの路地へ駆け込んだ。その路地から、同じく撃たれたマシャイエクが車にもたれかかり、その後地面に倒れるのを目撃した。マルブはラマッラー方面へ逃げたが、その後、彼も撃たれ、スタンドや警官たちから約 30 メートル離れた場所で倒れた。どちらの場合も B'Tselem が話を聞いた目撃者の誰も、通りで警官たちの発砲を見ておらず、銃声も聞いていなかった。

マルブが倒れた後、彼を搬送しようとした住民たちに向けて、警官たちは銃とレーザーポインターを向け続けた。数分が経過してから救急隊員が到着し、なんとか彼を自家用車に引きずり込み、現場から運び出した。車内から、途中で救急車に移され、ラマッラーの病院へ搬送されたが、到着から約 40 分後に死亡が確認された。

マシャイエクは住民によってカフル・アカブの診療所に運ばれた。そこから救急車でラマッラーの病院へ搬送されたが、到着直後に死亡が確認された。

若者たちが撃たれた後、治安部隊は数分間現場に残留した。午前 0 時 30 分頃、彼らはこの地域を離れ、エアポート・ロードを経由してカランディア検問所方面へと向かった。

ハアレツ紙に掲載された警察の声明によると、「国境警察部隊は夜間に、部隊に危害を加え、公共の秩序を乱そうとした敵対的な勢力に対して作戦を展開した」とし、さらに「作戦中、数十人の容疑者が関与する激しい騒乱が発生した。これには、部隊への大規模な投石や照明弾の発射が含まれていた。さらに、周辺で激しい銃声が聞こえたが、その発射源は特定されていない[...] 部隊は、部隊に現実的な危険をもたらした容疑者 4 人に発砲した。容疑者らは医療関係者によって治療のため搬送された」とあった。

しかし、B'Tselem の調査によると、特殊警察部隊はカフル・アカブに侵入し、若者や 10 代の少年たちとの間に「摩擦」を引き起こし、彼らに危害を加えることを目的とした作戦を展開していたことが判明した。一部の警官は事前に商業施設の 3 階に陣取り、他の警官は道路の真ん中に出て、若者たちに石を投げさせるよう仕向け、武力行使を正当化できる状況を意図的に作り出した。その後、彼らは若者たちの上半身を狙って発砲した。これは、ヨルダン川西岸地区におけるイスラエルの違法な発砲方針がまたも実行されの事例であり、この事件により 2 人の若者が命を落とした。

マルブの友人 J.は次のように語った。

「アムル・マルブ」と A.とは友達で、普段は夕方に待ち合わせ、ウム・ア・シャラエト周辺で過ごしていました。2025 年 11 月 20 日（木）、午後 11 時 30 分頃、私たちがその一帯にいたところ、ソーシャルメディアを通じ、占領軍部隊が近くにいて、カフル・アカブ町へ向かっているという情報を得ました。

私たち 3 人は A.の車でカフル・アカブ地区へ向かいしました。私は後部座席に座り、A.が運転し、アムルは彼の隣に座っていました。午後 11 時 50 分頃、私たちはシカル交差点に近づきました。カランディア検問所へと続く車線上に占領軍の車両 2 台が見えました。A.は同じ車線を走行しており、それらの車両を追い越した際、数人の将校が車両の横に立っているのが見えました。別の将校グループは、車両が停車していた建物の入り口付近にいました。

私たちはそのまま走行を続け、ア・シャニ・スーパーマーケットに到着すると、U ターンして、ラマッラー方面へ向かう反対車線を戻っていき、その後、シカル交差点（空港道路）方面へ車を走らせて、そこで車を止めて降りました。

私たちは徒歩でシカル交差点の方へ歩き、ガソリンスタンドの近くで立ち止まりました。そこには十代の若者や若い男性たちが集まっていたので、そこで、警官たちがどう動くか見守りました。ある時点で、ラマッラー・エルサレム間の幹線道路の真ん中に数人の警官がいるのが見えました。それから、午前 0 時 10 分頃だったと思いますが、私たちの隣にいた若者たちの何人かが、警官たちは遠くにいたにもかかわらず、石を投げ始めました。

アムルも、警官たちに石を投げた若者の 1 人でした。彼は私の親しい友人で、彼を 1 人にしておきたくなかったので、そのうち私も加わって投石を始めました。警官たちが私たちにどんどん近づいてくるのを見て、私たちは 2 人とも道路の中央、ラマッラー市へと続く車線に近い場所へ移動し、コーヒースタンドの陰に隠れました。友人の A.はシカル交差点（空港道路）に残りました。

アムルと私は、スタンドの陰から警官たちに向かって石を投げ続けましたが、警官は私たちから 50～60 メートルほど離れた場所にいました。そのスタンドの陰には、見知らぬ背の高い男がいました。

あるタイミングで、投石するために右手を上げると、手に非常に強い衝撃が走りました。手を下ろすと、出血していましたが、銃声は一切聞こえませんでした。アムルはすぐに警官たちから離れ、ラマッラー市へと続く道路の方へ走り去り、私はア・スガイヤー地区へと続く通りの方へ走ることにしました。

ちょうどその時、スタンドの後ろに私たちと一緒にいた男が、胸を撃たれるのを目撃したのです。彼はそこに停まっていた車に寄りかかろうとしましたが、その車はすぐに走り去ってしまいました。ア・スガイヤー地区へと続く通りへ向かう途中、振り返ると、その男が倒れ、体の下から血が流れているのが見えました。自分の命が危ないと思い、彼のもとへは行きませんでした。また、アムルのことも心配でした。彼が見当たらず、何が起きたのか分からなかったからです。

ある男性に出くわして、彼の車に乗せてもらい、パレスチナ医療複合施設へ向かいました。そこに着くと、アムルが胸に銃弾を受け、危篤状態にあると告げられました。医師たちは私の傷の手当てをし、手術が必要だと告げました。その後、私の右手の小指に 2 発の銃弾が直撃し、骨が粉碎されていたことが判りました。その間に、アムルが亡くなったことを知りました。私は彼の葬儀に出席するため、手術を受けることを拒否しました。

葬儀は同じ日、2025 年 11 月 21 日（金）の午後の礼拝後に行われました。その後、私は手術を受けるために病院に戻ったのです。

後日、コーヒースタンドの後ろで私たちの隣に立っていた男の名前がサミ・マシャイエクだと聞きました。その後、彼もまた胸に銃弾を受けて死亡していたことが判りました。

3 人目の友人 A.は、2025 年 11 月 25 日の証言で次のように述べた。

友人である J.とアムルの 2 人が、スタンドの裏から逃げ出したとき、私には J.がア・スガイヤー地区へと続く通りの方へ走り去るのを、そしてアムルがカフル・アカブ地区からラマッラー市へと続く幹線道路の方へ走っていくのが見えました。アムルは振り返ってどこに警官たちがいるが確認していましたが、その瞬間、パン屋の前の地面に倒れ込みました。私は急いで空港道路の方へ走りました。というのも、幹線道路上の警官たちが、私が若者たちのグループと一緒に立っていたガソリンスタンドに近づき始めていたからです。

空港道路の脇に停めておいた自分の車に乗り込み、パレスチナ医療複合施設へと車を走らせました。夜遅く、道路の交通量も殆どなかったため、5 分もかからずに到着しました。到着すると、アムルが既に搬送されていました。医師たちが蘇生措置を試みているのが見えましたが、成功しませんでした。アムルは、病院に搬送されてから 30 分後、医師たちから死亡宣告を受けました。そこで、彼が胸に受けた銃弾によって死亡したことを知りました。

近隣の企業で働いていた N.M.は、2025 年 11 月 23 日の証言で次のように述べた。

2025 年 11 月 20 日（木）午後 11 時 30 分頃、私は地元の企業で勤務中でした。突然、2 台の軍用車両がカランディア検問所の方角からやって来て、店の前に停車しました。それらの車両は通常のジープよりも大きく、10 人から 12 人ほどの国境警察官が降りてきましたが、そのうちの何人かは覆面をしていました。彼らはヘルメットに小型の懐中電灯を付け、ライフル銃の銃身の前端には円筒形の装置が見えましたが、それはサイレンサーだったと思います。

警官たちは店の前で数分間立ち尽くした後、そのうちの 1 人が私たちのところへやって来ました。その警官は覆面をしておらず、眼鏡をかけていました。彼は、この商業センターに、私の職場の近くの入り口以外に別の入り口があるかどうかを尋ねてきました。他の警官たちは外に留まり、私や他の従業員たちに向けて銃を構え、銃に付いたライトのレーザー光線は私たちを照らしていました。

ここには他の入り口はないと答えると、数人の警官が商業施設の中に入っていくのが見えました。話しかけてきた警官が去るとすぐ、私たちは彼らとの接触を避けるため、ガラス扉を閉め始めました。一部の警官はその施設の入り口に立ち、シカル交差点の方に向かってスタングレネード〔閃光手榴弾〕や催涙ガスを投げ始めました。

窓越しに、警官たちが施設上層階へと続く階段の方へ向かっていくのが見えました。しかし、警官たちは私たちに気づき、銃口を私たちに向けながら、眼鏡をかけた警官が窓を閉めるよう命じました。その時点で、警官たちの幾人かは階段へと続く廊下に立っていました。窓を閉めた後、私たちは彼らから離れ、何が起きているかをソーシャルメディアで追いかけてみました。

警官たちの建物突入から約 30 分後、ソーシャルメディア上でシカル交差点周辺で負傷者が出ているという報告が出回り始めました。奇妙なことに、その 30 分間、私は実弾の発砲音を一度も耳にしませんでした。当初考えていた通り、彼らのライフルには確かにサイレンサーが装着されていたに違いないと理解しました。

この出来事を目撃した T.T.は、2025 年 11 月 23 日の証言で次のように語った。

エルサレム・ラマッラー道路のカランディア検問所へと続く路地に 2 台の軍用車両が停まっており、さらに、まだ建設中の商業施設のフロアに数人の警官が立ち、道路を見下ろしているのを見かけました。何人かの若い男たちが、幹線道路に立っている警官たちに向かって石を投げ始め、石を手にした若者たちが近づいてくるのを見ましたが、店主たちは、発砲で店が被害を受けることを恐れて、彼らを押戻しました。驚くべきことに、警官たちは投石に反応せず、その代わりに、道路を走行する車に向けてライフルを構えました。その後、彼らはその場所を通過しようとする車両の通行も阻止しました。

若者たちは軍用車両のそばにいた警官たちに石を投げつけ、その後アブ・アル・リッシュのガソリンスタンドの方へ引き返しました。丁度その時、私が目にしたのは、5、6 人の警官が、彼らが突入した商業施設の入り口に停まっていた軍用車両の方から徒歩で近づいてくる姿でした。彼らが私から 30～35 メートルほど近づいたとき、彼らが特殊部隊に違いないと気づきました。ライフル銃の銃身にはサイレンサーが装着され、ヘルメットには懐中電灯とカメラが取り付けられていました。私は近くのレストランに入り、ガラス扉を閉めて、ガラス越しに様子を見続けました。

警官たちは、軍用車両が停まっている車線の反対側へ渡り、狙撃兵たちがいる商業施設の向かいにある建物へと向かいました。それと同時に、若者たちがシカルというコーヒースタンドへ駆け寄り、その陰に隠れて警官たちに向かって投石を始めました。それでも警官たちは反応せず、銃声も聞こえませんでした。突然、若者たちが四方八方に走り去り、そのうちの 1 人が奇妙な歩き方をしていたので、私はレストランで働く若者たちに、銃声は聞こえなかったが、その男は怪我をしているようだと言いました。彼がうつ伏せに倒れ、その下から血が流れているのが見えました。私は周囲の人々に、彼は狙撃手に撃たれたに違いないと言いました。というのも、そのスタンドのおかげで、通り上の警官からは若者たちは見えなかったのですが、高台に位置する狙撃手からは姿を隠せなかったからです。

これは午前 0 時 20 分の出来事でした。

私は「彼は死んだ！」と何度も大声で叫びました。大きなゴミ収集車が通りかかったので、運転手に止まってくれるよう呼びかけたのです。私はトラックに隠れて、負傷した男性を助けに行きたかったのです。運転手に向かってレーザー光線が照射されているのが見えましたが、その運転手はそのまま走り去ってしまいました。

WhatsApp のグループチャットに、誰かが負傷しており救急車が必要だと書き込みました。数分後、数人の若い男性たちが到着しましたが、彼らはすぐに走り去ってしまいました。私には銃声は聞こえませんでした。その時点で、道路上にいた警官たちは負傷者から僅か数十メートルの距離にいました。

午前 0 時 28 分、オレンジ色の緊急用ベストを着た若い男が現れ、負傷者を引きずり始めました。彼はなんとか数メートル引きずりましたが、その後、数人の若者が乗った車が彼らの横に停車しました。彼らは負傷した男性を車に乗せると、すぐに走り去りました。負傷した男性が搬送された後、警官たちは彼が倒れていた現場へ向かい、数分間その場に留まった後、徒歩でシカル交差点へと向かいしました。彼らはドリンクスタンドの横に立っていましたが、やがて 2 台の車両が到着して警官たちを乗せ、空港道路を経由して走り去りました。

アブ・アリッシュのガソリンスタンド従業員は証言の中で次のように述べた。

このガソリンスタンドは、シカル環状交差点に位置しており、空港道路とラマッラー・エルサレム道路、そしてア・スガイヤー地区へと続くアル・バルクーク通りが交差する地点にあります。ガソリンスタンド自体は、ラマッラー・エルサレム道路の西側、カランディア検問所とエルサレム市へと続く車線沿いにあります。

2025 年 11 月 20 日（木）、午後 11 時 30 分頃、私がガソリンスタンドで勤務中、ソーシャルメディアのグループを通じて、占領軍部隊がカフル・アカブの北にあるウム・ア・シャラエト地区にいました。その後、車両 2 台を含むその部隊が、カフル・アカブ地区に向かって進んでいることが判明しました。数分後、その 2 台の車両が空港道路を走り、ラマッラー・エルサレム幹線道路に向かっていくのを目撃しました。

車両はカランディア検問所へと続く車線へと進み、ガソリンスタンドから約 100 メートルの地点で停止し、その際、車両の正面は検問所の方を向いていました。それらは通常の軍用車両よりも大型でした。

彼らが停車した後、ソーシャルメディア上で、警察がア・ザハラ商業施設を急襲しているという情報が相次ぎました。また、建設中の同施設の 3 階に狙撃手が配置され、ラマッラー・エルサレム道路上には警官が配置されており、軍が両方向の交通を遮断しているという報告もありました。その間、シカル環状交差点の周辺には、20 人から 25 人ほどの 10 代の若者や若い男性たちが集まっていました。彼らは 15 歳から 22 歳くらいに見えました。そのうちの何人かが石を投げ始めると、治安部隊は直ちに催涙ガス弾

を発射し、スタングレネード〔閃光手榴弾〕を投げつけて応戦しました。

私は、十代の若者や若い男性たちに、怪我をしないようその場から離れるよう呼びかけました。発砲でガソリンスタンド内の物が破損するのではないかと心配もありました。私は元受刑者であるため、怪我をしたり逮捕されたりすることを恐れて、ガソリンスタンドのゲートを閉め始め、それから、その場を離れて自宅へ戻りました。

家に着くと、ソーシャルメディア上では既に、シカル環状交差点付近で 2 人が重傷を負ったという情報が流れていました。30 分も経たないうちに、アムル・マルブとサミ・マシャイエクという 2 人の若者が負傷により死亡し、同じ地域でさらに 6、7 人が負傷したという話を耳にしました。

サミの父親イブラヒム・マシャイエクは、2026 年 3 月 30 日に行った証言の中で次のように述べた。

私は 7 人の子どもの父親で、その中には 2025 年 11 月 21 日に命を落とした 16 歳の息子サミもいました。サミは長男だったため、家族の中である種の特別な存在でした。彼は高校 2 年生で、車やバイクに非常に興味があったため、運転免許の取得を心待ちにしていました。妻と私は、彼が学校を卒業したらすぐに運転教習の費用を負担すると約束していました。

サミの最も際立った特徴は、その社交性と、周囲の人々からどれほど愛されていたかということでした。葬儀の当日、大変多くの同年代の少年たちが葬列に加わっているのを見て驚きました。彼を失ったショックからまだ立ち直れていなかった私にとって、これはある種の慰めとなりました。今日に至るまで、彼の母親も私も、サミが私たちのもとを去り、二度と戻ってこないという事実を受け入れることができていません。

サミが最後に私たちに話しかけた時、自転車で友達に会いに行くと言っていました。しかし、帰宅する代わりに、怪我をしたという知らせが届き、その後、息子が亡くなったことを知らされました。

この悲劇を乗り越えるのは非常に困難です。先ほども述べたように、サミは私たちの最初の子どもの、その誕生を私たちは大きな喜びで祝い、彼は私たちに計り知れない幸せをもたらしてくれました。しかし、しかし、どんなに辛い思いをしても、私たちの苦しみは、この占領のせいで子供を失った他の親たちの苦しみと何ら変わりはないのです。私たちに言えるのはただ、「私たちは神に属し、神のもとへ帰っていく」ということだけです。

サミの母も私も、彼の死という痛ましい知らせを受けた時の苦しみは、言葉では言い表せません。それは私たちの力の及ぶところではありません。そして、人前ではいくら強がっていても、当然ながら感情や悲しみに打ちひしがれてしまう瞬間もあります。

ムハンナド・タレク・ムハンマド・ズガイル (17 歳)

ヘブロン、2025 年 12 月 2 日



2025 年 12 月 2 日、ムハンナド・ズガイルは車を運転中に、彼を逮捕する作戦の実行中に兵士らに射殺された。軍によると、その数時間前、ズガイルはヘブロン西部の検問所で兵士を車で轢いたという。メディアの報道によると、その兵士は軽傷を負った。軍はまた、ズガイルが兵士の銃撃により負傷後、現場から逃走し、車を運転しながら兵士たちに脅威を与えていたとも述べた。

アフマド・ハリル・アフマド・ラジャビ (17 歳)

ヘブロン、2025 年 12 月 6 日



2025 年 12 月 6 日（土曜日）の夕方、8 人の兵士がヘブロンのベエル・シェバ通りを進み、その地域の車両を停止させ、店舗を搜索した。兵士たちは停止車両のうち少なくとも 2 台の鍵を没収し、運転手を車内に座らせたままにした。午後 9 時頃、兵士たちがワディ・ア・トゥファ通りとバブ・ア・ザウィヤへと続く交差点に差し掛かった際、1 台の車が通りを通りかかった。その運転手のアフマド・ラジャビ (17 歳) は、ワディ・ア・トゥファ通りからベエル・シェバ通りに入り、ジャバル・ア・シャリフ地区にある自宅から、ヘブロンのアル・アハリ病院にいる友人を訪ねる途中だった。

その車は、東エルサレム在住の彼の親族所有で、黄色（イスラエル）のナンバープレートが付いていた。ラジャビが兵士たちの横を通り過ぎて数メートル先まで進んだ後、兵士たちは彼に「止まれ」と叫んだ。車と兵士たちの間にはコンクリートのバリケードがあったため、ラジャビはゆっくりとバックした。その瞬間、明白な理由もなく、兵士の 1 人が空に向かって数発発砲し、続いて別の兵士がライフルをラジャビに向けて車に向かって走り寄り、車のドアを開けようとした。銃声と自分に向かって突進してくる兵士に明らかに怯えたラジャビは、後退を続け、ドアを開けようとしていた兵士に車をぶつけてしまった。その直後、7 人の兵士が車に向かって集中射撃を行った。この無差別な銃撃の結果、ヘブロン市役所に雇用されていた清掃作業員で、業務の一環として現場にいた 53 歳の「ジアド・アブ・ダウッド」も、銃弾を受けて死亡した。ラジャビは車を止め、ワディ・ア・トゥファ通り方面へ走ろうとしたが、数メートル進んだところで車は停止した。

激しい銃撃は約 32 秒間続いた。その後、兵士たちはラジャビの遺体を車から運び出し、アブ・ダウッドの遺体と共に軍用車両に積み込んでその場を去った。アブ・ダウッドの遺体は後に遺族に引き渡されたが、ラジャビの遺体は、彼が運転していた車と共に軍によって拘束されている。事件後、兵士たちは現場付近の店舗を家宅搜索し、ドアを破壊して、その地域にある全ての防犯カメラの録画機器を没収した。ここで紹介する映像は、機器が没収される前にコピーを保存することに成功したある店舗のオーナーのおかげで残されたものである。

事件後、軍は X アカウントに次のような声明を投稿した。「先ほど、2 人のテロリストが車で、ユダヤ旅

団のショーター検問所で作戦任務に就いていた空挺旅団の部隊に向かって猛スピードで突っ込んできた。部隊はテロリストに向けて発砲し、彼らを殺害した」。

しかし、軍が「テロリストを殺害した」と主張する場合によくあることだが、これは軍による無謀な発砲方針の犠牲となった一般市民に対する不当な殺害であった。パレスチナ人を殺害した責任者を起訴しないという、制度的・組織的な失敗を鑑みると、アフマド・ラジャビとジアド・アブ・ダウッドの死も、間違いなくうやむやにされ、責任者はその行為について問われることはないだろう。

ある目撃者は、2025 年 12 月 9 日に行った証言の中で次のように述べた。

2025 年 12 月 6 日（土）午後 8 時頃、周辺には占領軍の兵士たちがいました。彼らはベエル・シェバ通りの西側から、「ヘブロン・センター」複合施設の裏口を中心に現れ、通りを歩き回り、数台の車両を停止させて検査を行い、鍵を没収していました。

兵士たちは移動を続け、最終的にベエル・シェバ通り、ワディ・ア・トゥファ通り、オールド・ア・シヤララ通りが交差するエリアに到達しました。そこには、チェックポイント 56 や通行止めとなっているア・シュハダ通りへ続く幹線道路に繋がる大きな中央分離帯があります。このエリアで、約 8 人の兵士が店の中の搜索を始めました。私は彼らの向かい側にいて、その様子を見守っていました。

その頃、兵士たちは私から約 10 メートル離れた場所で 2 台の車を止め、両方の運転手から車の鍵を取り上げました。兵士たちの態度は非常に攻撃的なものでした。

午後 9 時頃、黄色のナンバープレートを付けた白いトヨタ・カローラが、見たところオールド・ワディ・ア・トゥファ通りから現れ、市内中心部からの主要な脱出ルートであるベエル・シェバ通りへと続く通りの方へ右折しました。

兵士たちは運転手に停止するよう怒鳴りつけ、その車は私がいた店から約 5 メートル離れた場所で止まりました。運転手はバックギアに入れ、兵士たちが立っている場所の近くで車が止まるまで、数メートル後退しました。ベエル・シェバ通りの交通規制のために、市が約 1 週間前に設置したコンクリートのバリケードが、車と兵士たちを隔てていました。

兵士たちは運転手に銃口を向け、ヘブライ語で怒鳴りつけていました。数秒後、兵士の 1 人が、どうやら空に向かって発砲し、続いて別の兵士も怒鳴りながら運転手に近づいてきました。運転手が再び後退すると、兵士たちは車に向かって一斉射撃を浴びせました。私は怖くて店の中に座ったままでしたが、兵士たちは素早く車に向かって進み寄っていました。

その後、兵士たちはベエル・シェバ通りの店舗の搜索を開始し、店舗内や通りに設置されていた防犯カメラの録画機器をすべて没収しました。兵士たちが人が通りを行き来するのを許可したのは深夜 0 時頃になってからで、ようやく私は帰宅できました。

別の目撃者は、2025年12月9日に行った証言の中で次のように述べた。

2025年12月6日（土）午後8時頃、私はコンクリートの階段に座り、携帯電話でニュースサイトを見ていました。すると、私から約10メートル離れた場所、ベエル・シェバ通りとワディ・ア・トゥファ通りが交差する交差点付近、ザハダの店々の近くで、数人の兵士がいるのが見えました。

座っていた場所から西へ約20メートル離れたベエル・シェバ通りに、さらに2人の兵士が立っていました。兵士たちは、右車線と左車線に1台ずつ停まっていた2台の車を止め、運転手から鍵を預かり、運転手を車内に待たせたまま立ち去りました。兵士たちは、特にガザでの戦争が始まって以来、ほぼ毎週この地域にやってきました。また、この通りは頻繁に通行止めになり、それは入植者たちが「オトニエルの墓」と呼ぶ場所へ向かう際にここを通るためです。その墓はベエル・シェバ通りにあり、私が座っていた場所から西へ約300メートルのところにあります。

午後9時頃、私がまだ階段に座っている間に、黄色いナンバープレートの白い車が通り過ぎました。その車はオールド・ワディ・ア・トゥファ通りから来て、市外へ向かう車線に入り、ベエル・シェバ通り方面へ右折しました。その瞬間、兵士たちが運転手に「止まれ」と叫ぶ声が聞こえ、運転手は速度を落としたが完全に停止はせず、その後、兵士たちの方へバックし始めました。車と兵士たちの間には、高さ約80センチメートルのコンクリート製のバリケードがあり、これは市当局が約1週間前に車線を分けるために設置したものでした。

数秒後、銃声が聞こえ、その後、兵士たちの怒鳴り声とともに銃声がさらに頻繁に響いていました。車は、最初に停止した場所から約15メートル離れた、ベエル・シェバ通りとワディ・ア・トゥファ通りを結ぶ道路の中央に向かって後退を続け、その後、数メートル前進していました。

その周辺には数人の清掃作業員がいて、彼らは叫び声を上げながら後退し始め、その中の1人が負傷したようでした。その作業員は、バブ・ア・ザウィヤ地区へと続くオールド・ワディ・ア・トゥファ通りの入り口付近で、2つの車線を分けるコンクリート製仕切りブロックの1つに倒れ込んでしまいました。

数人の武装した兵士がその車に向かって進んできましたが、現場の緊張とパニックのため、私は身の安全を危惧し、その場を離れました。

ムハンマド・イヤード・アバハラ（17歳）

ジェニン地区シラト・アル＝ハリーティヤ、2025年12月13日



2025年12月13日、兵士たちはアル・ヤムーンの町を急襲し、衝突が発生した。17歳のムハンマド・アバハラが路上で兵士たちに向けて即席爆発装置（IED）を投げつけ、逃走を試みたところ、近くの家屋を占拠していた兵士たちが彼を射殺した。その後、兵士たちは彼の遺体をその家の入り口まで引きずり出し、パレスチナの救急隊員が彼に近づくのを阻止した。彼の遺体は約10分後に軍用車両に積み込まれた。アバハラはイスラム聖戦組織の軍事部門の活動家であった。イスラエルは現在、彼の遺体

を拘束している。

ムハンマドの母親アイダ・アバハラ（41 歳、5 人の子どもの母）、2026 年 3 月 26 日に行った証言の中で次のように語った。

私が「ハムード」という愛称で呼んでいた息子のムハンマドは長男で、夫のイヤードと私が結婚してから 3 年後に生まれました。

ムハンマドは勤勉な学生で、イヤードと私は、息子が高校を卒業して卒業証明書を受け取り、大学進学
の道を歩めるようになるのを心待ちにしていたましたが、運命がそれを阻んでしまいました。イスラエル
軍は、中等教育を修了する機会を得る前に、彼を殺害したのです。

ムハンマドは 2025 年 12 月 13 日（土曜日）に殺害されました。今でも覚えているのは、その前日、息
子が私に、ロシアの作家ドストエフスキーの生涯に関する文章を理解するのを手伝ってほしいと頼ん
できたことで、それはアラビア語のカリキュラムの一部でした。ムハンマドはこの文章に興味を持って
おり、そこには、政権を批判する思想を議論していた人々について書かれていました。抑圧的な政府と
その役人たちは、彼らがクーデターを企てていることを知ると、抗議者たちを逮捕し、その 1 人であつた
ドストエフスキーは死刑を宣告されました。しかし、処刑が予定されていた当日、彼が絞首台に立た
されたその時、死刑判決は取り消され、4 年間の重労働刑に減刑されるのです。

今でも、この文章に対する息子の反応や、彼がドストエフスキーの生涯にどれほど深く没頭し、集中
していたかを覚えています。私がその物語を説明している間、彼の興味が非常に深いものだと感じました。
私の専門は社会科なので、彼のために物語の内容をわかりやすく説明することができました。この物語
は、4 年間の重労働を経て、収監中に人生を変え、回顧録を執筆しようと決意した男性について描かれた
ものです。

ムハンマドは「お母さん、その話を説明してもらって、意味が分かってきたよ。『彼は生まれ、生き、そ
して死んだ』、あるいは、実際には『彼は生まれ、生き、そして死ななかった』ってことだね」。私は彼
に「この 2 つの生き方のうち、どちらが好き？」と尋ねると、彼は後者の選択肢、つまり『生まれ、生
き、そして死ななかった』方だと答えました。なぜなら、社会には他者のために善行をなし、将来の世
代に恩恵をもたらす遺産を残せる人々が存在するからです。そして、自分の土地や祖国を守る者は誰で
あれ、美しい遺産を残すのです。

彼が殺された日、ムハンマドは朝起きて、兄弟や妹と一緒に朝食をとりました。彼は高校の最終学年を
始めたばかりだったので、その日は一日中家にいて勉強していました。

その日、私はムタラト・ア・シュハダという村に住む、出産したばかりの姉を訪ねていました。姉の家
にいる間、姉の子どもたちと私は、息子のムハンマドの様子を確かめるために、WhatsApp のビデオ通
話で彼と話していました。彼は大好きな食べ物 - オリーブオイル、ザアタル [ミックススパイス]、ラバ

ネ [塩味の水切りヨーグルト] - を食べていました。彼はいつも私に、そんな一皿を作ってほしいと頼んでいたものでした。

その後、私はアル・ヤムンの自宅に戻り、家事をし、子どもたちの世話をし、翌日の日曜日、学校に備えて宿題を手伝ってあげていました。

午後 8 時半頃、ムハンマドが勉強と宿題を終えたので、近所の友達に会いに外に出たいと言いました。これはいつものことでした。彼が友達に会いに外出し、しばらく一緒に過ごしてから帰宅するのは、私たちにとって日常茶飯事でした。

午後 9 時半頃、私は家族に夕食を用意していました。ムハンマドはまだ友達と出かけていたので、電話をかけたり、WhatsApp でメッセージを送ったりして一緒に食事をしようと誘ったのですが、彼は応答しませんでした。私の WhatsApp メッセージを彼が見たかどうかさえ、はっきりしませんでした。

私は心配になり始め、親戚や兄弟姉妹、夫の兄弟姉妹にメッセージを送り、ムハンマドが誰かのところを訪ねていないか尋ねました。当時、アル・ヤムンには軍は存在しておらず、ムハンマドが隣町のシラト・アル・ハリティヤに行ったかもしれないなどとは、思いもよらなかったのです。

しかし、ムハンマドは電話にもメッセージにも応答せず、私は疑念を抱き、不安を感じ始めました。それは、どの母親にもある自然な恐怖でした。夫と私は外に出て、何が起きているのかを確認し、ムハンマドを探すために近所を歩き回りました。ある人に出くわし、この地域で何が起きているのか尋ねると、彼はシラト・アル・ハリティヤで襲撃があり、イスラエル軍がそこで身元不明の 2 人を負傷させ、そのことがソーシャルメディアに投稿されていると教えてくれました。その時点で私の不安は募り、その身元不明の人々のうちの 1 人が私の息子、ムハンマドではないかと恐れしました。

家に帰ると、親戚たちが次々と集まり始めていました。彼らが「ムハンマドが殺された」と口にする前から、彼らの表情から私はその事実を悟っていました。親戚たちがムハンマドがイスラエル軍の銃撃で殺されたことを確認してくれ、私は計り知れない痛みを感じ、涙が溢れ出しました。

ムハンマドはいつも、楽しい雰囲気を作り出すのが上手で、家の中を喜びと笑い声で満たしてくれており、小学 1 年生の妹カワタルをとっても可愛がっていました。

私の息子は兵士たちに殺され、遺体は軍に拘束されていますが、私はどうしても彼の遺体を引き取り、町の墓地に埋葬して、墓参りをして彼に別れを告げたいと切に願っています。

子どもたちも辛い日々を過ごしています。彼らはしきりにムハンマドのことを尋ねてきます。14 歳のイヒヤは、ムハンマドが殺されて以来、ショックで動揺したままです。髪の毛さえ抜け始めています。彼は特にムハンマドの喪失に苦しんでいます。

アンマル・ヤセル・ムハンマド・タアムラ (16 歳)

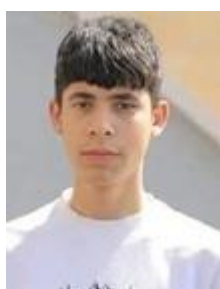
トゥク、ベツレヘム地区、2025 年 12 月 15 日



2025 年 12 月 15 日、ベツレヘム地区のトゥク町で、装甲ジープに向かって投石したアンマル・タアムラに、ジープから降りた兵士たちが約 30 メートルの距離から発砲した。彼は車で町の診療所に搬送され、そこからベイト・ジャラの病院へ移送されたが、そこで死亡が確認された。

ラヤン・ムハンマド・アブド・アル＝カデル・アブ・マッラ (サバネ)、16 歳

カバティヤ、ジェニン、2025 年 12 月 20 日



2025 年 12 月 20 日 (土) の夕方、数台の軍用ジープがジェニン地区のカバティヤ町の中心部に突入した。午後 7 時直前に、ジープの 1 台が町の中心部近くのア・サバネ地区の通りを往復し、繰り返しクラクションを鳴らして住民を困らせていた。若者たちのグループがそのジープの後を追って叫んだり口笛を吹いたりし、そのうちの何人かは遠くからジープに向かって投石した。

B'Tselem が入手した映像には、午後 7 時頃、ジープが同地区のメインストリートであるア・サバネ通りを走る様子が映っており、そこは、通りが 2 つの路地に分かれる Y 字路の近くであった。2 人の兵士が、一つの路地の入り口、交差点の中央にある家の角の陰に陣取っており、もう一方の路地からやってくる者には姿が見えないように隠れていた。1 人の兵士はひざまずいて銃をもう一方の路地に向けており、もう 1 人の兵士は彼のすぐ後ろ、壁際に立っている。3 人目の兵士が、ジープの近くまで戻ってきているのが見える。彼は進行方向とは逆向きに立ち、2 人の兵士と同様に、同じ路地に向けて銃を構えている。その兵士は一瞬フレームから消えるが、すぐに交差点に戻ってくる。今度はジープを伴っていない。彼は身をかがめて駐車中の車の陰に隠れ、路地を監視している。これら 3 人の兵士を除けば、その周辺には誰も見当たらず、辺りは静まり返っている。

兵士たちがもう一方の路地から出てくる人物を待ち伏せしている中、16 歳のラヤン・アブ・マッラ (サバネ) が、兵士たちに気づいていない様子で、路地をゆっくりと兵士たちの方へと歩いてくるのが確認される。映像からは、アブ・マッラが何も持っておらず、兵士たちには何の脅威にもなっていないことがはっきりと見て取れる。それにもかかわらず、彼が兵士たちからせいぜい 2 メートルの距離に近づいたとき、地面にひざまずいていた兵士が即座に彼に向かって連射し、彼は地面に倒れた。

アブ・マッラは約 20 分間、地面に横たわったままにされた。そして、兵士たちは彼の遺体をシートで覆い、数分後には到着した軍用装甲車に彼を乗せた。午後 7 時 30 分、事件発生から約 30 分後、兵士たちはアブ・マッラを乗せたまま、2 台のジープでその場を立ち去った。その晩遅く、家族は彼が死亡したことを知らされた。それ以来、イスラエルは彼の遺体を拘束し続けている。

発砲の瞬間から兵士たちが立ち去るまで、アブ・マッラは仰向けになったまま少なくとも 30 分間、微動だにできなかったが、兵士たちの誰も応急処置を試みようとはしなかった。また、兵士たちは、パレスチナの救急車で到着した医療チームが彼に応急処置を行うことも妨げた。自宅の外に救急車があるのを見かけたものの、負傷者が息子だとは知らなかったアブ・マッラの両親は、B'Tselem に対し、医療チームが兵士たちに阻止された後、再び現場へ向かおうとするよう説得したと語った。医療チームが再挑戦すると、兵士たちは彼らに銃を向け、引き返すよう命じた。B'Tselem に話をした救急救命士も、この証言を裏付けた。

ライアン・アブ・マッラが撃たれた現場。写真：アブドゥルカリム・サディ、B'Tselem

https://www.btselem.org/htmx/217855?destination=%2Fvideo%2F20260629_unshielded_childhood_palestinian_children_and_teenagers_killed_by_israel_in_the_west_bank_in_2025

軍側は、アブ・マッラが直前にレンガを投げつけ、撃たれた時点でもレンガを手に持っていたため、これに対する対応として発砲したと主張した。しかし、現場の映像はこの主張を否定している。

カバティヤ出身のワリド・サバネ（75 歳、8 人の子どもの父）は、証言の中で次のように語った。

私はカバティヤの町の西地区にあるア・サバネ地区で、食料品店を経営しています。

2025 年 12 月 20 日（土）、町に軍による襲撃がありました。午後 7 時頃、私が食料品店にいたところ、軍のジープの 1 台が、私たちの地区であるア・サバネ地区へと続く通りに到着しました。私は店内のテーブルの後ろに座ったまま、ジープが通りを行ったり来たりしてパトロールする様子を見守っていました。兵士たちはサイレンを鳴らし、クラクションを鳴らして住民を挑発し、嫌がらせをしていました。ジープが通りから分岐する路地の一つを通り過ぎるたびに、少年たちがジープに向かって叫んだり口笛を吹いたりする声が聞こえていました。

ジープが数回行き来した後、そのジープがその通りを離れて北へ向かって走り去るのを見ました。すると突然、2 人の兵士が南から徒歩でやって来て、店の向かい側、南にある家の一軒の陰に身を隠すのが見えました。店と家の角の間には、幅約 5 メートルの路地があります。2 人の兵士がしゃがみ込むのが見えたが、おそらく若者たちに気づかれないようにするためだと思いました。

私が座っていたカウンターの後ろからは、兵士たちが隠れている場所が見え、彼らは私から約 10 メートル離れたところにいました。しかし、旧市街の方から路地を歩いている人々の姿は見えませんでした。

私が 2 人の兵士を見ている間、そのうちの 1 人が 3 発から 5 発ほど発砲しました。兵士たちが私のすぐそばにいたので、衝撃を受け、とても怖かったです。別のジープが到着し、さらに多くの兵士が降りてくるまで、私はカウンターの後ろの椅子にじっと座り続けていました。

発砲の後、兵士の 1 人が店のドアを外側から閉めました。私はその隙に内側から鍵をかけ、それから

店とつながっている内側のドアを通して家の中に入り、家の中に留まりました。

事件当時、この地域では本格的な衝突は起きておらず、ただ叫び声や口笛が聞こえる程度でした。おそらく、通りから分岐する路地の1つを軍用ジープが通りかかった際、少年の1人が石を投げただけだったのだと思います。

K. L.氏の証言

2025年12月20日（土）午後7時頃、私はア・サバネ地区へと続く大通りを見下ろす家の屋上にいました。軍用ジープがクラクションを鳴らし、サイレンを鳴らして住民を威嚇し、挑発しているのが聞こえました。

ジープが通りを行ったり来たりしているのが見えました。兵士たちは、大通りから分岐して町の旧市街へと続く路地を通り過ぎるたびに、クラクションを鳴らしていました。ジープが路地の入り口を通り過ぎるたびに、子どもたちや若者たちが叫んだり口笛を吹いたりする声が聞こえました。時には、ジープに向かって石を投げることもありました。

ジープが数回行き来した後、私がいた場所から南へ約400メートルのところで、3人の兵士がジープから降りるのを見ました。そのうち2人は、通りの左側にある家の壁に沿って歩いて行きました。3人目の兵士は、ジープが北へ走り、旧市街へと続く路地を通り過ぎる間、その横を歩いて行きました。その場所は、ワリード・サバネの食料品店の近くで、私がいた場所から約100メートル離れたところでした。

私は、食料品店の向かいにあるオマル・サバネの家の裏に、2人の兵士が隠れているのを見ました。そこで、彼らが若者や子どもたちを待ち伏せしていることに気づき、彼らに警告しようと思いました。私は彼らに向かって叫びました。「気をつけろ！ 兵士たちが大通りのオマル・ア・サバネの家の角の陰に隠れているぞ」。

私は屋根の上にとどまり、事態の推移を見守りました。ある時点で、町の旧市街の方から、こっちに歩いて来る少年が見えました。すると、兵士の1人がその少年に3発から5発ほど発砲しました。私が目撃したところでは、その子は兵士たちが隠れていた角までたどり着いたのが見えたので、兵士はせいぜい2メートルほどの距離から撃ったのだろうと推測しています。

少年は仰向けに倒れ、しばらくすると、3人目の兵士が北側からやってきて、他の2人に加わりました。その後、兵士たちが先ほど降りていた軍用ジープが到着し、さらに「ネイマー」装甲兵員輸送車に乗った兵士たちも加わりました。兵士たちは現場に約30分間留まり、その間ずっと救急車がその少年に近づくのを阻止していました。結局、彼らは少年の遺体を担架に乗せ、軍用ジープに積み込んでその場を去りました。

私が屋上にいた間ずっと、若者たちは兵士たちと衝突することはありませんでした。彼らはただ叫んだ

り、口笛を吹いたり、兵士たちに声をかけたりしていただけです。時折、路地の奥といった遠くから石を投げていましたが、それは軍用ジープが走っている通りには届いていませんでした。

部隊が去った後、事件現場へ向かい、その少年が撃たれて倒れた場所に血痕があるのを見ました。彼は私たちの近所に住んでいるので、よく知っています。彼の名前はラヤン・アブ・マッラ（サバネ）です。

ラヤンの母親ナイフェ・サバネ（46 歳、6 人の子どもの母）は、2026 年 1 月 19 日に行った証言の中で、息子を失ったことについて次のように語った。

2025 年 12 月 20 日（土）午後 3 時頃、私は 2015 年にイスラエル軍によって射殺された長男、ヌール・アディンの墓参りに行きました。子どもたちのうち 2 人が私と一緒に来ました - 長男が殺された後に生まれ、長男にちなんで名付けられたヌール・アディンとジャダッラーです。息子のラヤンは、日曜日に予定されていた試験の勉強をするため、家に残っていました。

帰り道、私は少し買い物をしました。ラヤンが降りてきて、2 階にある私たちのアパートまで食料品を運ぶのを手伝ってくれました。

私たちが昼食を済ませた後、ラヤンはインスタントコーヒーを一杯淹れて、自分の部屋に入ったので、私は彼が夕方までそこにいるのだと思っていました。午後 6 時 45 分頃、建設現場で働いていた夫が帰宅しました。丁度その時、ソーシャルメディアで、軍が町の各地区を家宅捜索しているという情報を知りました。私はラヤンの部屋に入ると、ベッドサイドテーブルの上に、まだ一杯のままのインスタントコーヒーのカップが置いてありました。彼はコーヒーを飲んでおらず、家にもいなかったのです。私は、彼が近所の食料品店にでも、おやつを買いに行ったのかもしれないと思いました。

私はラヤンに WhatsApp でメッセージを送り、軍が町の各地区を家宅捜索していることを警告しましたが、返信はありませんでした。電話をかけましたが、彼の携帯電話がベッドの上に置かれているのを見つけました。夫が親戚に電話をしたところ、その親戚は近所でラヤンを目撃し、食料品店に向かって歩いていたということでした。そして、軍のジープが到着したとき、彼は驚いた様子を見せていたので、軍と遭遇しないように町の旧市街の方へ向かったかもしれないとのことでした。

午後 7 時頃、パレスチナの救急車が私たちの家の前に停車するのを見かけました。夫と一緒に外に出て、救急隊員に何が起きたのか尋ねました。彼らによると、私たちの家から約 250 メートル離れたワリード・サバネの食料品店の近くで、若い男性が脚を撃たれたのですが、兵士たちが救急隊員を阻止し、現場へ近づけない状態だということです。私は彼らにもう一度試してみるよう促し、自分が歩いてそこへ行くと言いました。そのとき、負傷した若者が私たちの息子ラヤンだとは知りませんでした。私は救急隊員と一緒に歩きましたが、兵士たちのところに着くと、彼らは私たちに銃を向け、レーザーライトを照射し、引き返すよう命じました。

その時点で、ラヤンが負傷者ではないかと非常に不安になりました。息子はこれまで逮捕されたことも

なければ、どんなトラブルにも巻き込まれたこともなかったからです。

私たちは救急隊員や近所の住民たちと共に、事件現場から約 200 メートル離れた交差点で約 30 分間待ちました。その現場は兵士たちに包囲され、封鎖されていました。その後、軍のジープが引き上げ始め、私たちは負傷者がいた場所へ向かいましたが、見つかったのは小さな血痕だけでした。私たちは恐れを抱いていたのですが、それが実はラヤンだとは知りませんでした。

私たちがそこにいる間、ソーシャルメディアに、ラヤン・アブ・マッラ（サバネ）という名の若者が兵士に撃たれて負傷し、軍が治療のために彼を連れ去ったという投稿が現れ始めました。その直後、親戚から夫に電話があり、ラヤンが死亡し、軍が遺体を拘束していると伝えられました。恐れてはいましたが、それでもその知らせは青天の霹靂のように私を打ちのめしました。私は兵士による銃撃で 2 人の息子を失ったのです。2015 年 12 月に殺されたヌール・アディン、そして 10 年後の同じ月に、今度はラヤンです。

今、私にとって最も重要なのは、息子のラヤンの遺体を取り戻し、兄の隣に埋葬し、私がいつでも墓参りに行けるようにすることです。

ラヤンは、大きな空白を残していきました。彼は弟妹たちの世話をし、いつも家庭を和やかに保ち、みんなを笑わせていました。弟たちのヌール・アディンとジャダッラーは、いつラヤンが帰ってくるのかと私に尋ねますが、私には答えようがありません。

カバティヤ市の救急救命士である M.氏は次のように語った。

2025 年 12 月 20 日（土）の午後 7 時 02 分、ある住民から「カバティヤのア・サバネ地区で、イスラエル兵が若い男性を撃った」という電話を受けました。私は、同じく救急救命士である弟の K.と共に、すぐに救急車で現場へ向かいました。私たちは誰が撃たれたのかは知りませんでした。

私たちはサバネ家のディワン（集いの場）に到着し、負傷した若者のいる場所へ向かおうとしましたが、イスラエル兵がそれ以上先へ進むことを許しませんでした。彼らが銃を私たちに向けてきたため、後退を余儀なくされ、ディワンのそばで立ち止まらざるを得ませんでした。時刻は午後 7 時 07 分でした。10 から 15 分ほど待ち、再び負傷した青年のもとへ向かおうとしました。そこでラヤンの母親に出くわし、彼女は救急車の横を通り抜けようとしたのですが、7 から 10 歩ほど進んだところで、私たちが兵士たちから約 200 メートル離れた地点にいた時、兵士たちが私たちに向けて銃口を向け、レーザーポインターを照射してきたため、私は彼女に引き返すよう頼みました。彼女は引き返し、私はもう少し前進したが、やがて私も彼らに押し戻されました。

私は再びディワンの近くで救急車を止め、ラヤンの両親を含む数人の民間人がその周りに集まりました。その時点では、誰も撃たれたのがラヤンだとはまだ知りませんでした。

そこで約 35 分間待っていると、軍用車両が走り去っていくのが見えました。その後、なんとか現場に辿り着きましたが、そこには負傷者の姿はありませんでした。見えたのは、小さな血痕と、その隣にある小さな石だけでした。数分後、ソーシャルメディアやパレスチナ DCO [地区調整連絡事務所] を通じて、ラヤン・アブ・マッラが兵士たちに射殺され、遺体が持ち去られたことを知りました。

イスラエル軍はカバティヤの町を繰り返し襲撃し、救急隊が銃撃された人々に到達するのを妨げ、私たちが職務を遂行するのを阻んでいます。